主幹・麻生路郎

# 川柳雑誌

六月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和七年六月一日發行（毎月一回一日發行）
第九卷 第六號
川柳雑誌社發行

**本社六月例會**

**日時** 六月十日(土)午後六時半

**會場** 大阪市南區千年町日本橋北詰西の辻北入東側 ちさせ倶樂部 電話南二四五五番

**兼題講演** 「自殺」三句 路郎選 川柳イデイオロギー 山雨樓

**會費** 金參拾錢

初心者の來會を歡迎致します

**暑中見舞の**

廣告が募る……

金五拾錢

◆一口 幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます

◇申込期間 七月十日迄 (八月號に掲載)

**川柳 加茂川句會**

**日時** 六月四日(土)午後七時

**會場** 京都市御池通河原町東入 京阪三條終點 於昭和圖書館

**講演** 「川柳の脈膊」 路郎師

**兼題** 「山」三句 幸男選

「夜」三句 琴人選

**會費** 金參拾錢

出席者全部に「川柳雜誌」一ヶ年分の合本(一圓五十錢で發せるもの)贈呈

主催 川柳雜誌社京都支部

後援 京都 川柳街發行所

大阪 川柳雜誌社

# 川柳雜誌 第九卷 第六號目次

## 文苑


柳友へ　麻生路郎(一)

武玉川初篇研究(一)　梅本秋農　森東魚(六)　蛭子省二

句を挾んだ對話　岩本素人(一五)

柳の絮(一四)　長野吉高(三一)

「川柳の夕」は輝く　(四一)

悼　茨木奈緒美　赤城晴夫(四七)

川柳の垢　B B B(二)


## 創作


不朽洞句稿　麻生路郎(五)

近作柳樽　麻生路郎選(一〇)

光耀抄　麻生葭乃選(二七)

川柳塔　同人・社友(二九)

粒々集　諸家(三一)

各地柳壇……(四九)

**一路集**(課題吟)

同伴　松盛琴人選(四四)

ぶらんこ　安西杏三選(四五)


◇


百號記念懸賞川柳發表　麻生路郎選(三三)

百號記念句會　福田鶴峰報(四九)

西之町MEMO　橋本綠雨(四四)

編輯の窓　路郎(六六)

川柳書架(四七)　(一〇)


◇


表紙題字　麻生路郎　麻生路郎

**地下鐵**

「川柳の夕」と私　西田艸樂(一六)

準備の日から　吉田水車(一八)

前衛記　橋本綠雨(二〇)

感謝の手　松盛琴人(二四)

句だより

# 柳友へ——

**創刊一〇〇號記念事業**　として三つの方法百號記念特輯號の刊行、祝賀と宣傳の催物「川柳の夕」の開催、百號句會を選び、矢繼早にその三つを完成いたしましたことを茲に謹んで御報告申上げると同時に、陰に陽に御後援下さつた柳友諸氏の御好意を深謝いたします。

**本號は一〇一號**　でありますから第二の創刊號ともいふべき重大な意義を持つて居ります。從つて本號が二〇〇號となつて再び二〇〇號を記念することは全日本柳壇のためにも就も慶賀すべき一事象であらうと思ひます。が、この事の完成の難易は一つに柳友諸氏の熱烈な支持がなかつたならば到底不可能なことでありますから今後共一層の御後援と御鞭韃を祈る次第であります。

**「川柳の夕」は輝く**（其の一）

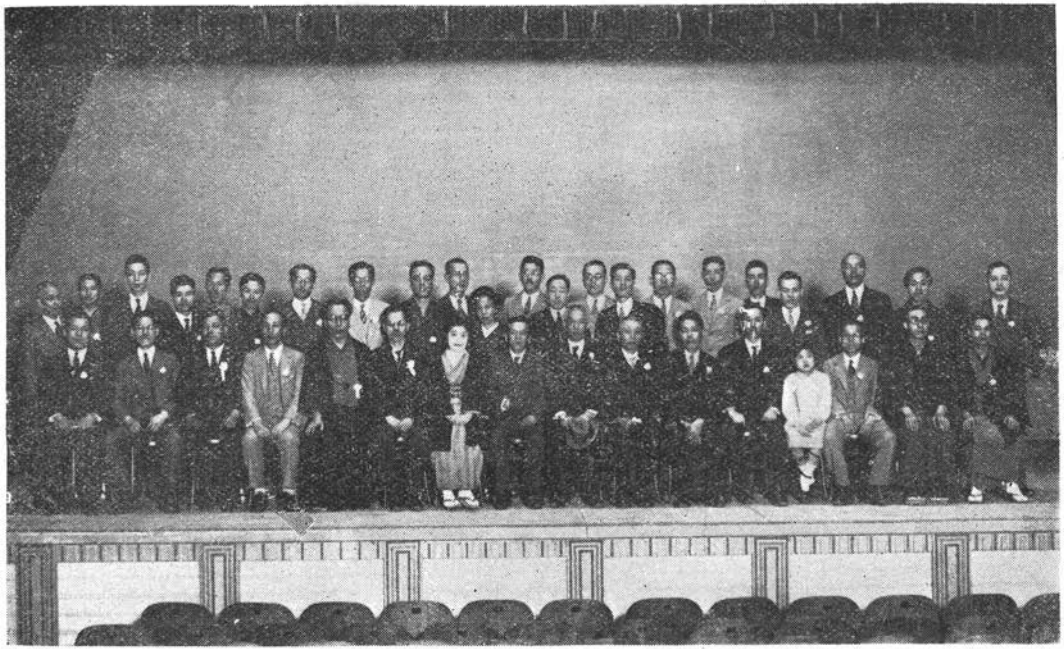
壇上莞爾として新らしい川柳を語るは本社路郎主幹。左端椅子につけるは司會者高尾亮雄氏。

## 「川柳の夕」は輝く（其の二）

火華！火華！言葉のスパーク！新らしい川柳を説く路郎主幹の片言雙語も聞き漏らすまいと熱心に耳を傾けてゐる聴衆のスナップ

## 「川柳の夕」は輝く（其の三）

歡びが一人々々の胸に高鳴る、この夜を永久に記念するため、主幹夫妻を中心に社關係の人々がカメラに收さまつた。



【前列向つて左から】一杉山雨樓、萬よし、綠雨、三太郎、路郎、葭乃柳秀、素人、琴人、ひろし、艸樂、少女、新水民郎、夕鐘【後列左から】紅、變人汀柳、蒼太、かほる、二南華水、里十九、雨迷、七美佐、翠夢夢裡、靈壺、奇可愛、豆秋雅幽、鶴峯、水車山月、裸人、鮎美の諸氏

# 不朽洞句稿

麻生路郎

首相逝く

待つたなしの歩にさゝれたる犬養毅

社會相椅子の影さへ痩せて見え

會社が仆れるかも知れぬ世にゴルフ

日傘繪日傘びつこの娘へ夏が來た

泣くな川水友禪も映る

# 武玉川初篇研究（一）

梅本秋農屋
森東魚
蛭子省二

先年來「座談會」が流行し、此頃は「△△氏に話を聽く座談會」といふ、中心點をきめての催が喜ばるる。

わが古川柳研究グループに於ける最年長者は梅本翁である。半白頭の私と丁度親子たるの差がある＝そこで、武玉川初篇を材料として、翁に昔話を聽く樂しみを得たいと武玉川愛誦者たる森氏の御參加を願つて、着手する事になつた。私は今「熱海漫談」を讀みつつあるが、坪内博士は座談會は好まぬと言はれて居る。語りもせぬ事が筆錄せられたり、話者の口吻が正直に描かれてゐないため、迷惑する場合があるといふにある。私共は東京、大阪朝鮮と隔つて居る關係上、膝を交え得ないので回覽誌に依るところから、各自の筆を其儘發表して誤謬は來さない。只私は專ら本稿を川柳雜誌社に屆ける役目と、翁のお話を引出す事に努めるつもりである。故に御照會は私へ頂きたい、一括してお答する便宜がある。

臺本は半狂堂版による事とした。初篇がすめば、二篇三篇と進みたい。サテ何年續く事であらうか。—讀者諸賢の御多祥を祈ると俱に、私共も健安にして目的の一部でも達したい。（四月十三日、蛭子生）

今回、蛭子兄は私に大任を負はされたが、元來、口不調法の自分が、此の重荷を負うて、その任務をよく果す事が出來るか出來ぬか、全く自信が無いのである。而して私が（一生懸命に努力しても、愚說や僻說ばかりで、蛭子兄が切角の御期待を裏切りはせぬ歟、夫れを頭痛に病むでゐる。併し御期待に反くやうな場合には、この企を即止されん事を、豫めお願ひ申して置くのである。（秋農屋）

私に武玉川と云ふものを始めて敎へて吳れたのは、小學時代の

同窓、其當時は日本橋の桝本といふ酒屋に勤めてゐて、川柳にも私より先輩である、柳號艶文字と稱した前川直太郎君である。「光るもの大宮人も欲しがりて」とか、「煙草屋になる氣で二人出代りぬ」などの句を其時聞された事をいまだに覺えてゐる。爾來折に觸れては何回もよんでみた。「川柳誌」を發行してゐた時にも故夜叉郎君と武玉川調を試作したりした。私にとつては思ひ出の多い句集である。私も其通釋をやつてみたいと思つた事も再々であつたが、到底、力が及ばない事を口惜しく思つた。幸ひ今回、蛭子君の主唱で秋農屋翁を煩はして、其通釋が企てられ、私も其補助員に加へられた事は恐縮の次第である。全く雜魚のトト交りと申すべきである。（東魚）

## 【1】 納豆に抱れて寢たる梅の花

**秋農屋**＝現今では温室といふものが有れど、昔はこれが無かつた故、味噌屋麹屋の室を利用して、梅桃櫻其他の盆栽又は切花を、早く咲かせて市中に賣出した。此の味噌屋麹屋は、本郷湯島邊に多く有つて、今でも現存してゐる。私は日暮里に育つた麹屋の室をよく知つてゐるが、納豆もこの室に於て造られるから、梅の花と共寢をする事も有つたであらう。

**東魚**＝發句躰ならば「抱かれて寢たり」である筈だが、附句であるから「寢たる」としたのである。恐らく前句が多少エロ味の匂ひのあつたのでの表現であらう。秋農屋翁のお話で私は湯島の小學校に通つてゐた關係から、毎日通稱ゴミ坂上の味噌屋の前を通り、時には買つて歸る使もしたので、内部の趣きなど多少記憶に甦つてきた。其味噌屋は伊勢利と稱する店だつた

**省二**＝「麹屋の梅の花とはみたれども」は室の梅の參考句。本郷界隅に麹屋の多かつた例證としては、「麹屋の息子お七に刎ねられる」。ムロには氷室もあり漆室もある。酒屋たる私には酒室は尤も大切なものだ。五元集に「内藏の古酒をねたるや室の梅」。

## 【2】 夕立に思ひ切たる舟のうち

**省二**＝若し下七が「面白さ」であつたなら、街頭風景となる舟のうちでは絶對絶命だ、思ひ切らざるを得ない。いつそ「渡し舟」であつたなら、隨分騷々しい事であらう。隅田川の渡など、一寸タイムを要するから。

**秋農屋**＝舟の内が何となく風情があり、小説などの材料ともなるであらう。此舟は屋根舟でなければならぬ。私は五歳の時に、和泉橋畔の明石屋といふ舟宿から、屋根舟にのり本所の五百羅漢寺へ往つた事を、今でも記憶してゐるが、屋根舟へ乘つたのは、此時が最初であり又最終である。此句に關係はないが河東節と一中節に「隅田川船の内」といふ、有名の語り物が有る

**東魚**＝「牛方のあきらめて行く俄雨」と同巧異曲で、船の中では逃げ場も庇の下もない。ぬれてもどうにも仕樣がないと云ふ場合であらうから、秋農屋翁の申される樣な、屋根船でない方が、此句のねらひ處に合ふと思ふ。

## 【3】 嘘をつけとの大三十日來

**省二**＝昔の人は年末年始の旅行はさけた。だから大晦日は嘘

の言譯をしても切拔けねばならぬ。旅へ逃出す現代風には「嘘をつけとの」のユモアー的痛快味が薄らいでしまつた。「常躰の嘘ではいけぬ大三十日」

**秋農屋**＝江戸人は嘘をつくにも茶氣が有つて、落語の縣取萬歳のやうな、可笑しい塲面もあつたやうである。

**東魚**＝皮肉と茶氣が如何にもあくどくなく現はされてゐる。「嘘をつけとの」といふ表現に少しも厭味らしい所がない。恐らく十四文字の調子がピッタリ句柄にはまつてゐるからであらう

## 【4】祭が濟てもとの明店

**省二**＝上に電線、下に電車、となつてからの祭禮風景には、此句の味が痛切に出ぬようになつてきた。尤も私の幼時までは、明店利用はあつた。

**秋農屋**＝現今でも山の手の町では、祭禮の時の神酒所に、明店がよく利用されて居る。

**東魚**＝虚構句でない、其うがち味が此の句の命である。賑かなあとの淡い淋しさがあつて、私は好きな句である。

## 【5】冬籠獨口利く唐本屋

**省二**＝ 本は支那本の謂、獨り口利くも思はせはする、が考へた句丈けに、冬籠などの道具立がある。子規の作に「冬籠顔も洗はず書に對す」があつた。

**秋農屋**＝現今では支那本專賣の店があるけれ共、江戸時代には如何であつた歟。普通の書肆の中で、多く唐本を賣買したものを、假に唐本屋と呼むだのではない歟。

**東魚**＝私の小供時分には、舶來雜貨など扱ふ家を唐物屋といつてゐたと思ふ。それと同樣に支那書蘭書などを主として賣買する本屋を唐本屋（タウホンヤ）と稱したのであらう。多少本屋の主人も學問のある人物でチト變人がかつた者なのであらうか。冬籠にさうした人物を描出した處が手柄であらう。

## 【6】取分て鞠は男のよいか能

**省二**＝蹴鞠は高貴な方の遊戯―町人も眞似るようにはなつたが、今日のラグビーなどとは違ふ。スポーツではない。だからアリ〳〵の掛聲と共に男のよい方がふさはしくある。

**秋農屋**＝昔は中產階級以上の町人の息子が、ヘエケエも宜いが肩が凝るなどと云つて、蹴鞠を始めたものらしいが、餘り世間に普及しなかつたやうである。

**東魚**＝優美な遊び、業平のやうな美男でこそふさはしい。輕味が「よいが能」といふ措辭技巧に能く現はされてゐる。私が嘗て「川柳雜誌」に發表したスポーツの句の中、「いつそもうシャンで女流のダイビング」は、この句から生れてゐる。燒直しと云はれてはチト恐入るが、此句から脫化し得たつもりでゐる。米國女流水泳家ヘレンミニーの美貌とその跳込みの肢体の美しさに、私は恍惚としてしまつたのである。（但し寫眞だけですがね。）

## 【7】雫の傳ふさほ鹿の角

**省二**＝さほ鹿は、さをじか（牽鹿、小牡鹿）ならむ。サは小なり、觀察は細いけれど、獨立句としては物足らぬ。

**秋農屋**＝萩原を分け行く鹿であらうが、これは想像の句に相違ない。

**東魚**＝春日社頭の小雨の中を行く、いたいけな鹿の姿を想像してもいいであらう。角を雫が傳ふと云ふ細い觀察に爽やかな感じがある。そこに獨立句としてみられる力はあるやうに思ふ但し前句の響如何によつて、此句はもつと引立つものであらう

## 【8】放れ馬跡の女に櫻の香

**省二**＝櫻と馬、よくうたはれる。女性を點綴した處が情趣なのであらう。

**秋農屋**＝蕪村の「木下が蹄の風や散る櫻」の句を聯想されるが決して佳句と思はれぬ。

**東魚**＝放れ馬、櫻の香、といふ切れ方がどうも面白くなく思ふ。

## 【9】二人してたけた娘を打詠

**秋農屋**＝年闌けても嫁かぬ娘、それを打眺めるのは兩親か、江戸時代の女は、十六七歳を最上の婚期となし二十歳を超えても、配偶者のない女は、不具か病身か、何か曰くのあるものとして、世間の人に指彈されたのである。

**東魚**＝今更わが兒ながら成人したものだ——と云ふ親の氣分殊にさうした變化の著しく目立つ女子であつて、此句の面白味が深い。

**省二**＝「二人して」が、よいと思ふ。

## 【10】四谷から目黒の間を歌枕

**秋農屋**＝四谷より目黒に懸けて、多くの神社佛閣があるから草鞋ばきでそれを着て歩く、といふのであらう。

**東魚**＝此句なども前句と合せ見ねば面白味が薄いのであらう序文にも「右付合の句々その前句を添侍るべき所を事繁ければこれを略す見る人心に計りて知らるべきにや云々」とある。

**省二**＝「寂蓮法師は歌枕をみん爲め去年五月の頃より東の方に」とか、「實方をも歌枕みてまいれとて」とか、各所古跡は歌の材料にされてゐた事から、寢るに枕か必要なのに比しての言葉である。

## 【11】犬張子二見にわかれ雲の峰

**秋農屋**＝犬張子と雲の峰、其間に連絡がないやうであるが、二見にわかれは、芭蕉の「蛤のふたみに分れ行く秋ぞ」の句を採つたものらしい。

**東魚**＝どうも難句である。其角の句を見るやうな氣分がする

**省二**＝二百考三百考を要する。

### 秋農屋翁の近著「吾家の狂歌」

秋農屋安倍川望成翁の恍著「吾家の狂歌」は翁が五十年の狂歌生活を如何に物語る狂歌一百首を既刊の家集より自選されたる狂歌集である。本集の如きはおそらく江戸狂歌の流れを汲んだ最後のものであらう。東京市下谷區中初音町四丁目百六十番地梅本高節翁發行（非賣品）

# 近作柳樽

路郎選

遠足の電車と汽車と並びたる　大阪　閑生
母と伯母電燈下げて何か讀み　同　同
闇なかを行きちがひたる煙草の火　同　同
燒印をおした下駄はき京の雨　同　同
十八の女車輪にからみつき　同　同
「跳び込み」とおのが手を嗅ぐ運轉手　同　同

川柳の夕に際し

散髪がのび盲腸がいたむ春　大阪　綠雨
庭先のつゝじに素足ふと感じ　同　同
スリッパを並べ患者を待つつもり　同　同
八掛に風が吹けく交叉點　同　同
童貞にかゞやく白の卷脚絆　同　同
シュミーズ脱いで男の言葉嘲りつ　大阪　町二
腹立てゝ一日寂しき日なりけり　同　同
午後十時眞先に蚊が出迎へる　同　同

## 川柳書架（四七）

### 川柳巷談　はしからはしへ

夢一佛著

▼目次の大要を轉載すると「第一編はじまり、第二編都會の渦、第三編日和下駄、第四編縱から、第五編横から、第六編波紋、第七編置舞臺、第八編欄に倚りて」の八編から成つてゐる。

▼昭和七年三月五日發行、定價壹圓參拾錢、四六版二九二頁夢一佛冨野信正氏著東京市神田區鍋町（鍋町ビル内）小木書房發行。

▼三都其他の橋（主として東京）を詠んだ句を拾ひ集め、橋に關する著者の趣味的な知識と感想を織込んだ極く輕い讀物である。著者夢一佛氏は川柳きやり吟社の同人である。

### 彌生集

武智彌生遺稿
野中水村編輯

▼先づ故人の軍服及和服姿の寫眞と筆蹟が掲げられてある。

次に本書の編纂者である令兄野中元三郎氏の筆で「彌生集の序並に彌生略傳」がある。

橘君長男を擧ぐ

産聲に父の眼鏡の風光る　大阪町二

聖書より磐と命名

よき名拾ひて聖書の手垢貴びつ　同同

風よ吹け〳〵風の中なるひとぼち　大阪丹路

凡人のくやしいときの糸切歯　同同

あめいろの蟻つらなりて五月の陽　同同

額椽の暗きに父を仰ぎ見る　魚崎亂耿

合掌へ表情のない彌陀如來　同同

燭光の魔力へ金を捨てに行く　同同

勘定書が榮養價値を持つ女　大阪愚陀

夜の街に海月に似たる女あり　同同

霧の如くに女の息吹き窓によす　同同

はやらせて見せる別家の値を叱り　大阪艸樂

俺が高下駄をはいた程の女が惚れたよ　同同

逢ふ度に俺を薄情者にする　同同

母もそつと出る氣になつた日和にて　鳥取鐵洲

床柱背に罐詰を意識する　同同

表彰の村へ將軍一人で來　撫順柳路

○

▼目次は上篇を俳句、下篇を川柳とし、何れも俳句の季題式に分類されてゐる。附錄には俳句の作法について、川柳やよび第五十號に題す、選後感、和歌、俚謠檢案書、編輯後記等

▼昭和七年四月十日發行、非賣品、菊判半截一一二頁、附錄一三頁。編輯兼發行者廣島市白島中町三二野中元三郎。

▼著者武智彌生君は昭和六年十一月二日午前零時三十分頃大阪市兼牛町附近で自動車に觸れて急逝した。從つて遺稿彌生集は川柳家ではないが弟思ひの實兄の手によつて纏められたものであるだけに編者の序文には涙かにじんでゐる。

## 句談雜談　童の的

初編輯講（第一分册ノ一）

綿谷摩耶火編輯

▼輪講者は蛭子省二、松川碧泉、竹重虛心、母衣、未知庵、綿谷摩耶火の五氏。

▼昭和七年五月十五日發行東京市牛込區藥王寺町一〇綿谷方とくさ川柳社菊半截二四頁謄寫板刷（非賣品）

## 川柳家の垢

○病軀に鞭つて縱橫無盡に活躍してゐた路郎　B B B

文學にかぶれて死んだ事にされ　大阪　豆秋
婆さんが櫻見にゆく腕時計　同　同
ヒゲのある衛生掃除人夫來る　同　同
中風の金庫の鍵は放されぬ　同　同
春の夢筍賣りの聲がする　同　同
榮轉か首か四月の空の色　大阪　小柳子
大阪は雨なりラヂオリーグ戰　同　同
ルンペンの味方もなくて灯がこぼり　同　同
朝起きて走りたくなる春の風　同　同
淋しさの味方はやはり酒なりき　同　同
子を見てはいやまあ〳〵こ氣をなほし　大阪　鶴峯
お座なりに拍手してゐる舞なゐに　同　同

病める友へ　（二句）

メーデーが何うならうこも君は病み　同　同
臥てゐるをあまり知らすなこは淋し　同　同
花が散る！木魚叩いて暮そかへ　大阪　靈壺
手洗鉢成程泳ぐめだかがゐ　同　同
燈籠に水ぶつかけて飯にする　同　同

雨の伊勢大廟

寂こしてそぼ降る中に警視ゐる　同　同

主幹が三日の午後になつても まだ特輯號のために筆をとつてゐる。印刷所からは綠雨總務がカン〳〵になつて電話の督促、勤勉そのものゝ山雨樓が休暇をとつて 不朽洞に詰めかけ、これ又階下で筆をとつてゐる。殆んど書上げた主幹の原稿を 風呂敷に包んだ山雨樓、急ぐ〳〵と云ひながら、

「謠を一つやりませうか」

と云ふ。これを聞いた主幹、

「そうだネ、川柳家の謠もいゝだらう。光路もやるし、艸樂もやるし、朝陽もうまいぜ、まだ隨分ゐるからな」と主幹は謠會をやらうと聞いたらしい。ところが横で矢張り原稿を書いてゐた 葭乃女史が今から謠をはじめらたら大變だと思つて、

「急ぐんでせう」

と暗に早く出かけるやうにすゝめると

「いや、ホンの二分間で濟みます」

といふ。そこで葭乃女史が

「何をおやりですか」と聞くと、「鞍馬天狗をやります」と山雨樓、詰襟の洋服で端然と坐り直し

「花咲かば……」

と唸りはじめた。特輯號の刊行や明日に控へた「川柳の夕」の催を忘れたやうに悠然たるものである。暫らく唸つてゐたが

「イヤ間違ひました。外のことを考へてゐましたので」と云ふが早いか飛ぶやうに二階を降りてしまつた。

呆氣にとられた主幹、

「山雨樓も變つてるなア」

ケーブルに一人で詣る仲居がゐ　大阪　裸人
老夫婦の家で女給は間借りをし　同　同
葉書入れに行つて喧嘩を見てもごり　同　同
あんな男がゝ言へばお金があるゝ云ふ　同　同
診斷書俺の終りも見えすいた　神戸　明珠
甲の上だつて見られりやはづかしい　同　同
養ひの來る方角へ飛ぶ雀　同　同
天井は低し儲けがありませぬ　同　同
馘になり近所を恐れ雨を見る　神戸　春秋
夜中の灯ふこんの山を照らしてゐ　同　同
この女寢顔も俺にくれてゐる　同　同
部屋中を歩きまわつてやめにする　同　同
こつそりに女の窓をのぞくだけ　滋賀　蒼太

コルセット着る蒼太　（二句）

コルセット脫げば逃げてく夜の君　同　同
きぬぎぬに叩けば音はコルセット　同　同

自嘲

髭をはやしてひよろりふらり　同　同
推定の齡へ仲居は逆らはず　大阪　奇可愛
掃溜の樣な救濟事業なる　同　同

「綠雨さんが聞きやはつたら怒りやはりまつせ」
「なあにあれだから川柳がやれるのさ」

○

「川柳の夕」の聽衆一千餘。高尾司會者曰く「こんな催しでこんなに這入つたことは、朝日會館のレコード破りであります。殊に開會一番立て續けに三人も喋べるといふことは過去十一年間朝日會館の歷史にも例のないことである」との保證。川柳家の得意思ふべしである。

○

「川柳の夕」に柳秀の長崎博士、家族は勿論門人達を引連れて來て頑張つてゐた。路郎門にはインテリが多い。「何處まで幸福な男なんだらう」と廊下をうろつきながらの噂をそのまゝ。

○

街頭宣傳に出掛けた委員のうちで、啞ではないかと思はれるほど無口の夢裡が、一人だけ戻つて來ないので、みんな心配してゐると、よつぽどして會館へ姿を見せた。
「どうした〳〵」と聞くと
「巡査に叱られてゐました」といふ。
「巡査も殺生な奴やな きつと川柳を知らん奴やらう。ムリに怒らんかてエ、のに」
と云つたので一同大笑ひ。

○

街頭宣傳に出たかほるが電車の中で、きよし蕭伯に逢ひ

奥様に社長が負けた痛快さ　同　同
言ひ譯に一ヒ節嘘のあるもよし　大阪　紅
空家探しに公園へ來てしまひ　同　同
聲上げてそれほどでない忘れもの　同　同
自家用のバンクへブロの子がたかり　大阪　夕鐘
糸の音はさすがは杵家彌七さん　同　同
母さんをヒステリックにする堺筋　同　同
故事を聽く天井だん〳〵古く見え　高知　濁水

海路歸着して　（二句）

難航をのがれんヒ眠りつゞけたり　同　同
齒をみがく漁師へ船がはいるなり　同　同
俺になご藝者が惚れてごうする氣　愛媛　英賀夫
レントゲン醫者に野心を見られまい　同　同
淋しさは自轉車にさへ乘れません　同　同
人生觀を變へさした汝が柔肌　大阪　翠夢
唇づけんヒせば唇のかろきけいれん　同　同

養母へ捧ぐる

病む養母へ春もつまらぬものぞかし　島根　綠之助
テロに敵なし血盟五人組　同　同
心境の變化か端唄口をもれ　別府　晃卓

「今晩來とくンなはれや」
と女性的な大阪辯に
畵伯すつかりチヤームされて
「行きます〳〵」と頭を抱えたそうな。
勇敢なかほるさんではある。

○

「川柳の夕」に葭乃女史の姿が見えぬので、高尾司會者が路郎主幹に「妻君はどうした」と聞く。
「うちで珈琲を賣つてるよ」と主幹が答へる
「それぢや盛會さを知らしてやらうぢやないか」
と云ひながら高尾司會者、路郎主幹を引張つて事務室へ行き、早速葭乃女史に電話する。
「僕高尾、やなんで來まへんね。今から來まへんか。ふらひ盛會で一ばいや。うちはごないしてるッて、横でニコニコしてるがな。自動車ですぐ來たら間に合ひまつせ」
こんどは主幹が代つて受話器を握つた。
斯くして葭乃女史が會館に姿を見せた。高尾司會者の友情と葭乃女史が來なかつた苦衷路郎は幸福な男であるといふことになつた

○

路郎主幹が鳥取へ行つた時、支部の鐵洲が案内役を勤め自動車の運轉手に
「これから荒又へ廻つてくれ」
と云つたので
「流石に鐵洲は鐵工所の親方だけあつて荒木又右衛門をさも心易そうに山宣や武藤金扱ひにした」と記念句會の演壇の上からみんなを笑はした。

葱坊主我れかんせずゐんこ立ち　同　同
ビラ今し急ぐ家路をはぐみたり　大阪水車

S氏の出産を祝す

病院もかまわず叩くチンドン屋　同　同
おもちやの汽車に眼をうばはれて居たり　大阪　鮎美
重態に湯氣は滴になつてゐる　同　同
起てよこな振子時計が鳴りひゞく　螢ヶ池　愚寵
窓硝子幸福さうな家でした　同　同

◇

ヒヤシンスうづくまり居る賣春婦　島根　羅門
米の白さが恐怖こなる百姓だ　同　同
月はこまかき線こなる哀愁や　同　同

黒き日

春風や人間共のニヒリズム　同　同

上阪するS子へ

まごころこ知るハンカチの白さだ　同　同
妻の寢顔も馬に似てきた　神戸　重陽子
其の夜の十圓札はほろぬくい　同　同

---

當夜鳥取から出席してゐた鐵洲も、これを聞いて黒眼鏡を一寸ゆるがせてゐた。

○

萬よしが滿蒙視察の一行と共に撫順へつくと柳路夫妻や撫順川柳社の柳友が社旗を醵へして出迎えたので一行中の竹田代議士が羨ましがり

「滿洲に入つて庄君の名士たるを知る」

と云つたそうだが、一體褒めてるのか、くさしてるのか。

○

路郎主幹が一ヶ月餘も酒を口にしないので「禁酒ですか」と聞くと

「いや樽を干してるんだ」といふ。

あの調子ではまだ〜入れる積りらしい。

○

鳥取から來た鐵洲の歡迎宴に因洲稻葉をかほるが踊る。聲の出ない素人が唄ふ。鐵洲が見かねてイヤ聞きかねて應援を出す。

矢張本家丈けに うまいこと唄ふ。唄ふてしまつてから一場の辯明があつた。これは鳥取の女のことではない。但馬の美方郡から鳥取へ女中に出て來た女のことである。この唄をきくと鳥取の女を淫亂のやうに思はれるおそれがあるので鳥取では この唄を一般に唄はないことにしてゐる。その運動の急先鋒は舌長だとのこと。

隣皆達者朝から欠伸して　同　同
むつかしき顔かな金庫開ける顔　大阪　夜王
耐へる事のみおそはつて二十八　同　同
ピエロ今獨りになつて腹が減り　同　同
仰山な笑ひを持つて女給來る　松山　耕朗
身仕度をして鍬を持つ花畑　同　同

發熱をして

三十九度一度は立ち上つても見たが　同　同
日に燒けた顔で彼女に愛される　兵庫　鳴玉
獨身は自分の顔を見て笑ひ　同　同
もう起きて下さいませと煙草盆　同　同
立話せかして菓子が貰はれる　松山　秋草
樂書がふとしたくなるかくれんぼ　同　同
名曲の悲哀失業苦へ流れ　鳥取　暢山
轉りやもう一年も寢て居ます　同　同
五月なり塀の高さに氣を使ひ　大阪　沐天
甘んじて居れば冷たき眼に出合ひ　同　同
懷爐灰消えたまんまで朝の雪　大和　白帝子
貧乏の兒にして風邪によくかゝり　同　同
嵩だかいことを田舎は嬉しがり　大阪　洋々
大阪の空氣に慣れた二日醉　同　同

## 川柳の夕と私

### 準備の日から——艸樂

本誌百號記念の「川柳の夕」が豫想外の成功裡に幕を閉じた事は、最初から此の催しの委員として携はつた私は、言ひ知れぬ喜びと他の委員諸氏の御援助に對し、感激の涙もて御禮を申上げる次第である。併し何分俗事多忙の自分が委員長格で其衝に當つたのであるから、十分に盡す事が出來ず、徒らに委員諸氏に不躾な御願をしたり、搗て加えて鈍才であるから、いろ〳〵手の屆かなかつた箇所が隨分あつた。

路郎主幹の抱負では、もつと盛大を期して居られた事と思ふ。それでも此の催しの濟んだ後で「盛會だつた委員諸君のお働きを感謝する」との御挨拶があり、「先づ成功でした」と申上げたものゝ、お言葉は嬉しいが自分の働きの足らなかつた事を、相濟まぬ氣もしたのである。

此の催しを愈々決行する事が決定したの

出勤の影も辨當さげてゐる　島根　鴉天
明日の我あさつての我思ふまい　同　同
終點へ車掌地聲になつて降り　大阪　八歩
辯解の自分も少し惡く云ひ　同　同
貢物の方を待つてる戀であり　福島　壽惠兒
盜まれる物がないので鍵がない　同　同
草臥れを見せまいとする白い足袋　大阪　柳次
童心を取り戻しけり崩ゆる草　同　同
子を國に捧げた人の貧しさう　京都　草村
炎々と防火ポスターに似て燃へる　同　同
依賴心强き彼氏の背の高さ　大阪　沒食子
要點をはづして二人仲がよく　同　同
また泣いて貰ひ度い日を叔母が寄り　朝鮮　如空
洗濯に今日はと思ふ日を逃し　同　同
はねかへす力沈默まもつて居　大阪　方眠

長男生る

戰爭の話男の子が生れ　同　同
梅田まで送り屆けて來た足で　龍田　翠峯
貸す人のある倖せを喜ばん　同　同
オートバイで寄つたわが家の飯時分　大阪　大門

は三月の初めだから、三月十日に初委員會を開いて徐ろに計畫を樹てた次第で、考へて見れば、剩す處二ヶ月に足らぬ時日よりなく、其間に萬事を運んでしまはうと云ふのだから無理と云へば少々無謀だつたかも知れないのに、委員會を開く事三回、共に委員諸士の熱誠は溢れて居た。委員間に連絡をとる爲めの通信や心得等の印刷物も引切なしに出されたが、これ等も先づ順調に運んだし、雜誌百號記念號の編輯の多忙の上へ、ポスターパンフレットなどを引受けた編輯局同人諸士も實に不眠不休の努力であつた。而して、期日は容赦もなく迫つて來た。

四月三十日と云ふ商賣人にとつては最も多忙な節期の夜と云ふに、最後の委員會を開いて愈々四日の後に開く「川柳の夕」に臨むべく、萬事の打合せをすませたのであるが、其日は委員全部選擧事務所の樣な恰好で、印刷物の處理をやつた。主幹始め綠雨氏、山雨樓氏、琴人氏等もあれで病氣にでもならない事だと氣遣はれた位であつた。

愈々五月四日は來た、最後の委員會で打合せた通り、午後三時、私は特に二時半に會場へ驅けつけたが、流石にまだ誰も來て居ない早速朝日會館の事務所へ飛込んで、準備の爲め早く來た旨を告げて、委員諸氏の參集を待つて居ると、定刻には里十九、かほる、夕鐘、水車、華水、鮎美の諸氏が、皆緊張した顏付で詰かける。此の會館では映畫の催があつて午後四時頃迄こちらの準備にかゝれなかつたが、それもやがて濟んだので、委員は一同

停電の車窓汚い景色なり　同　同

セメントを呪うて蟻は殺された　長野有爲郎

小作では喰へぬ話が左傾めき　同　同

説明のあるだけをして賣り損ね　大阪史錄

殺されるだけに舞臺へ立せられ　同　同

眞夜中の風が忙しい朝にする　神戸不然

度し難し養ひ難し眉をひく　同　同

君はマルキか僕は鳴門で一寸飲む　大阪四五磨

惱まして呉れるな妻のある體　同　同

盛會がいつそ淋しい後仕末　東京銀雪

マネキンだなんて他人を嗤へるか　同　同

賣出しのハタを濕布の子が見てる　大阪一流

四天王寺にて

親鸞聖人像雪空に突ッ立ちぬ　同　同

脂取り神妙にして妓にまかせ　長野柳兒

聞くだけを聞く上役のいゝ機嫌　同　同

厚化粧狐の樣に目が動く　大阪青兒

パス賣るも小さい暮しの一つなり　同　同

滿洲國々旗

苦力たゞ奇麗な旗と見るばかり　大連三碧

---

舞臺横の二階の樂屋に陣取る事にした。

山雨樓氏、萬よし氏などが見える。絲雨氏鴻峰氏がいろ〳〵な刷物を山の樣に持つて顏を出される。紅、新水、丹路、變人、夢裡、特に今日信州からわざ〳〵來られた民郎氏などが續々と押寄せて、陣營は正に出動命令を受けた營所の樣だ。

川上三太郎先生が今夕の御講演をあの偉容の体軀に包んで、茲もと觀戰將軍と言つた樣子で入場せられ、續いて路郎主幹が連日の疲勞を見せず意氣軒昂、やあ〳〵と這入つて來られた。實は今日あたり熱が出てゐて來られなくなりやしないかと案じてゐたが、まあ安心だ。

二三日前から、街頭には、ポスターが飜つてゐるが、まだ開會迄の街頭宣傳にと山と刷られてあるパンフレットを撒かればならぬ。集まる委員それ〴〵多忙の中を手分けして刷物を抱へて出て行く、そこへ、今夕の出演の劇團の人々、長唄の方々、山根舞踊研究所の一行が續々と縺込んで來られる。

受附の方はと覗きに出て見ると、委員諸氏滿を引いて部署についてゐる。朝日ビルと會館エレベーター前の二ヶ所の受附では定刻前既に數百名の歡衆に應接して幸先を祝つてゐる狀況、かくて開會、午後七時過ぎにはあの大會館の一階は殆んど埋盡された。

## 前衛記——水車

此處大阪はビジネスセンター渡邊橋畔に聳へ建つ朝日會館に於けるこの集ひこそは

あやまれば濟む事ながら默りこみ　同　大阪　玄坊
まじめさを寫眞にこつて笑はれる　同　同　同
現金をつきつけて出る苦い顏　鳥取　湖山
罐詰の殼からくこ濱の風　同　同
かつては拜金主義を笑つた榮葉服　大阪　呑空
鵜の咽喉をくすぐる鮎は晩の榮　同　同
木曾の森伐つて流して名古屋に出　福岡　河鳥流
パラソルこ戀のオールは向きを變へ　同　同
醉ひごれの連れは禁酒を手こづらせ　大阪　素月
正當な答就職しぞこなひ　同　同
張紙は女給募集のまゝ空家　同　同

田舍娘の家出

女優なら誰でもなれる氣にもなり　新潟　爲八
新しい言葉で割れる無產黨　同　同
笑つてた殘りを顏に見せてくる　石川　柳村
聞く事があつて見つめるインキ壺　同　同
講義錄未だ繰つてゐる音がする　京都　裕介
スクラップ・ブックに彼の事もあり　同　同
疑義のある經過報告酒の冷え　鳥取　耕民
作男丹那ご意見異にする　同　同

待望久しかりし我社主催の「川柳の夕」にして實に川柳詩の社會進出の劃期的企てに外ならない。宜なる哉、花の四月中とかく亂れ勝ちだつた天候は五月に入つて良好となりこの記念すべき事業に應はしくも初夏爽かに風薰り、來場諸彦にも絕好のコンディションに惠まれしを感謝せねばならない。

されば各位をお迎へすべく委員中受付係の新水君、鮎美君、紅君及筆者は會館エレベーター口に、寄可愛君機見女さんは朝日ビル側よりの入場口へ又豆秋君、夢裡君、變人君は後衛として改收後の切符の整理などに當るため定刻前それ〴〵責任の位置に着く。

早い方では定刻前一時間も前から來場された人もあつたが、定刻前後にはもう二臺のエレベーターがひつきりなしに送つては迎へ、下りては上る一列車毎にではなく一エレベーター毎に見える熱心な御後援の士や、なつかしい柳人諸氏、其中には可愛い孃ちやんや坊つちやん方までが我等へ聲援を下さるエレベーターは全能力で働く、一時にドツト受付へ紅紫とり〴〵渦をまく。切符をいたゞくプログラムをお渡しする。柳友からは激勵の言葉を下さる、會場入口の方への案内も兼ねる。受付の面々まごつくやうな醜態はないが、何分にも折角御來場の皆樣方へ苟も組忽のないやうと思ふの余り、遂堅くなつた。それもホンの初めの五分間程で、後はもうこの熱誠なる光景に感激して只管改收、應援に餘念なく、うつかりと遲れて來た委員の一人に切符を追及したが、漸くそうだと知れて慌て

甘んじてだまされてゐる戀もよし　東京　蒼梧樓
手紙を燒いて結納待つてゐる　同　同
連れられて來たは賣らる、女なり　愛媛　木喰象
ぶらんこの動きに馴れた籠の鳥　同　同
畫通る廊の格子しろ〳〵と　神戸　竹風

孤獨

春宵惱まし噴火口をおもふ　同　同
人前に好きな人にもなつてゐず　大阪　正路
酒だ酒だ無事だ凱旋だ　同　巴人
春來れど勤めの口が心配　同　良坊
ありがたや母は涙の本願寺　同　蓮栗

故後藤勇吉飛行士

閏年二十九日が御命日　同　詩郎
金の前には處女でもないものよ　同　梨風
友達の警官妙に偉く見え　同　句林
哀傷のひとみのなかにねむれ君　同　卜居
高下駄をはいてコックは晴れた街　同　一笑
うらゝかさ犬の欠伸につりこまれ　同　山茶花
たくましきかひなの中のはにかみや　同　舟々

ゝマークを渡すやらのとんだナンセンスも朗かな笑聲となつていつた。一方朝日ビル口も敗けず劣らずの盛況を極め、機見女さんが案内の方へ廻はるため「一人では手が足らん」と助け舟を呼ぶに至つたので裸人君を賴むこの頃より筆者は聯絡係に廻はつたので一杉君と代はる。

流石に時間を守つて下さる來場諸士のことゝて、八時過ぎ頃には斷續的となり、公演場から時を漏れる急霰の拍手が整理の間にホツトする我等へ聞こへて來る。かくて此意義深き「川柳の夕」はいと盛況裡に進行していつた。（水車）

## 感謝の手で——綠雨

▼本社主催の「川柳の夕」（五月四日夜）は皆樣の御後援と同人、社友その他の方々の目ざましい活動で豫想外の盛會であつた事をよろこんでゐます。本社の關係者並びに他の川柳社から多數の喜びの書狀をうけました。謹んで御禮申上げます。

▼四月卅日夜「川柳の夕」までに後四日間しかないところへポスター、パンフレットが出來上つたので、月末の多忙にもかゝわらず、同人社友をカナメ喫茶店で開きました。郵送のパンフレットを折るもの、封筒を書くもの切手を貼るもの、まるで戰場の如き有樣で當夜同人社友の目ざましい活躍振りには、迂日寢食を忘れて奮闘され、疲勞し切つてゐられた路郎先生も涙を以つて感謝と激勵の言葉を發しられるなど、かなり悲壯な光景を呈

孝行のつもり精進料理食べ　同　錦石
遠ざかり行く失業の姿なり　同　蝸牛
陽に燒けた顔が母への土産なる　同　白峯
細い腕を人夫募集が嗤つてゐる　同　呑吸
人よりも頭のすのは命がけ　同　富士雄
一幅のやうな連峯雨になり　同　龍一
親二人笑へば子等も亦笑ひ　同　いわを
幻に戀人が有り夕ざくら　同　あや美

棄權防止ポスター

適任者なくても棄權罪惡か　同　素萠
地辷りの土にも同じ春のいろ　同　大夢子
幸運が素通りをして今日も暮れ　同　双車
叱られて未だ氣の附かぬ手暗がり　同　小松園
刑務所の空へも雲雀春を告げ　同　鯉友
オブラートに包んだエロのにがさなり　同　坊茄子
書生下駄腰の手拭よくうつり　同　一久
天と地と人とぴつたり春の線　同　無鬼
感激のあと溜息をするばかり　同　みつる
決勝點の敗因が猿股の紐　同　灯羊子

しました。當夜集つた方々は路郎先生、夢裡紅、里十九、水車、夕鐘、新水、かほる、觀月、鮎美、裸人、杏三の諸君と私。

▼五月二日鶴峰君と二人で數萬のパンフレット數百のポスターを圓角、閑生、梧郎、奇可愛、鮎美、阪大、ひろし、町二、夢裡、光路、かほる、萬よし、一杉、里十九、紅、翠夢の諸君等の宅へ配付し、同時に北濱附近から渡邊橋附近、四橋附近、南海難波驛前附近から戎橋心齋橋筋で數千枚散布して街頭宣傳を致しました。尚ポスターは更に專門取扱社へ數百枚を依頼し當日市内一致る處の街頭へ貼りプレーガイドは云ふまでもなく理髮店、カフエー、喫茶店をはじめ、その他の諸店の店頭へも貼り出されましたので、川柳社會化宣傳の實を十二分に擧げることが出來ました。

▼「川柳の夕」に多大の御共鳴をたまはつた左記の方より祝電を頂きました。茲に謹んで御禮を申上げます。藤本福造(京都)村田周魚(東京)岩崎松代(撫順)河野夜王(大阪)武田玄六(東京)高峰柳兒(長野)中島鐵洲(鳥取)きやり吟社(東京)

▼社友石曾根民郎君は松本市から「川柳の夕」の委員としてわざ〳〵上阪され活躍されました。當夜拙宅で一泊。翌五日本社の印刷工場を見學、それから河野夜王君の案内で大阪城見物、六日は校友と寶塚歌劇、七日は桃山、奈良、京都見物をされて歸松されました

▼社友平井蒼太君は滋賀縣から「川柳の夕」の委員として來阪されました。身體の不自由

此の頭彼の頭皆斜なり　同　正路
洗面に女中が二人使はれる　同　憲坊
病んでゐる兄仰向けに筆を持ち　同　幸男
看板を見に行く二人春の宵　同　葉光
接吻はどうするものと子に問はれ　同　菊路
號外へしばらく碁盤忘れられ　同　吐句坊
咽喉巻いて淋しや春の机に居　同　秀樹
便箋へお金の事もちよつと書き　蛍ヶ池　由一
かち合つた瞳に尖りを意識する　同　松雨
嘲笑もあらはに人事課の言ふ事にや　同　靜太
世辭一つ言へぬ身體の置きどころ　同　苍巴
溜息をつけばふうわり春の風　同　公平
病室に微笑むものは百合だけだ　同　芳朗
靜けさにセコンドあまりまぢかなる　同　のぼる
燃ゆる思ひへ血痰の哀しき　同　美子朗
夕燒の唄のあとには俺一人　同　洋花
海へ來た嬉しさ海へ石を投げ　同　青鬼
監督の目に勞働のあほらしさ　松江　翠句朗
捨鉢へ大都會より風が吹く　同　苍二

さでわざ〳〵の來援に感激致して居ります

▼社友三好計加君は松山から「川柳の夕」の委員として上阪される筈であつたのですが突然令息の病氣で遺憾ながら欠席されました。一日も早く全快を祈ります。

▼本誌創刊百號を記念するため、川柳の懸賞募集をしました處、多數の投句があり入選句並に佳句は川柳の夕の當夜朝日會館公演場の廊下へ六尺に三間の洋紙に大書して發表いたしました。尚賞金は整理の都合上當夜入場者で受付係へ申出られた方々限り入賞者には規程に據つて賞金を贈呈致しました。

## 百號記念 懸賞川柳發表

題「世間」　麻生路郎選

一等

世間渡るにヨットにするも面白い　計加

二等（三句）

零落へ其所に居るのかとも云はず　清次
見下ろせば世間は油繪に似たり　觀月
死顏へ煩るさき人が泣きにくる　鮎美

三等（二十句）

世間話シャボンの泡の溢れてる　柳次
新聞に載つて世間の窮屈さ　亞坊
もう折れて出る氣世間へ孫を抱く　鳴玉
狹い世間だと失業は考える　常盤子
世間から少し離れたポンプ井戸　麥力子
上海のニュースも知ず撞いてゐる　世紀
花の世に首を馘られたものがあり　末吉
世間から見れば樂にも見えませう　順惠女

出戻つたことは末つ子知らぬなり　同　白眉
氣休めと知つて淋しい藥瓶　同　雪丸
休憩へフアッショがなぐゝ話してる　同　汀華
資本家の罠に過ぎざる米の値よ　同　天痴人
處女に似て義姉の笑ひに滿つ若さ　同　柳人
シャンデリヤが照す情婦の襟垢　同　玲人
噂する心も知らず酒となり　石川　水玉
落し物の如くに龜の日和ほこ　同　醉羊
陽の入りや山のあなたの海がなる　同　しこし
僕の家歩けば床に音がする　同　白花子
三勇士廣告になり劇になり　堺　柿三
親のすねかじり納めの背廣なる　同　慈雨來
名譽職結局損をしたばかり　同　曲豆
赤電車男はだらし無いものよ　同　鐘生
古い手だがプレゼントしやうか　京都　一正
湯屋を出た心に月も清く照り　同　富美三
戀の作戰咽を卷いて居る　同　豐次
卒業へ役者のやうな厚司を着　神戸　幸村
熱のある事を床屋は見逃さず　同　秋彦

見上げたる世間が廣しあゝ神よ　機見女
おみくじは世間の噂通り出る　白柳子
れんれこに包み世間を憚る身　蝸牛
さわがせた世間へ娘死んでゐる　鶴峰
麥苗も暫く世間を脱け出でゝ　比侶志
前借で娘世間へほり出され　碧郎
世間並の風が欲から鼻の汗　民郎
角帽を脱げば世間の廣すぎる　六波
淪落をわらふ世間の灯に挑み　たし路
酒瓶を並べ世間のうけも良し　双車
世間より低いところに賃仕事　大門
世間態などゝは金のあつた頃　柳秀

**佳作**

相續税世間を知らぬ子が育ち　おさむ
ルンペンはルンペンなりに長がゐり　鬼木
呼び捨てにされる世間の端に生き　司郎
行く處世間がついて廻るなり　正甫
お見事な顔を世間はだらくさせ　串二
落魄が話す世間の面白さ　秋無草
蒼白し世間を孜々と錢の數　雞二
長廆者も居るので生きて行き易し　しとし
世間とはかゝはりのない試驗官　青踏
生きるにも死ぬにも金の要る世間　翠峯
世間など頼まぬつもり朝を出る　さだを
心境の何のかんのて世間態　三代吉
米の値は知らず世間が面白し　明珠
ちらし髪世間話に順を待ち　巴人
踏みしめてこれが世間かとドアを押し　青磁
世間からなんとでも言へ二人きり　紅
差入れに行く親であり世間の眼　春秋
奉公の二度目世間の裏を知り　華水

釣革の娘の腕をのぞく春　神戸　棄郎
讀む暇があればと云つて呉れる本　同　曉鳴子
法律も少し知つてる未亡人　愛媛　虹一
飛び〳〵に隣の出來る郊外地　同　西英子
本宅も二號も同じ女だが　同　孤鶴
淨財をなぎゝ云つては寄附をさせ　同　世都象
思ふまい手を差し伸べてくれる子に　金澤　今雨
やめさして送別會の餞別の　郡山　右月
皆實るつもりの花が咲いてゐる　笠岡　雀子郎
地下足袋の父をなぶるな春の雨　尼崎　虛白
叱られたらしい雰圍氣しめつぽし　長野　季一
メーデーは扳かれぬやうに腕を組み　兵庫　瑞穂
利子で食ふ家にピアノの音がする　廣島　露斗
ついうかうかと春の夜のたましい　三重　亨峰改史
冷笑へ女事務員强く生き　大連　薫
これだけで來月までの月給か　福井　佐顯
ニキビ取り合つて女學生の春　熊本　水人
戀人はないけど丸い〳〵月　島根　與詩雄
ぐんよりとしてモスの娘に風があり　松本　正司
泥水に映る自分の思想なり　不明　のぶを

出戻りの世間は狹し針仕事　素月
ルンペンの噂戰爭するらしい　柳影
もう一度見直す世間へ老けてゐる　艸樂
別居して以來世間の眼に應へ　民郎
名を替えた事で世間へ配り物　清魚
電柱は世間を笑ふ如くゐる　同
反抗の氣味の貸屋の暗い軒　新市街
世間から遠く碁盤へ借が出來　同

## 東京句だより（東京）（1）

關東川柳園が無事歸京せられてから歡迎委員の一人である私にお寄せ下さつた句だよりを拾ひ集めて見ました。私一人が鑑賞するには惜しいと思ひましたからこの一隅にかゝげることにしました。（松盛琴人）

柳祭の銀座にて

いゝ人へ手古舞醉つた事を詫び　玄六
繪の樣な情死を舞妓想ふなり　山門
緣日へ旦那を誘ふ東下駄　昭四
辻占を奪られてゐるい爛を知り　比侶志
春の宵雛妓の指のやわらかな　吐月峯
淺草みやこ
五月一日ビールよしセルもよし　花川洞
雷門甲子郎にて
大阪の夢を追つてる猪口のかず　花川洞
即興　比侶志
爪紅を見つめてばつかり嬉しい上氣
のゝ字もうつゝの灰ならし　玄六
同
女夫湯呑みに朝茶の香り
身錢切つてる紅生姜
（以下次號）

# 句を挾んだ對話

## 最終の「第一線」より

岩本素人

散髪がのびて馴染に出會ふなり　鶴峰

A、これはまた拍子の悪い。こんな事もあるだらうね。而白い句だ。川柳らしい川柳ぢやないか

B、いかにも川柳らしい川柳です。だがその川柳らしい所が感心しないのです。つまり型に嵌つた川柳とでも言いますか。

默つてすつくと座席をゆづる　鶴峰

A、よく電車などで見掛ける圖だ。むつちりした武骨相な男が、案外やさしい心の持主だつたりするのは側で見てゐても氣持がいゝね。此の句も矢張り型に嵌つた川柳だらうね。

B、違ひますよ。型に嵌つたと言うのはあながちザラにある事件を取扱つたからと言ふのではないのです。此句なども成程電車で日常見懸ける小景のスケッに過ぎないですが。句の仕立方が平凡ではありません。すつくと言ふ語は慥にうまいと思ひますね。この爲に單なるスケッチではなく、あなたのお話しのむつちりした人物なるものが顔を出してゐる譯です。

A、ゆづるのをりにしてゆづりとしてはどうかね。

B、成程一寸考へるとゆづりとしたい樣な所ですが、之れも人物を描き出す爲にはゆづるでなくてはならないと思ひます。

産聲に我父として父として　綠之助

A、何ケ月か前から今日の日は必然に來る事は判り切つてゐても、生れて初めて我子なるものゝ初聲を聞いたのだ。父と言ふ事をはつきり意識させられたのだ。そのせつな一寸まごつくね。

B、父としてを重ねたので、神秘的驚異とでも言ひませうか。愛、安心、喜び責任感と言つた復雜な心境が肯けます

A、生殖の神秘に對しての驚異と言ふ風な感じは此句にはない樣だ。

辛抱が足らぬといと可愛がり　明珠

A、何の辛抱が足りないのか一寸判斷に苦しむ。又場面もはつきりしないが、可愛いと言ふ感情は出てゐるね。

B、歳下の——親子程ちがふ——女への愛ぢやないでせうか。若い燕とまではちと考へ過ぎですかね。

A、或る場合の親子の愛——假へば奉公をきらつて歸つて來た子供か何かの場合ぢやないだらうか。

子をなぐる母とは見へぬ長襦袢　春秋

A、あのなまめかしい長襦袢。あれで子供を打つたりなんかするのか。斯ふ言ふ意味の句だらうね。

B、まア一と口に言へばそんな意味なんでせうが、句としてはまた別な味があります。「女房の怒つては勝ち泣いては勝ち」の句にしても女性をよく觀察してゐると思います。

にらまれてゞ度い程の美しさ　奇可愛

A、張りの好い眼の女を想像するね。

B、小柄の丸ポッチヤを想像します。

目覺むれば矢張岩垣俊雄なり　奇可愛

A、岩垣俊雄は奇可愛君の本名だらう。

B、何か素晴しい夢から醒めた所なんだね

A、夢から醒めて我に歸つた瞬間と言ふ風に意味を極限すると此句の面白味がなくなります。斯う言つた句は一氣に讀下してこそ味があるのぢやないでせうか。

君眠るとこ霜よやはらげ　水車

A、「奈緒美君の死を悼む」と前書きがある。引入れられそうな句だね。

B、霜よやはらげ——密い友情が觀られます。佳い句ですね。

想像を女にまかし雨を聞き　靈壺

A、雨を聞きと言ふのはどう言ふ意味なのかね。

B、雨を聞きは落付きを求める心ですよ此の心持ちを女に話したつて分りッこはないのです。「ネエどうかなすつたの？何とかおつしやいな」とか「何かお氣に召さぬ事でもあるの？」とか言ふ女の言葉には答へないで雨の音に心を調へようとしてゐるのです。男と女の心持ちよく描いてゐます。

處女らしうするなよ誰ならば　夕鐘

A、女の面皮を引剝いだ處だね。痛快！

B、女の虚僞は先天的ですね。

お美味さにガソリンガール注ぐ　濁水

A、濁水君は大變な酒豪だと言ふぢやないか。

B、ガソリンがビールに見へたのでせう川柳的な面白い觀方ですね。

たんぽゝやよめなやなた乙女の眼　鮎美

A、たんぽゝやよめなやなたねに乙女の眼が輝いたとでも言ふのかね

B、乙女の眼が輝いたとか、どうしたとか言ふ理屈を付ける句ぢやありません和やかな春の感じを出そうとした句なんです。わざと平假名を並べた點なども、句の内容の意味を探ぐらずに、句から受ける感じを味ふべきでせう。

孫の手で扉すつかり開けられる　華水

A、何處の扉なんだらう。

B、佛壇の扉ですよ。

A、孫の手で——成程ね。

うらやましがる妻を大きく叱つて居　變人

A、大きく叱つて居——はうまい。

B、大きく叱りとした方が句が締る樣に思ひます。妻に對する深い同情が句の裏にうかゞはれます。佳い句です。

自殺者の心理も知らず嗤ひたり　觀月

A、自殺するのは誰れが何と言つても同情すべき事情があるに違ひない。

B、嗤ひたりとは自殺者の嗤はうとする自分の心の或るものを叱つてゐるのです。

しんみり叩はは音もON-MOKU-MOKU　蒼太

A、ON-MOKU-MOKUは日本假名では感じが出ないかね。

B、これは作者の主觀ですから何とも言へませんが、私なら、おん、もく、もくとでもしますね。一層梵字で書いてはどうでせう。

あかえいの性根忘れた煮られう　一杉

A、面白い、あかえいの性根とは面白い

B、そうです性根が此句のしんしようですね。あの四角い不思議な形の强情相な奴が骨まで食べるほど軟く煮られるとは。あかえいに托して或種の人間を罵倒したのせう。で

石鹸など第一素直すぎるなり　一杉

A、この句も同じく人間に當て付けた句だね。

B あかえいの句とはちがつて、此句は作者自身の有つ——人間通有の——或時の弱さを自嘲してゐると言つた風の深い自己省察から生れた句ぢやないかと僕は思ひます。

A、こう言ふ行き方の句は好きだ。

情慾が熱計表に亂舞する　翠夢

A、情慾はちと露骨過ぎはしないかね。

B、亂舞すると下五を誇張してゐますから上五の情慾と言ふ語と釣り合ひがとれてゐますね。

假裝した夫人へ何か起りさう　勝二

A、有閑マダムが又突飛な事をやつたにちがひない。

B、何か起りそうな雪行きの句ですね。

二枚目のへらか春の日が延びる　不然

A、好い感じの句だね。

B、二枚目のへらから——うまいですね

肩幅の狹さも金のない姿　翠峯

A、貧乏神の樣な淋しい川柳だ。

B、全く貧乏の悲哀がよく出てますね。

前借の金がまたもや酒を呼ぶ　翠峯

A、酒を呑む爲に借りた金では無いのだが錢の顏を見るとすぐこれだ。

B、人間苦と言つた氣持ちが迫つて來ますね。錢の顏を見れば呑みたくなるといふだらしのないのとは違つて、しらふでは生きてゐられない神經の所有者なんですよ。酒を呼ぶぢやありませんか。酒を呼ぶ——うまい。

春の日の永さに呑んで戻る父　耕民

A、酒より外に樂しみのないお父さん。

B、作者の心持ちはよく判りませんが。酒を呼ぶの句程深刻ではないが、茲にも淡い人間苦が漂つてゐます。

バス賣のかばん仰山金があり　大夢子

A、失業者救濟と言ふ赤襷をかけてゐるには似ずたんと錢を持つてゐるなアと僕はいつも思ふ事だが、川柳には出來なかつた。

B、川柳はどこにも轉がつてゐると言ふ事を敎へられますね。だが句にならないのは驚きの燃焦がたりないのでせう

どの記事も死線を越した特派員　柳兒

妻の名で實話厚稿料になり　同

A、皮肉だね。

B、皮肉は皮肉ですが讀んだ丈けの句ぢやありませんか。今一歩踏込んで咏つて貰いたいと思ひます。

厄年の無事な寢床を見つけたり　民郎

A、此の寢床と言ふのは何ういふ意味かね

B、寢床と言ふのは寢る場所との事ではなく落付き場所——と言ふより心の落付きを得た、と言ふ氣持ちを形に表して咏つたものでせう。

A、大分長く成つたから此邊で打ち切らうぢやないか。

B、さうしませう。ではさようなら失敬

ルービヒサア
清涼飲料　リボンシントロン
宮内省御用達
大日本麦酒株式会社

# 川柳塔

ひ・町・素・琴・山・綠・合議選

○　庄萬よし

滿鮮雜觀（六句）

泥坊町みんな生きてる聲を出し
失業を笑ふが如く螺馬いこひ
露天堀向ふの山は紫に
ラマ僧の欠伸ハルビン春となり
松花江の氷時局と別に解け
白露系春は歩かにや損のやう

○　西田艸樂

櫻では春の刺戟がまだ足らず
洗濯の水が温むでエロチック
セルの折目が嬉しい足ごり
靴とフエルト靴とフエルト温泉場
筍を提げて來て天主が見たいと云ふ

○　岩崎柳路

朝戻りわかめの汁へ小さう居る
キヤラメルの函に驚く池の鯉
マスコットに何か言つてるお孃樣
揚豆腐で呑もうと世話の無いお客

○　關本雅幽

新綠を流れ流して日高川
蝶二つ蛇塚護つて麥の秋
つつじ手に〳〵喧嘩する子に暮れにくし
貝採りも久方振りの細い足

◇　水谷鮎美

とぎれ〳〵の夢におびへる
恩讐は彼方に消えて風の影
五月雨と端午のちまき匂ふなり
床の間にエキゾチックはなかりけり
デパートの五月人形へ僕の呼吸

◇　喜多春秋

毎晩の酒へなんにもいはぬ母

春の夜や處女の寢顏をこわすまじ
遠慮してほしい隣の蓄音機
五月晴物干に出て脊のびする
肩の肉から大關の首が生え

◇　西村明珠

叱られるしやぼんの泡は男の子
膏藥で事足る田舍羨やまれ
しみじみとかたる心にとらへられ
金かりてから姉さんはなぜ來ない
お通夜して誘ひ出される朝の風呂

◇　中野裸人

わらび餅たべる女給の二日醉
ふたり目をはらみ仕事の面白し
夜店見に出かける母の古いセル
初夏の妻へコロ〳〵落ちるナフタリン
忍術の樣な夢見る子供かな

◇　熊谷紅

旅の朝此所も六時の汽笛がなり
からかへば水鐵砲で追かける
家借りに行けば家主の顏の艶
棚の箱埃まみれを降される
見合の日忠孝の額見て戻り

◇　中澤濁水

番臺のじつと見詰めた肉体美
チンドン屋子供期待の餘所へ折れ
卒業のもう塗りたてゝ見間違え
流しもと奥樣お留守らしい音
欠ぐ眼にふつと疊のインキ跡

◇　片桐靈壺

靴磨かせて欠伸してゐる
ぶらんこのあたりへ戀をすてにくる
朝顏の蔓をちよんぎつたのは僕でした
あやしげな貞操を抱きしめてゐる

◇　三好計加

ねながらにうたふ娘の聲幽か
手をのべて雨の加減を見る老爺
面壁三年達磨くすぶる
支那手品見た子キセルをのめといふ

◇　平井蒼太

笑顏もてかむふらあじせん憂鬱を
否定せぬわが憂鬱を知りもせず
歡樂の夜を縫ふてく廢人さ

◇　吉田水車

椅子カバー白々として御出勤

ナフキンを折り〳〵かはる肚を決め
犬もたまには形式に吠え

岩垣奇可愛

◇

竹竿のごこか女の匂ひ持つ
若い者花を持たせて父の皺
大阪の空氣が見へた高架線

石曾根民郎

◇

しみじみと夕迫れば
汗に負けて糧なき宵をむさぼりぬ
倦怠期マッチ軸のぼう〳〵と

懐述

棺桶へ足とは父の無に返り

松下小柳子

◇

下女一人雨戸をたゝく春の雨
夕やけを神の如くに農夫たち
ドライブの車へ農夫鍬をおき

妹尾變人

◇

レールの光り我にかへりぬ
我一人眠れず思ふ事多き
妻子を養ふ埃吸ふてゐる

# 粒々集

大阪　長谷川一徹

何處の春と言ふにはあらで驛にゐし
烏賊とれるだけの海とやポッポ船

瓢亭にて

知つて居る春だけ這入れ笠鞋
何樣のお邸と問へば株屋なる

御影　長崎柳秀

停電を隣に知つた下女の聲
騙されて玉の輿でも有ろまいが
冗談でなく觸つてみたい妓の靨
不景氣の世に學力を持て餘し
流行妓いきなり禿の前へ坐し
注射器へ顔をそむけて子をかばひ
すねる丈け兄に覺えた半ッポン
チップだと思へば笑ふ氣にもなり

松山　前田五健

温泉上りの揃ひへ笑ふ遠出髷
一日でイヽと羨やむ程でなし
八挺櫓八挺櫓八挺櫓沖は鯛
古池に似た沈滯の日を欠伸
鮎の背の青さへ夏の陽が透り

# 柳の絮

長野吉高

（一四）

あてにならない事をあてにさすのは、あてになる事をあてにさすのと違つて、これは隨分と骨の折れる事である。妻君は近頃、赤字のおつと續いた家計簿を持出して、泣事を並べるのを止めたが、これは收入のあてが出來たと思ふからだらう。あてにさす雨軒居士が雨軒居士ならあてにする妻君も妻君だ。あてにする事があてにならない事である以上、あてにしてもあてにならないものはあてにならないといふ事をあてにしてゐないとあてが外れるといふ事だけがあてになる。だが、妻君はうつかり此の逆説に引つかゝつたのだ。蜻蛉の眼玉は複雜さうだが其の實やつぱり單純な作用しかなし得ないのと同じに、このパラドックスも亦極めて簡單である。

雨軒居士は「ドイツ文學史」の著述にかゝつてゐるが、要するにこれは妻君に與へる蜻蛉の眼玉で、よしんば此の本が完成したところで、妻君のあてにするやうな印税にありつけるか怎うか、其の點は甚だ疑問である。

書齋には、例の大テーブルと丁字形に並べて貞子さん用のテーブルがある。雨軒居士は毎日午前中は著述に專念するが午後からは貞子さんの爲めに時間を割いてゐる。貞子さんを大テーブルの眞向ふに呼び寄せて、貞子さんの作品の批評だ

原稿紙を一枚、一枚とめくつては、この白の書き方が悪いとか此處のクライシスは次へ送つてクライマックスは此處らにせよ、とたたべ〳〵と朱線を入れながらのお談義だが、一日は斯んな風に面倒な作劇上の實際の指導をし、一日は其の原理を説くといつた調子である。この二つを、隔日に根氣よく繰返すだけだ。だが、一方の若木を堅實に育てゝやる爲めには、育てる者の身になると相當な苦心を要する。とにかくフアウストの壽詞にある通り、縱横十文字に貞子さんの鼻つ

柱を引廻さなければならない。

「——作劇の上に、別な重要性を持つものは俳優を知る、といふ事だ。もつと詳しく言へば、俳優の演技に對する理解とも言へる。では演技とは？これは現實的材料の中に暗示的模倣又は効果を發見する事である。故に或點では繪畫や建築と本質的に同一問題を持つが然し或點では演技の方がより至難だ」

かういふ話の時には、貞子さんは引廻されながらも必ず熱心にノートする。

「ホーマーはあらゆる點で賞讃されるが、就中最も賞讃さるべきは彼が自分自身をどこへはめこむべきかといふ事を知つてゐたことだ、とアリストテレスは言つてゐる。俳優も亦この詩人同樣、ある役を受取つたら、先づ計畫を立てねばならぬ。——俳優に技術の無い場合、演出家や平凡な脚本家及び觀客にとつて最も容易な方法は先天的に適合してゐる俳優に其の役を與へる事である。つまり、鼻べちやには鼻べちやを肥ゝ漢には肥大漢を見つける、といつた調子だ。だが、これは藝術としての演技を冒瀆するもので、單純な皮相な考へ方に滿足する結果、藝術品を創造するといふ重大性が没却される。卽ち俳優をして、藝術家たらしめる技術の不斷の實習といふ事を無視せしめる事になつて了ふ——。」

若し妻君が、こんな話の最中にでもうつかり這入つて來て、ガア〳〵饒舌りでもしやうものなら、必ず雨軒居士の一喝を喰ふものと覺悟せねばならない。

「——演劇といふものがもつ最大の歡喜の一つは、想像力を働かせ、空想の世界を展開させる事である。若し俳優が、其の技術も想像力も無ければ、演劇の生命は其の大半を未開拓のまゝ殘される事になる。だが、如何にして技術を修得すべきか、又は如何なる想像力を必要とするか、等に就ての詳細な問題は茲に言ふ限りでない。何故なら、君は作家として立つので、俳優を目的としないからだ。然し、若し個々の演技に於ける實際的な過程が知りたい、といふなら、其れは八福君に聞くのがいゝ——。」

雨軒居士は、きはどい所で巧くするりと逃げ出す。こんな事は毎日なので、貞子さんも馴れて了つてゐる程だ。

「——で、作家としては、何よりも俳優の演技そのものを信頼せねばならぬ。然し、最も高い信頼を與へ爲めには、作家は自分の提供した脚本からして信頼してかゝるべきは勿論である。悲劇を作らうと、喜劇を作らうと、其は作家の勝手だ。——最近のこと、英國の小說家ゼエ、ビ、プリストリーは、シアター、アーツ、マンスリー誌に寄稿して、自分は惡い悲劇より笑劇を好む、劇に深い生命が刻まれてゐる事は望むが、さりとて惡く深刻に盛られたのは厭だ、といふ意味の事を言つてゐる。事實作家としての手腕は、葬場で笑ふ事と、結婚式場で泣く事と、この相互の關係を如何に巧妙に使ひこなすかにある。これは丁度、亭主が女房を使ふのと同じで

容易な事ではない。一体、女房といふものは、甘やかすと兎角つけ上つて困るものだ。かうなると、亭主が時々彈壓を加へたくらゐでは何の効ち無い。女房なんていふ奴は——。」とんでもない時に女房論が出たりするのは、話材が盡きて、雨軒居士の論據が頗る怪しくなつて來る證據である。貞子さんは、今迄にこの手を度々喰つてゐる。餘程注意してゐる心算でも、ぢうかするとしてやられて了ふ。作劇原理と雖も、これでは氣を許して眞面目には聞けない。

貞子さんは、日曜日の午前中だけ、八福君の好意で別に指導を受けてゐる。八福君の家は新宿にある。忙しくて暇が無いのに、貞子さんの行く日は必ず何んとか時間の都合をつける。八福君の指導ぶりは、雨軒居士とは全然に違ふ。雨軒居士の方は、ギリシヤ文字を裏透しに見るやうに至極ぶつきら棒で解り難いが、八福君の方は品のいゝ日本文字の行書體のやうな調子で、親切に座談的に色々と必要な事を說く。

「——昔の劇場には、今日のやうに專問の作者といふものは無かつたんですよ。始めて狂言作者といふものゝ名の見えてゐるのは、大阪では福井彌五右衛門、江戸では都傳内といふ事になつてゐます。江戸で作者を專問にしたのは中村傳七だとも言はれますが、尤もこれ等に就ては色々と異說のある事で、早急には確定出來ませんが——作者も最初は一人だつたやうですが、事務が繁雜になつて來たので、一劇場に五、六人から十人以上も置くやうになつて來ました。所謂「狂言作者」とはこの人達の事なんですよ。其の仕事は、たゞ脚本を書くだけではなかつたんです。例へば繪看板の下面を書いて畫家に渡す、道具帳を作つて道具方に渡す、幕毎に入用の衣裳、鬘、小道具の事等を詳細に記入した帳面を作つて、其れ〴〵の受持に渡す、或は舞臺に出てゐる俳優に臺詞をつけてやる、幕の開く時、道具の廻る時、幕切れの時等には拍子木を打つといつた風に、其の他雜務がとても多かつたんです。其れから、劇場の樂屋には作者部屋といふのがあつて、作者は其處に机を控へてゐました。其の首席が「立作者」で次を二枚目、三枚目といふやうに呼びました。本當はこの三枚目までが作者と言はれるので、以下は「狂言方」と呼ぶのが普通のやうです。假りに立作者としての鶴屋南北とか河竹默阿彌等に就て言ひますとですね。彼等は趣向を案じて其の中で肝要な幕だけに筆を執り、他の比較的輕い幕は、二枚目とか三枚目とかの作者に書かしてゐたんです。あの「四谷怪談」ですね。あれなどは普通に鶴屋南北の作と傳へられてゐますが實際は南北はあの中の二幕か三幕を書いたゞけで、後は他の作者が書いたのですよ。つまり、一の合作に過ぎません。最初は一人一作だつたのに、何時頃からこの合作制度になつたのか十分には判りません。ずつと降つて明治になると——さう、確か二十年か一、二年頃だつたと思ふが——福地櫻痴居士などは、一人一作制度を主張したやうですがね、二十六年だつたかに、河竹默阿彌が死んだのを名殘りに、この合作制

度は自然と止んで了つた、とも言へませう。」

八福君の說明は、痒い所へ手がとゞくやうである。

「そこで、貴女にですね。よく言つて置きたいのは、江戸以來ごこの劇場で新脚本を上演する場合でも、其れは皆んな以上のやうな座附作者の筆になつたものに限られてゐて、局外者の書いたものは、上演される事は絕無だつたと言つてもいゝといふ事なんです。僕の敬服してゐるあの有名な散步博士が、明治二十八九年頃かに「桐一葉」といふ史劇を書いた時この劇は尠くとも從來の史劇の作風に一新味を來したものではありましたが、この文壇的努力のあつた人の書いたものですらも、當時容易には上演されず、確か三十八年頃になつてやつと上演されたと思つてゐますがね。この間、實に十年もの歲月が流れてゐます。——局外の文學者が、新作をドシドシ發表上演し得るやうになつたのは、明治の末期からでせう。從來の座附作者の專業だつた劇作の仕事を、局外文學者がやるので、之等の人は單に脚本さへ提供すればいゝやうになつて來たんです。で、作劇上の面倒な形式等も、作者各自の思ひ〳〵で、昔のやうな一定の型といふものが無くなりました。然し、從來の座附作者が全然に消滅したのではありませんよ。現在でもゐる事はゐるのです。これは劇場內での色々な仕事の關係上、或點に於ては必要なんですからね。——現在では餘りいゝ脚本がありません。これは要するに作家に其の人がゐない事を意味するものだと思ひます。だから、劇場側では勝れた脚本の出る事を願つてゐます。全く今のところでは行詰つてゐますからナ。——近頃は、專りに歌舞伎劇の亡命論者が出て、今にも潰れて了ふやうに言ふ人達がありますが、然し僕はさうは思ひませんね。改良すべき點はあるでせうが——いや、この事に就ては後で僕としての意見を述べますがね——將來、作家として立たれる貴女が、怎ういふ作風に走るか、如何なる境地を開拓して行かれるか、といふ事は何んとも豫斷いたしかねますが、何はともあれ、立派なものを作る、といふ事だけは忘れないで下さい。現在では男であれ女であれ、立派な作品さへ持てば、上演され得る可能性があります。レーゼ、ドラマだけを書くといふ事も立派な仕事には違ひありませんが、然し、劇作家として立つ爲めにはどうしても上演されるやうなものを書く必要があります。女で、小說や詩を書く人はありますが、劇作方面の仕事をしてゐる者は、現在では餘りありません。にも拘らず、貴女が進んでこの六ケ敷い仕事を志望されるといふ事は、全女性といふものゝ爲めに——。」

貞子さんにとつては、八福君のこの禮讃だけは耳が痛い。

八福君は、南うけの明るい部屋にキチント整理した書棚から古い演劇記錄や古い作家の書いた本などを持出しては、貞子さんに色々と說明する事をも忘れない。或は默阿彌ものゝ一節を詳細に批判したり、名脚本の一部を朗讀して聞かせたりシエクスピアのものを持出して近松のものと比較して論じた

り、チエホフの作風を吟味したり——とにかく、貞子さんの爲めには非常に熱心に指導の勞をとる。自作の脚本が上演される時には、其の稽古にわざ〳〵貞子さんを同伴して、實際的に研究する機會を與へる。これ等の好意に對して、貞子さんが感謝しない道理はない。

八福君と雨軒居士とに、かく指導して貰ふ其の用意が、貞子さんの作劇技巧上に如何程の利益を齎らしたかは兎も角として、少くとも貞子さん自身が抱いてゐた作家といふものに對する、過去の淡い夢の塔を、根底から破壞せしめた事だけは事實である。

作家となる爲めに、單に他の作家の作品をのみ多く讀む事に因つて敎へられるものは、其の技巧に多くて、內容から學び得るものは寧ろ極めて尠い。內容は他の方面から求むべきである。この內容を如何に豐富にすべきかに就ての問題は、劇作家として立つ上に最も重大な事である。この點に於て、女性としての貞子さんは、非常な危機を孕んでゐると言はねばならない。この事を、それとなく鞭打つた八福君と雨軒居士とは遺に偉い。同時にこの點に早くも氣づいた貞子さんは俊敏だ。今迄に貞子さんが書いたものゝ中で、例へば人物の性格描寫などに就て見るに、これは總べて失敗してゐる。プロットの運びに、女性らしい纖細さはあつても、其處に無理があつたりする。折角苦心して書き上げても、片つ端から雨軒居士の酷評を浴びて葬り去られて了ふことは、自分の缺點を知つてゐるだけ、それだけ貞子さんとしては無念であるに違ひない。貞子さんは、雨軒居士を最も怖れた。何故なら、作家として立つだけの才能の枯涸を指摘されると、事情が事情だけに、堪え難い事であるが爲めである。星を求めて、遂に星々得なかつたお伽話の、あの哀れな痴者になるのではなからうか——貞子さんの惱みは實に深刻である。

八福君は、暇があると時々雨軒居士を訪ねて來る。風の如くに來つて、風の如くに去るを常としてゐる。どういふ風の吹き廻しだつたか、一度この八福君と武君とが顏を突き合した事がある。

「雨軒君、さつき歸つたあの精騎さうな男は誰だ？」

「あれは頑久の息子だよ。」

「頑久？」

「出入りの菓子屋でね、好人物だ。僕が嫁の世話をしてやつた事がある。」

「ほう、どうだね、圓滿かい？」

「ところが駄目だつた。折角骨は折つてみたんだがね。見合のところまで漕ぎつけたけれども、男の方でウンと言はぬ。で、結局お流れになつて了つた。」

「残念だつたナ。——僕に一人心あたりがあるんだが——どうだらう、勸めてみては——なか〳〵いゝ娘さんだよ。」

「嫁の世話はもうお斷りだ。お蔭で、今度は愚妻に大分叱られたよ。世話のしかたが悪いつてね。だが君、これは愚妻めが無理だらうぢやないか。僕は隨分と奔走したんだ——まあ幸ひ本人も當分は嫁の問題に係りたくないさうだから、其の中に機會を見て、今度は君に出馬して貰ふよ。」

「都合で乘出してもいゝ。——君の家へは何か勉強にでも來るのか。」

「さうでもない。やつて來るから遊ばして置くんだが、なか〳〵調法な男だよ。この間から書齋の整理を、一人ですつかりやつてくれた。二、三日前には、壞れた椅子を一脚修繕してくれた。」

「ふうン。」

「何時だつたかテイ君が、門の外を掃いてると、何處からやつて來たのか悪性の猛犬が吠えかゝつたさうだがね。其の時都合よくあの男が來てゐたので、すぐに飛出して犬を一蹴したらボールのやうにすつ飛んださうだ。以來、テイ君はすつかり敬服してゐるよ。」

「剛勇だね。体格だつてがつちりしてゐる。」

「その筈だ。昔はラグビーの選手だつたんだよ。犬を蹴飛ばした時の手並——いや、足並は流石に立流なもんだつたとテイ君が感心してゐる。テイ君は、ラグビーとなると眼の色が變るといつたフアンだし、僕は僕で飯なんか喰はなくとも見てゐたいといつた風だから三人が寄るとラグビーの話ばかりだ

「君の野球嫌ひと、ラグビー氣違ひとは有名だからナ。」

「實際、ラグビーのあの試合を見てゐ給へ、男性的で、實に堂々たるものだ。野球なんか馬鹿〳〵しくつて見ちやゐられない。既に近代人には、どうもピッタリとしないやうな氣がする。刺戟が散漫で、第一あのいやにコセ〳〵した技術の爲め、どうも氣魄といふものにすきがあつていかん。野球フアンなんていゝ氣なもんだね。そこへ來ると、ラグビーは何んと言つても大陸的だ。ケチ〳〵した戰術や吝つたれた技倆が無い。押して〳〵押しまくるといつた氣魄と氣魄の相搏つ、あの息もつかぬ氣合が面白いからね。そこには野球のやうに間隙や餘裕を許さない。總べて直線的で、雄大で、壯烈でー。」

「また、始つたナ。いや解つた、解つた。」

「野球は、まご〳〵してゐるとアメリカあたりのやうに、今にラグビーに蹴落されて了ふかも知れないね。つまり、何故にさうなるかといふと——。」

「解つたよ。僕には野球だらうがラグビーだらうが、其んなものは問題ぢやない。それより芝居フアンの事で忙しい。」

八福君は、こゝらで風の如くに飄と去る。(つゞく)

# 光耀抄

## 葭乃選

樂觀が出來ぬ三十九度の熱　蓼ヶ池　紅蔦

麥畑の中に赤きはれんげなる

骨立つた指にルビーの赤々と

蕨狩りのび過ぎたのも若いのも

植木鉢ズラリと列べ春の朝

乙女子の四ツ葉を探す眼のうるみ

恩師御逝去遊ばさる

眞黑いセルの羽織が眼に殘り　神戸　茂もよ

留守番をする日曜がいやになり

暖かくなつて水虫また出かけ

芽を出した紅葉も春はうれしそう

おさらひをするのにラヂオが邪魔になり

お針子へ春の衣裳がまはされる

幸な我が身と思ひ子と笑ひ

二ノ腕の文字へ顔見る女風呂　撫順　松代

滿洲の野にも咲きますすみれ草

手土産の有る客子供よく見わけ

來客へ二度目のお米とぐ夕げ

病む母があつてお連れの無い子供

お隣へ子供を賴む出社前

凱旋日荷馬の背にも旗立てゝ　大阪　壽枝女

帶々の見えるとこだけいたんで來

月賦もう滿期頃にはよごれて居

小皺にも昔が見える美しさ

理屈ぽいのは商賣と云ふ顔よ　大阪　機見女

法服がうくわつな春を嗤ふてる

トランクを持つてる春が羨やまし

せつかちな靴音がまた通りすぎ

子を抱けば御兩親はと尋ねられ　大阪　公子

消毒もこわごわしてる母の年

あれも要るこれもないのが嬉しくて　大阪　武子

まぼろしのやうに世界を見てしまひ

ひやかされてゐてもうれしい髷をゆひ

有明の月へ子供は背をたゝく　大阪　伊勢子

ごんぞこすぎて大膽な氣にもなり

ロボットよお前は何を想ふてる　蓼ヶ池　あざみ

食ふだけは心配要らぬ施療院

手をつけぬ御飯へ母の顔うつり　大阪　茂代

拾錢の實用足袋につられたり

東西屋御大たけが絹なりき

○　麻生　葭乃

さらば〳〵と散るはすゞかけ

若くいへば帽子を脱いで見せる也

# 一路集（募集句）

## 同伴

松盛琴人選

一人かと問へば後ろのつを指し　菊路
同伴の祖母へ手を貸す墓参り　西英子
同伴を奥様と呼ぶなれたもの　草村
信じられぬ同伴を黙殺する　一正
聖人を途中で撒いてしまいけり　一柳
急ぐ己同伴心知らずゐる　千尋
肩と肩ひつつきそうに並んでき　世都象
同伴の妻へまぶしく陽があたり　曉鳴子
同伴の同じ訛りも嬉しくて　英賀夫
悪友は同伴をは見逃がさず　今雨
同伴に社長かおつて肩が凝り　薫
丸髷がつんとして行く伴おがあり　紅
同伴の方へ馴染の藝者がゐ　虹一
同伴は史蹟聞いてる天守閣　巴人
同伴へ燐寸ばつかり借りられる　華水
同伴の耳が女將に借りられる　艸樂
同伴もあがれと云はれ絹布團　曲豆
足許を見られ同伴買はされる　史錄
男子席同伴と云ふ女ゐる　水車
同伴は席を譲つてせまくかけ　永樂
同伴の女煙草へ火をつける　柳村
口が下手ですと同伴口を添え　裸人
ほつねんと同伴もなく櫻見る　あや美
同伴にちと僻があり親しめず　いわを
ヤア君も家庭奉仕かと百貨店　虚白
同伴へ笑つて置いて化粧室　小松園
物騒な話へ同伴歩を急ぎ　幸村
ミスニッポン同伴の母世間並　白帝子
同伴の母は唯々畏まり　同
どもかくに同伴席の二人立ち　三碧
同伴のフット視線を感じたり　鐘生
同伴がお姑様の目に餘り　瑞穂
御先祖の墓へ新婚並んで來　木食象
同伴が欠伸をしてる飾窓　憲坊
同伴は彼氏の用心棒だつた　洋々
同伴へ犬はそこらを嗅ぎ廻り　河鳥流
同伴の方へも女給媚を遺り　柳人
同伴で出れば新妻友に逢ひ　銀雪

---

## 西之町 MEMO

緑雨

▼百號記念號は到る處ですばらしい好評で各書店からは賣切の情報に接しました。本號も「川柳の夕」の記事や主幹の川柳行脚、萬よし君の滿蒙視察、歡迎川柳會の寫眞などで賑やかな雜誌になりました。

▼路郎主幹は「川柳の夕」の疲れをものともせず五月七日夜九時卅分の大社列車で筱川支部五周年大會のため西下されました。出席の通知もされずに突然緑之助君を訪れられたので同君の喜びは異常なものであつたそうです。尙支部大會は緑之助君の孤立の立場にありながら地方としては稀に見る盛會だつた事は同君の勞の如何に多大であつたかを思ひ感謝せずにはゐられません。

▼本誌の選者として左記の諸君を推薦することになりました。從來共選々者の朝田新水中島鐵洲、關本雅幽、尼緑之助、水谷鮎美、木村晃卓、中見光路、住田亂耽、の諸君は個人選の選者に、新に西田艸樂、須崎豆秋、櫻井圓角、阿形一杉、生田翠夢、西村明珠、福田鶴峰の諸君を共選選者に推薦することになりました。

▼本社堺支部の幹事友淵貴山君は家事の都合より幹事たる事を辭任されたので八木美

同伴に見覺えのある辻を折れ　八歩
角ばつて同伴席にゐる小僧　明珠
同伴の妻君馴れた口をきゝ　湖山
同伴で來よとは妻を見る都合　青兒
同伴は便所の脇にほつこかれ　玄坊
同伴へ同じ挨拶くり返し　灯羊子
同伴の叔母の氣轉で固くなり　南葉
同伴の一人二人は知らぬ顔　耕朗
同伴の妻は車内で見られてゐる　無鬼
同伴は別な座敷で待たされる　一久
同伴へ目顔で知らす人が來る　掉二
同伴が寫る洗面所の鏡　のぶを
鹿にやるせん餅に同伴氣が揃ひ　秀樹
同伴で來て活動に立たされる　柳次
別嬪にコヽ來まつせと斷られ　水人
同伴を强ひられ嫌な警察署　壽惠兒
同伴の夫人も如才ないお世辭　柿三
黑ダイや若い燕を伴れてゐる　白花十
同伴の母に石ころ蹴りのける　變人
春の宵誘はるまゝ出かけたり　たし路
兄さんと歩くバラソル後れがち　耕民

同伴者何をすねてか右左　美津女
同伴の犬に不良のふところ手　錦石
同伴をこばみタクシー呼んで居る　沒食子
同伴は女で仲居閑が出來　吐句坊
同伴は發展だネと言はれてゐる　葉光
同伴へ鹿寄つてゐる寄つてゐる　孤鶴
同伴者草鞋かさけて又おくれ　方眠
同伴を許して親は眺めてゐる　四五磨
(佳)同伴へよろしく賴む酒の辯　同
(同)同伴エレベーターの隅に立ち　春秋
(同)同伴の白いショールが目立ち　素月
(同)同伴の趣味を四五間先で待ち　竹風
(同)同伴は霧のホテルに消へ　沐天
(同)同伴の思ひなせば灯が誘ひ　民郎
(同)同伴の妹は彩の樣に來る　富美三
(同)同伴の自働車パンクしてゐる也　白峯
(人)同伴の女の呼吸の幸福さ　坊茄子
地)友達に置ふて一人で歸られ　機見女
(天)同伴者あなたまついて來る　方眠
(軸)同伴の嬉しさ石にけつまづき　琴人

## ぶらんこ

ぶらんこは萬年筆が落ちてやめ　幸村
孫と來てぶらんこを押す役がぶらんこを一番先に子が見つけ　裕介
ぶらんこがあつて公園だと知り　柿三
次に乘るつもりぶらんこ押してぶらんこに小屋がゆれて輕業師　芳郎
ぶらんこの揉め聞き〳〵手内職　史錄
虹一
孤鶴

## 安西杏三選

青葉すれ〳〵にぶらんこ振つて居る　富美三
思ひ出のぶらんこちりベンチあり　錦石
ぶらんこの動きに馴れた籠の鳥　木喰象
挨拶にぶらんこ小さくゆれて居る　正治
ぶらんこに乘つて處女の氣とがし　素月
意地を持つ子のぶらんこは止いな　洋々
ぶらんこに母親一人氣を使ひ　句林

---

夜路君と交替される事になりました。同君は堺市役所の社會課に勤務され堺市への川柳普及に努力されつゝある方であります。

▼本社御旅支部の幹事櫻井圓角君は家事の都合上辭任されたので生田翠夢君が代つて幹事になられました。新幹事の活躍を祈ります。

市場沒食子君。
大西八歩君。
中西おさむ君。

の三氏は今回社友として入社されました、今後の活躍を祈ります。

▼本社の主催の百號記念句會を發表する筈のところが編輯部校正係の手落ちで發表の出來なかつた事は甚だ遺憾でした。

▼五月號は創刊以來始めて遲刊いたしましたので各他からどうした〳〵といふ督促狀は申すに及ばず電報や電話かゝる狀態は少からず恐縮してゐます。何分「川柳の夕」の社會的大宣傳のために主幹及び編輯局同人社友一同が大活躍してゐましたので本誌愛讀諸者君に對して多大なる迷惑をかけましたことを深くお詫び致します。

▼「週刊朝日の主催で五月十五日午後一時より大阪朝日新聞社樓上で週刊朝日十周年記念川柳大會を開催されたので本社から水車、夕鐘、靈壺、夢裡、奇可愛、豆秋、おさむ、新水、柳秀諸君の外あやみ、みつる、沐天の諸君外約二百名の出席があつたそうです。

▼百號記念句會は五月廿日夜ちとせ倶樂部で催し、路郎先生と萬よし君の講演がありました出席者は約百名で盛會裡に芽出度記念句會の幕を閉ぢました。當夜鳥取支部の幹事中島鐵洲君がわざ〳〵來阪されたので散會後南地大市で小宴を開きました。その出席者は主賓鐵洲君と路郎先生、琴人、ひろし、かほ

ぶらんこへ隣の庭が見へてくる　八歩
ぶらんこの衣裳が春の日を受ける　湖山
ぶらんこの音に公園たそがれる　青兒
ぶらんこに誰もゐません春の風　葉光
ぶらんこの順へ小さき不平あり　銀雪
ぶらんこの油がきれたらしい音　秀樹
病院の窓から見えるぶらんこよ　坊茄子
ぶらんこは隣の柿を見つけ出し　美津女
ぶらんこの數が足りない幼稚園　柳人
父さんが來るぶらんこに手をたき　掉二
春雨にぶらんこの綱靜かなり　一久
ぶらんこの足は櫻へ屆きそう　柳次
蝙蝠が低うぶらんこゆれてゐる　沒食子
ぶらんこへ遠く居る兒の松葉杖　西英子
新聞を手にぶらんこを押してやり　巴人
ぶらんこへ乘れば御池か少し見え　白帝子
遊園地ぶらんこがあり晴れてゐる　今雨
ぶらんこへ公園の花散りかゝり　菊路
ぶらんこへ櫻の花が散つて來る　華水
ぶらんこへ今日一點の雲もなし　鐘生
ぶらんこへ別莊番の遠い耳　裸人
ぶらんこを下りてキャラメル一つ　雀子郎
ぶらんこにお猿の戀がゆれてゐる　英賀夫
塗りたてのぶらんこへ所在なく子　瑞穂
ぶらんこの邪魔な所に枝がある　鴉天
里歸り姉の子がぶらんこで友が　灯羊子
ぶらんこに讀書の友はゆれてゐず　同
おぼろ夜をぶらんこ垂れてぶらり　春秋
式があり今日のぶらんこはかれ　同

◎

ぶらんこへのれば足から春の風　三碧
ぶらんこのひもは切れる事もあろ　鴉天
先生の乘るぶらんこへ圓くなり　灯羊子
ぶらんこが塗り替へられ休暇明け　銀雪
ぶらんこはピアノに合はせて搖れ　小松園
ぶらんこは高し雲雀囀れり　虚白
ぶらんこの順をキャラメル待たれる　いわを
ぶらんこへ鴨居のゆがむ家を貸し　慈雨來
弟の意地はぶらんこ降りて來ず　紅
ぶらんこの雨公園を廣くぬけ　古都路

秀吟

ぶらんこに乘つて六甲山を蹴り　春秋
ぶらんこに春の心を任せきり　機見女
廢人の夢ぶらんこの動かない　雀子郎
ぶらんこの留手二三歩引づられ　艸樂
ぶらんこが野球仕合の邪魔になり　一柳
お早うと不意にぶらんこから鸚鵡　壽惠兒
ぶらんこの王子孤獨のつきをひ　民郎
ぶらんこに立てば風あり若さあり　靈壺
ぶらんこが淋しく夏の海を待ち　耕民
ぶらんこの横て張板よく乾き　白帝子

□

本誌百號記念を機會に新選者の推薦と共に、一路集の課題を一題殖やし、毎號三題宛募集し投句家諸氏の興趣を一段と深めることにした。佳吟名句の投吟を切望する

（編輯局）

---

る、新水、艸樂、萬よし、素人、夕鐘、翠夢、葉平武子の諸君と私。

▼福田山雨樓君は出張勤務で五月十三日湯の山溫泉、十四日松阪、十五日紀伊長島で泊られたので本號編輯や記念句會には出席されなかつた。

▼西田艸樂君は五月十八日白濱から湯崎へ清遊されて左の句をよせられました「地曳網散歩の手を貸したがり」

▼竹内多聞君は本社の同人として多年活躍されてゐましたが家事の都合で退社されることになりました。一日も早く復活されんことをお待ちしてゐます。

▼釜ヶ池支部の五月句會は八日の午後開催されましたが差支へて本社からは誰も出席されなかつたそうです。しかし會は順序よく運んだそうです。

▼私は芦穂、山月、鶴峰の諸君と五月六日の天女丸で洲本から鳴門觀潮をいたしました。

▼竹内機見女さんは五月一月の日曜に廣田山のつゝじを見て甲山に登り寶塚まで徒歩されたそうです、なか〳〵の健脚家です。

▼同人太田朝陽君は一月下旬から病臥されてゐましたが昨今漸く手紙位見られる樣になつたとの賴りがありました。一日も早く全快を祈ります。

▼高知支部、鏃川支部五周年川柳大會、蟷螂川柳社から寄書が屆けました。

▼本號の編輯は路郎先生、町二、杏三、丹路、琴人の諸君と私とで致しました。

## 改號と轉居

▼岡田白雨君は白羽と改號されました。

▼首藤竹風君は（神戸市神戸區中山手通七ノ一八二へ

▼鈴木弘果君（金澤市笠井町一九ノ三〇）

# 柳壇未曾有の盛觀
## 川柳社會化運動の尖端
# 「川柳の夕」は輝く
### 藝術の殿堂朝日會館
### 歡喜に滿ちた五月四日

**川柳の社會化！** それは我が「川柳雜誌」を貫く精神である。この理想、この抱負、この熱意を捧げて十年一日の如く唱導し、主張し且つ實行して來たところである。

誤られた川柳觀に禍ひされて、眞の川柳が何時迄も社會の輕視から脱しないことを非常に遺憾とし、これが是正の使命を帶びて「川柳雜誌」は奮ひ起つたのであつた。大正十三年創刊以來孜々營々としてこの使命の爲め川柳界將又一般社會に呼び懸けて來た。幸ひにして理解ある愛好者と、熱誠なる同人社友諸君並に名聲ある後援諸彦の絶大なる援助の下に、麻生主幹の熱血に育くまれて「川柳雜誌」は既往九年間一回の休刊もなく、着々として成果を收め實績を擧げて來た。

而し柳壇と別世界の觀がある、一般社會への川柳浸潤は仲々容易なものではない。何か異常なる試みを時には斷行せなければ社會の耳目を呼び集めることは至難である。一歩々々の倦まざる努力も元より尊いには違ひないが、それだけでは効果の表はれが遲い。恰度往古佛敎普及時代に奈良の大佛の樣な巨大なものを建立して世間の眼を引きつける事が必要であつた如く、川柳の社會化と云ふ大きな仕事の爲めには自ら大きな旗を振る必要があるのである。

皐月の空も快晴に惠まれた五月四日の夕、大阪市朝日會館で催した「川柳の夕」は卽ちこの意圖から敢行した柳壇劃期的の一大運動、熱と意氣で斷行した一大雄圖であつた。

果せる哉！我等の雄圖は酬ひられた。實に涙ぐましい努力ではあつたが、嬉し涙を禁じ得ない程の盛況を見た。あの廣い會館の大部分が千餘の聽衆に依て埋め盡された。社會的には微細な存在しか示してゐない「川柳雜誌社」ではあるが、その主催の下に、（表面上新聞社其他何等の後援なくして）獨力を以つてあれだけの事業を成し遂げたことは、柳界には勿論社會的にも驚異に價する收獲であつた。

しかも入場者の斷層には元より川柳家も多數を占めて居たが、一見してインテリ階級具眼の士が澤山集つてゐたこと、妙齡なる麗人の少くなかつたこと等は、この催しが只に數の上に於てのみならず その響きの上に於ても一層力强い効果を收めたことを確く信ずることが出來る。

路郎主幹は這般、關東川柳團が大擧して關西訪問の際、その歡迎大會の席上に於て、今後より多く 川柳鑑賞者を求めなくてはならぬと論じたのであつたが、その意味に於ても「川柳の夕」の催しは川柳の輝かしき將來を約束されたものである。

川柳はこの祝福すべき催しに依つて 未だ嘗て見ざる大きな烙印を殘した。

○

午後七時・定刻を待ちかねた聽衆のどよめきを破つて開會。

### 開會の辭

司會者　高尾亮雄

私が司會者の役を買つて出たのは、麻生路郎氏とは二十餘年間親しくして 來たからであります。私が死んだ時に一句を手向けてくれるのはきつと、柳壇の第一人者である麻生氏であらう。その恩返へしをいつかして置

かうと思つてゐたが、その恩返しとして今度の御用が役立てば私は實にうれしい。さなくても經營の困難な趣味雜誌に於て百號を重ねる事は實に容易な困らぬことである。三號位で終るのが普通であるのに「川柳雜誌」が百號を出し得たことは實に偉大であると云はればならぬ。殊にかゝる催しで斯かる盛會は朝日會館始つて例のないことである。

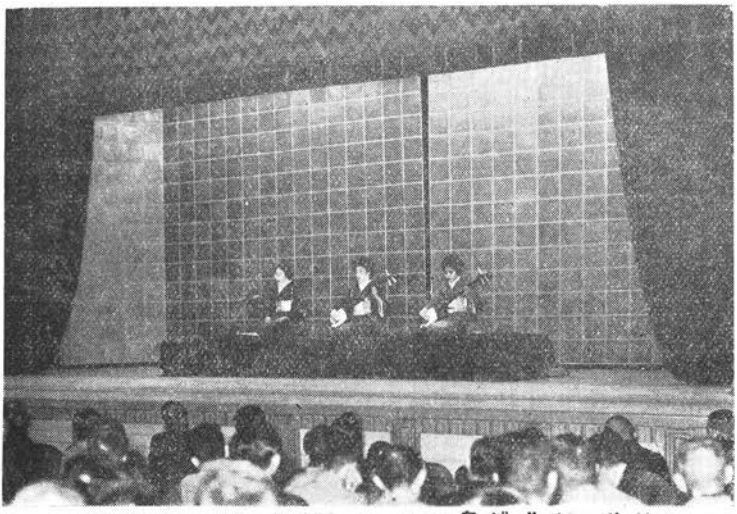
## 挨拶

庄　萬よし

川柳雜誌社を代表して御來會の諸氏に厚く御禮を申上げます。川柳雜誌社の末席を汚して居ります私といたしましては、我が一川柳雜誌」が壹百號に達しましたことは誠に感慨無量であります。本誌が今日の隆盛さに到りました苦闘の裏には恩師廉生主幹は申すまでもありませんが同人社友及各誌友の涙ぐましき努力が傾到されてゐるのであります。先般大阪に於て關東川柳團の關西訪問について歡迎句會が催されましたが二百十數名の多數の來會者がありました。今日川柳の發展狀勢が、俳句や短歌よりより以上のものがありますのは、川柳の社會進出が目覺ましき所以でありまして、私達川柳家にとつては實に嬉しい極みであります。

川柳に手を染めるのは自分で樂しむのが主でありますが、同時に同志と共に樂しむことが出來るのにあります。日本の短詩型の中で、川柳は最も大衆的であり近代の文化に浸つてゐる人達にも容易に請け容れられるものでありまして只面白おかしく諷刺するだけのものではないのであります。日本人に取つて川柳は近代的に於て一番適切な詩型であると思ひます。

今日諸君の御熱烈なる御聲援御共鳴に依り我等同人社友相協力して更に勇躍努力し主幹の提唱に據る川柳社會化のより一層の實現を期する爲めに盡したい覺悟で居ります。



長唄　新曲浦島　（向つて右から杵屋七代・杵屋彌七郎・杵家幸七）

## 女性は躍る

三上三太郎

「川柳雜誌」が茲に第百號を出し得た事は實に嬉しくてならない。自分は東京で手を打つて喜んでゐたのであるが、東京で手を打つてゐても仕方がないので、大阪迄やつて來てお話をして喜びの言葉とする次第である。

私の題は「女性は躍る」と云ふのであるが、果して女性が躍るか躍らぬかわからぬけれども一つ躍らして見たいと思ふ。大阪でも東京でも近頃女の方がよく出歩いてゐる。以前は月に二三回出たが今はその反對で月に二三回は家に居るといつた風である。その爲によく自動車が混む、女の外出を一日はだめ位にしたら大變混むのが違ふだらうと思ふ。多年私も之れが爲に困つてゐる。新夫人は殊によく出る同窓會だの婦人會だのと云つて

新夫人今日も出あるく會があり
洋裝になり斷髮になつて來るが、二三年前迄はそれもおかしく感じた。まるで風呂敷が歩いてゐる樣であつた。
洋裝が何やらしてる紐がたれすんなりとした洋裝はよいものである
洋裝の女の腕が日本人斷髮して毛をちゞらす。そしてパパ、ママ等と呼ばす樣になる。
パパさんと亭主を呼んでちぢらさせお化粧が大變上手になつたが全体を見るとどこか必ず一つは足らないものがある。
おしろいはよいがきたない耳の中
美容院に行く、美容院にも具合の惡い顏がある。
美容院施すすべがなかりけり
物が皆あかるく見える髮の出來
女同志すれ違つてもお互に見て、鼻がひくいとか何んとか難を見出すものである。
すれ違ふ女同志のはげしい眼
一年と云ふものは女を遊ばす爲に作られてゐる樣に思ふ。正月でも男は五ツ紋で禮廻りをする。女は出ない、双六だのかるただの又は追羽子をして遊ぶ。
追羽子に嫁は娘の氣にかへり
追羽子に嫁は見事な片手わざ
二月はどうかと云ふと、雪がふつて寒いそれだのに出て行く。それは芝居見に行くのである。そして子供の出る芝居、阿波の鳴戸や、先代萩を見ては泣かされる
泣くまいと思へど子役張りあげる
三月はお雛樣でこれは女の方のものである。
雛の客亭主は邪魔にされるなり
四月は花見で女の方は見せに歩く。
櫻から櫻へ女見せあるき
五月、六月はピクニックの時で之も妻君の方から云ひ出して出かける。
ピクニック思ひ出多き所くしる
子供をつれて出るのは愉快なもので、子供の唄ふ唄を歸りには覺えて了ふ。
ピクニック親が覺えた子の唱歌
七月、八月は水泳であつて、女性のスポーツとなつてゐる樣である。水泳は女性にとつてよいものである。十四、五の娘さんがレコードを作る。
プールから上るとたゞの女の子
九月、十月はスポーツの好季節。
天高く彼女も肥える馬肥える
十一月は結婚の話が多い月である。
うれしい日はづかしい日となりにけり
十二月は一年中で一番忙がしい時だから女の方も忙しくて出られないと思つてゐるとそうでない。デパートに買ひ物に出る、大賣出しに行く、少しでも安い物を買ほうと思つて特價品に行く。
女房の腕力を知る特價品
女性の職業の方から見ると近頃は何々ガールと云ふのが多くなつた。曰く、マーヂャンガール
コトン〳〵マーヂャンガール又上り
タイピストも男の方から女の方へ變つて了つた。
タイピスト社長のお茶へ氣を配り
聲樂家も女性が多い。
ソプラノはすぐてつぺんへ聲が行き
こんな事を云つてゐると切りがない。
月給がとれて女に靴がいり
女は何であるか、大きな?であると思ふ。私があるとき女學校で講演を頼まれた。一二年生の娘さんが控室で私に題を聞かれたので、私は「女性を語る」と云ふと「どうか貴方のよく御存じのものをお話し下さい」とやり込められ私は娘さんの勇敢さに面喰つて早速題をかへた。
斯う云ふ娘さんは今晩後で御覽になる芝居の樣なものになる。
戀の罠あの眼だらうか眼だらうか

## 川柳にあらはれた家庭

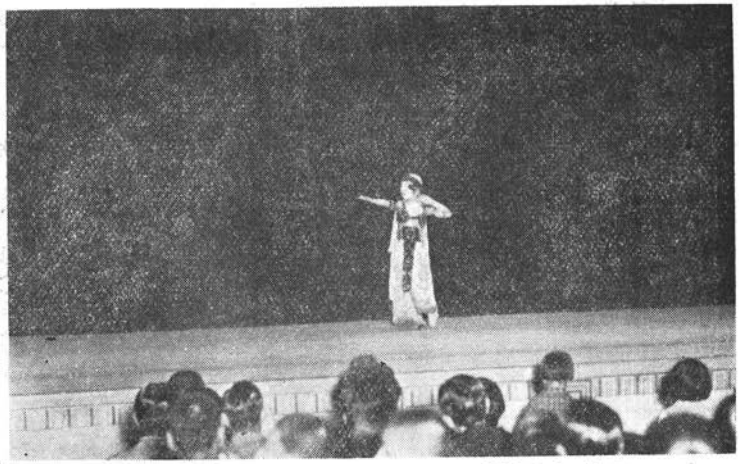
岸本水府

「川柳雜誌」の百號記念として「川柳の夕」を催された事は、川柳にたづさわる私としては非常に光榮であり又川柳界にとつても大きな喜びである。私の題は川柳にあらはれた家庭」で婦人講座の放送の題の樣であるがそのつもりでお聞きを願ひたい。
川柳家が川柳を作るのは別な目的がある

のであるが、川柳を作られない方が川柳を見ると、どんなに爲になり利益になるかを考へて見た。

家庭の皆さんとして、川柳を見る家庭は朗かで明るい。朗かで明るいと云へば、電燈の下で含嗽をすると云つたやうな言ひ方であるが、夫婦親子の間に川柳を嚙みしめた味ひを知つておるならば非常に晴やかで好い。夫婦間は子供の如く、又戀人の如くであつてほしい。川柳を見ると人と話をする上に一種の魔術を持つことが出來る。先方がきまりのわるい事を云はねばならぬ時に話を變へてやる事が出來る。物事にも氣がつく樣になる。商買でお客の心理がよくわかるやうになる。高野豆腐にタンサンをそへて賣る。あれ等は家にタンサンはあつてもそへてもらへば貰つて歸るのが人の常である。こんな事が川柳を見てゐるとよく氣が付くやうになる。又靴下の破れを氣にしてゐる人があると、その破れ目を見ない樣にしてやる事が出來る。

ある廣告部でモデルを寫眞に撮つた時に、コップを右手で持つてゐる樣にと云つたが左手に持つて了ふ。よく見ると左手にダイヤの指環がはまつてゐた。モデルはそれを撮つてほしいのである。そんな事が川柳を見てゐればすぐに分る。又川柳を見てゐることあきらめがつく。悲しい思ひをした時川柳を見てゐると、川柳が自分の味方になつてくれる。



こども舞踊　エジプト　山根蓉子　鎌

昔の川柳はなるほどと手を打たす樣な穿ちであつたが、今の川柳は感じの句が多い。

例へば古川柳では

うれしい日母はたすきでかしこまり
女房と相談をして義理をかき
女房に途中であつて先づ叱り
雷をまれて腹かけやつとさせ

などのやうな句が喜ばれたが、今の句では(新家庭を詠んだ句)

縫ふものもなく新婚のたゝ侍り
叱られて見たい新婦の心持ち
決心をして呼びかける新世帶
新妻を用はなけれど呼んで見る
出勤に我が家の朝が殘される
下駄箱がちと廣すぎる新世帶
俺が掃くわたしが掃くと新世帶
新世帶掃除に琴の糸が鳴り
これが古世帶にもなると
何時の世の女は先に起き出でて
鑄掛屋に添ふて五年の竈を見せ
醫者にでもかゝれと亭主火をおこし
夕方の膳妻になり母になり

子供又家庭でうれしいものである。

タクシーは子供のわげた手で止り
指させば父の戻つて來る姿
心配な日に撫でやる子の頭
なき寢入り見れば睫毛がぬれてゐる

家庭に於いて陰氣なのは針さしで、陰

氣な所は臺所である。そして陽氣なものは鏡臺である。

わたくしが悪いと思ふ臺所
臺所今朝から雨の手くらがり
臺所女房の智慧の出る所
お手製の鹽昆布菱に三角に
すれてゐる樣な姿で縫ひつゞけ
針仕事鮮の聲に誘はれる
陽氣な方は
はづかしい内は鏡臺きれいなり
鏡臺と机と並ぶ新世帶
鏡臺へ拔き足忍び足うつる
鏡臺へさよならをする樣に出る

斯う云ふ句を見てもわかるやうに、川柳を見てその見付け所を味つてゐるならば、日常物事に氣の配りがよく行屆き、家庭の味が一段深くなるやうに思ひます。聊か川柳家として自讃自贊をのべて終りこします。

## 人間苦の藝術

麻生路郎

世の中の仕事には派手なものと、地味なものとがある。派手なものは面白がられる。可笑しがられる。ものによれば同情もされる。それで得な樣に考へられる。地味な方は少しも樂でなく、いつも底を徹つてゐるやうで損の樣に思はれる。が必ずしもそうではない。近い例として爆彈三勇士の如き派手なものもあり、多年黴菌の研究をしてゐて名も知られずに死ぬ樣な地味なものもある。私のやつてゐることもその地味な方に屬する。川柳よりも俳句の方が地味な樣であるが必ずしもそうではない。こまかく云へばそれはその人の態度の如何にある。

川柳は滑稽なもの野卑なものであるやうに云はれたり思はれたりしてゐるが決して〳〵そうではない。その觀方には滑稽であつたり面白いものであつたりするが、その内容に至つては眞實を摑んでゐる。近頃アメリカではひきがへるを競爭さして飛行機から之を審判したり、長時間踊りぬくダンス競爭等をやつたり、到底私達の考えつきそうもない變な殺那的な享樂的な事をやつてよろこんでゐる。がしかし私たちが折角この世に生を享けたのにそうした殺那的な享樂ばかりで生涯を終りたくない。灘でお酒を作るのを見てゐますと袋の中へ入れて絞り出してゐるが、それと同じやうに私達も日々の生活から來る人間苦を川柳として絞り出すのであるしかしその絞り出された汁も段々古くなつて行くから、次から次へと更に絞つて行く。世間の人たちに新しい酒を飲ませたいと思ひ又自分も飲みたいと思へば益々苦しんで新らしい酒を絞ることに努力するのである。從來の川柳にもなか〳〵よい所はあるのであるが、文化文政以後の頽癈期からすつかり悪化してしまつた上に川柳の本質を誤り傳へられてしまつたので、それを優れた古句へ引戻すと云ふよりも、もつと一段と進んだ質のものにしたいと思ひ、その努力の一端として「川柳雜誌」の刊行を行ひ、今や百號に達したのである。

しかし斯うした努力はさきにも、述べた如く非常に地味な仕事であつて、軍人が戰爭に行く時の樣に、麻生萬歳！　とも何んとも云つて貰へないし、不幸にして途中で斃れても、號外一つ出しては貰へない。幸に今「川柳雜誌」が百號を重れ得て、それは甚だ遙にではあるが萬歳の聲が聞えて來たわけで自分としてもうれしく思つてゐる。そして感謝してゐる。これからもアメリカの蟇競爭とは違ふが芭蕉のひき蛙と川柳のひき蛙とを競爭させて川柳のひき蛙がどこまで行くか大いにやつて見やうと思つてゐる。

私の家庭に八人の子供があつた。そして夫等の子供の名前の多くが世の常の名前とは違つてゐた。男の子でロンドンと云ふのがあつた。と云うと直ぐに女の子はパリーだらうと考えられるがそうではない。男の子がロンドンだと云へば女の子がパリーだらうと考える樣な思想は月並な思想である。從つてそんな月並な思想は私達の川柳ではとらない。四女に奈那と云ふのがあるが、その名前の出た理由は「なんぞ〳〵生れきしや」と云ふ所から來たのである。大正九年の經濟界の恐慌の時生れたからである。其當時の私の句に

天井の低くさも知らず子は生れ

がある。それほど私の家は貧乏なのでもある。がしかし川柳をやれば貧乏するのかと思はれたら困る　川柳を作つたからとて決して貧乏するに限つたわけではない。ある時大阪高商時代のクラスメートが會した時百萬圓

を持つてゐるものと失つた者はあつたが自分で作り出したものは誰もゐなかつた。畑途ひの文學畑に終始してゐる自分が貧しいからとて不思議でもなんでもない。學校を出て二十年を金儲けに終始してゐる人達さへ儲からぬ金ではないか。私は貧乏ではあるが貧乏に屈しないで生きて來た。これも川柳に徹底したおかげだと思ふ。俺に似よ俺に似るなと子々思ひこれも私の句である。

私は至つて子煩惱であるからこんな句が出來るのである。（記事の都合上左記の句の人生批評はこれを省略する）

レディーメード（あはぬ口できせ）

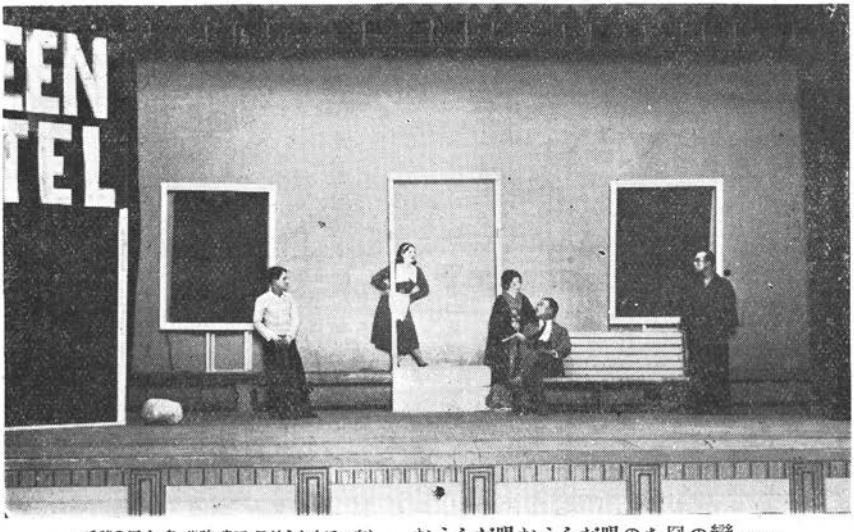
摩下に集る（雞ば）かりなり

女房のよくが戸棚でくさりかけ

要するに川柳は斯うして作つて行けばいゝのである。自分の思想をいつまでも自分で抱きかゝえて行きたい方や永く後世に殘して置きたいと思はれる方は作句に精進して戴きたいそうでないかたは、川柳を讀んで自分の人生の滋味として戴きたい。終に臨み前辯士諸君の好意を謝し、今夕御來會の皆樣に深く感謝する。（以上講演梗概）

○

午後八時五十分「川柳を語る」の講演が了ると、續いて長唄「新曲浦島」（唄杵家七代、絃杵家彌七、絃杵家七幸）に移る。



（氏諸の田山，島，谷渕，森三，居村居村か右てつ向）　かうらだ眼のかうらだ眼あの民戀の　劇喜

靜に幕が開くと一段高く取設けられた舞臺、背後には金屏風出寅者との調和が頗るよくて如何にも瀟洒な感じが漂ふ。絃は東都で名代の杵家彌七師、ばちの音は愈々冴えて聽衆を恍惚たらしむると同時に、流石に名人の至藝だと愛好者をうならせた。唄の杵家七代さんは女性に稀れな聲量の持主調律共に完璧に近い圓熟さであつた。十分間休憩。

次は山根舞踊研究所の「**こども舞踊**」

最初の兎のダンス（小高房子小高滑江）ではやつと五つに手が届いてゐるだらうかと思はれる程の愛らしい姉妹りとても無邪氣な手振り足ざりで「繪日傘」橋本千里、阪口京子の二少女も繪のやうな美しさ、花のやうな愛らしさであつた「エジプト」の山根壽子孃は若き天才舞踊家と肯かすに足る美事な演技を見せた。

最後の「水兵さん」は全員總出で、愛くるしいところ見せ、ミュージックにつれて舞ひ踊る愛らしいスタイル、リズミカルな足取りに觀衆はもう陶醉しきつた。

最後に、本會の呼び物**川柳座の喜劇「戀の罠」**あの眼だらうか眼だらうかが」開幕された。古川利隆作並演出　時憚ましき五月の夕、所輕井澤千ヶ瀧グリーンホテル。人文士淺間三郎村居勝、音樂學校學生人野善男山田健ゞがセロ會社員若狹保三森孝。その新妻杉子神谷千慧子。ホテルの女中おはや島民榮。これは路郎主幹の句をそのまゝ、劇化したもので、どんなに演出されるかは多大の興味と期待とを以つて迎えられてゐた。

俳優は何れも　新興劇の腕きゝ連の熱演であつた。

○

午後十時十分非常なる喝采裡に「川柳の夕」の最後の幕を閉ぢ社關係の人々の記念撮影があつた。（山雨樓、華水記）

# 悼茨木奈緒美

赤城晴天

まだ死ねへんぞ！

かう絶叫したかと思ふと、その痩せ細つた足で、ガバと布團を蹴上げて、ベットの上に起き上ろうと最後の死への反抗にもがき狂ひつゝ、その苦しみの呼吸の絶えて行つた奈緒美君だつた。

母のやうに優しかつた姉さんと、四人の兄弟達と私とに見守られて、悪臭の漂ふ薄暗い施療院の一室で　その最後まで生への希望をしつかりと抱きしめて多くの柳友や療友達に惜しまれつゝあたら二十二の蕾のまゝを哀しくも散つて行つた若い川柳詩人奈緒美君の短かい一生は薄倖だつた。

◇

同じ病院で然もかつては同じ病室でベッドを隣り合せに並べて來た故人と僕。僕達は友達以上の親しさに打解けゝるたいつ何處へ行くにも僕達は肩を並べて歩いたものだつた。しかしどんなに親しく打解けてゐた場合でも早くから双親を失つてゐた彼は、人一倍の寂しがりやだつた。いつも孤獨だつた。

五位鷺の一聲闇をさぐりゆく

「此の句は僕自身の姿だ。」いつかこんな言葉を洩らしてゐた彼。

議論の嫌ひだつた彼、理屈を言はなかつた彼。川柳についても恐らく誰とも議論せなかつた彼も、僕とはよくお互の句について語り合つたものだ。強情で負け惜しみが強く、一たん言ひ出した自分の言葉が通らない時には、ベッドへもぐり込んでふとんを頭から眞深く被つたまゝ三日も四日も口を利かなかつた彼。ある時は眼に涙さへも浮べて——

◇

彼の容態が非常に悪くなつて如何しても附添人が必要になつた時、僕が姉さんに來て貰らつてはと相談すると

「いや自分さへ辛抱すればいゝのだ」と涙を流して頑張つた彼だつた。

「僕は別室へ這入る位なら自殺する」

口癖のやうに言つてゐた彼も遂に別室へ入らなければならなくなつた。

彼は非常に死ぬことを恐れてゐた。その最後まで死の言葉に觸れることを恐れてゐた。悲慘だつた。現實の生活を一句も唄ひ得なかつた彼だ。

いよ〳〵危險狀態だと主治醫に聞かされた晩、僕は愚龍君を呼びに走つた。僕と愚龍君がその枕頭に佇つた時、始めてたつた一言

「支部の事を頼むわな」と言つた。

此の言葉も恐らく遺言のつもりで言つたのではなかつたらう。然し此の言葉が僕達に遺されたたつた一言の言葉だつた。

「櫻が咲いたら退院する」かう楽しい夢を見てゐた彼も嚴かな現實の前には風に散つてゆく一片の木の葉に過ぎなかつた彼の死について彼の柳友康夫君は言ふ

「僕は春の嵐のそれを感じる」と

實際奈緒美君は美しい姿のまゝで散つて行つた花片のそれだつた。

◇

支部幹事としての奈緒美君はあの体でよくあれだけ働けるなと思ふ位、當支部のために盡力して呉れた。僅か一冊の柳誌を購ひ求めるに、大きな苦痛を感じなければならない物質的に恵まれない支部會員をして、今日まで維持し續けて呉れた功績は、私達をして感謝と敬服の外ない。今はなき故人の靈に對して私達は衷心からなる感謝の辭を表したい。

◇

「三十歳まで生きてゐたい」と言つてゐた彼。

うぢんの非常に好きだつた彼。

鮎美さんの句をいつも愛誦してゐた彼

あまりに彼を知りすぎてゐる僕には、彼の思ひ出は深い。

今此の貧しい一文を彼の靈前に捧げて心からなる追悼の意を表する。

（君の逝きし二月二十三日稿）

## 奈緒美句抄

院長の年始つめたく通りすぎ

看護婦の青春寫眞などうつし

飛行機へ日光浴の立ち上り

空想へ熊笹死れとさゝやいた

石ころを金の氣で拾ふ日あり

行くとこへ行けば女の強さかな

享樂のバイオリンなら鳴らさない

プロの血と汗のお金がおちてゐる

だまつて居れば二割減だの解雇だの

夢多き男へ花の散りかゝり

占は吉女出かけてゆくらしい

失業者ハンマにおさへられた夢

逢ふた夜のバットが秋で折れてゐた

戀は知りませぬ人道主義をとき

石なげし波へみすすましもゆれる

妻も妹も豆の葉をふくろまして

泣きやんだ子の眼にタンス威壓する

まはだかの父の齒にしゆむソーダ水

鶴峯さんへ

トンボが來てゐる坊や目をあきな

はつきり言へぬ女の泣きぼくろ

入院久しくして

街の夢みてりや枕のおちてゐる

頰をすぼめて街の子が歩む

鮮人のびつくりさせて露路から出

ふとんおもたく秋の日が暮れる

風の音死ぬ空想が吹き飛びぬ

桐の葉が落ちて雀がとびたちぬ

すゝきがさ〳〵なんとなくさびし

出養生柿の落ちてる庭に立ち

言ひまけた友のまぶたのぬれてゐる

またゝけば今の心のかへりこず

土にしたしめばドングリ落ちてゐる

秋の窓ロイド眼鏡の女居る

抽斗のがたつく室に一人居る

だまつて紙幣をバラ〳〵とかぞへ

寢ころべば冬は窓から覗くなり

五位鷺の一聲闇をさぐりゆく

起きたての眼に大根の白さかな

四五日見れば混布してくる

淋しさにたへられず湯槽のけむり

十二月かされふとんの白さかな

冬の街影はちいさくなつてゆく

眼をとぢて風を聞きゐる寒さなり

十二月ダブルベットの十二月

松がさころ〳〵山の新春

夕日が出てゐる雀がたんともどる

お元日こゝろのぬくさうしなへり

雪空に鳥の胸毛が散つてくる

いつ見ても白いタオルだ

つめたい朝だ牛がひかれゆく

大阪の埃の足袋をはたくなり

アパートの晝を女の寢込んでゐ

大阪の動きのなかに投げこまれ

（前列）村華・久矣・二三・麿・人柳・之線・助・主・幹・光紫・月海・都蓼・人痴天・留保可
（列中）相雷・文泉・雀天・路苦互・楓枯・天鴉・苦正・治・二巷・詩與・琴雄明
（列後）翠升・羅門・田鶴緒・重傳・笑太郎

寫眞說明

# 各地柳壇

## 川柳雜誌創刊百號記念句會

五月二十日夜　於ちとせ倶樂部

意義ある一〇〇號記念の句會の日は來た。初夏の觸手は迫る、ちとせ倶樂部で花々しく開催せられた。前日來の雨は全く一掃せられて、定刻前から柳友諸子が續々と會場へ押しかけ一時は受附子を面食らはした程だつた。やがて互選句の披講に次で、庄萬よし君は「滿蒙の川柳を語る」と題し講演し、時節柄多感な柳子を感激せしめられた。續いて岸本水府氏が久し振りに出席され、選句の發表前創刊百號の祝辭を述べられ、次で京都川柳社山川紫明氏が同じく選句發表に先だち可重な祝辭を述べられた。而して最後に主幹路郎師は「底力」と題し有益なる講演をせられ、續いて山陰地方川柳行脚の土產話を語られ殊に出雲路に於ける諧謔混りのお話に、一同は時の過ぐるを知らなかつた。尙當夜遠く鳥取支部の中島鐵洲君が出席されたのも嬉しいものゝ一つであつた。本社から、出席者全部に合本壹册及路郎主幹染筆の手拭一筋とを贈呈し、小林ライオン商店より滴磨十打、春元商店より旅行用石鹼十打、尙カナメ喫茶店より兼題三光に賞品、各寄贈があり、かくて盛會裡に散會したのは十一時過ぎであつた。（福田鶴峰記）

出席者

路郎主幹、綠雨、鶴峰、春齊、坊茄子、鮎美、卜居、觀月、鳴玉、錦石、奇可愛、三呂、四五磨、靈壺、寬柳、小柳子、白峯、卯三、久郎、明珠、英期、機見女、方眠、世紀、一杉、沐天、夕鐘、若蛙、優四、袋川、南面子、平井紅、まさる、柳次、鐵洲、吉松、勝二、勇作、憲、敏坊、里十九、曲豆、永樂、無鬼、禿山、裸人、さだを、新水、かほる、夢裡、おさむ、紫明、鐘生、明暗子、秋壺、巴調、瓢水、變人、鳥莊、琴人、水車、呑吸、秋平、美夜路、紫水、八步、水府、砂人、芽十、秋無草、山茶花、光外、青蹄、ひろし、林、楳太郎、石皮、素月、葉平、いわを、あや美、艸樂、素人、武子、萬よし、棹二、政史、鬼丸、句林、紫風、とも坊、華水、毒仙、舟々、默平、正二、翠夢

兼題　裸　婦　路　郎選

裸婦さからはずカンバスの音　夢裡
不斷の裸婦の神にかも似る　葉平
いかめしい髭もうごいた裸婦のまへ　毒仙
嗤ふためのポーズにしてもあんまり　沐天
生活の姿アトリエに帶を解き　不明
金貸してくれず大きな裸婦の額　水府

賣りに出た屋敷等身大の裸婦　古畵　砂人

裸婦へ木の瘤隆々と盛り上り　琴人

モデルの娘はだかにならぬ日が淋し　明珠

代表は壁畵の裸体にうみつけ　紅

裸婦の像へ視線は其所を行き過ぎず　奇可愛

奥さんの抗議に裸婦ははづされる　素月

抱擁の裸婦はモデルも氣づゝなし　南面子

たて膝をすればそのまゝ裸婦でゐる　一杉

裸婦の像葉卷の後で白くゐる　華水

裸婦の像ルンペンに只水を吹き　萬よし

物思ひする頃裸婦の像の塵　破竹

ポケットに金が鳴る〜裸婦の像　同

(人)裸婦と仔猫と春の夜の壁　小柳子

(地)電燈と一緒に消へた窓の裸婦　鮎美

(天)神様を信じて裸婦は寢ぢりぬ　路郎

(軸)裸婦の歴力彼の死を悼む　府選

## 鶴　水

こゝろよき鶴噴水に目をつむり　錦石

鶴の脚灼いものでもつかめさう　毒仙

巣ごもりの鶴人間をうるさがり　明暗子

床の間の鶴へ感謝の眼な上げる　變人

酔漢へ鶴はチツトもさからはず　鬼丸

悠々と鶴の嘴迫り來る　若蛙

巣ごもりの札をかかげて鶴は留守　夢裡

鶴の繪の賛は日本をほめるなり　砂人

屋上と鶴もうす〜知つてゐる　紫水

分家のもおんなじ鶴の帛砂なり　里十九

鶴一羽大きく見へる祝もの　裸人

出つ尻も偉大であれば特選畵　琴人

鶴のゐる家かと子供知つて居り　水車

鶴の夢親にも云はず抱いてゐる　沐天

鶴が來て海一ぱいに騒がせる　たもつ

廢兵の形で鶴の畫寢なり　卯三

慶びの鶴へ醉ふてる夜の壁　鮎美

思ひ出は鶴の金糸の母の帶　南面子

鶴の眼もくじやくの羽根の方へ向き　秋壺

仲の好い鴛鴦と居て鶴淋し　同

さむらいと差しづめ鶴は見たてられ　一杉

鶴の首人語かれこれのみ下し　同

鶴の居る所へ廻る禮詣り　かほる

鶴の口三寸ばかり水に濡れ　同

信心の序に鶴も拜まれる　明珠

鶴の聲母にすがつて女の子　變人

鶴を飼ふ舊家に巡査獨り者　英朗

鴻の池鶴とも言はず通り抜け　萬よし

剝製の鶴もあるしも默し切り　同

百程はよめる屏風の千羽鶴　紫風

燈籠の苔へ鑄物の鶴の首　紫明

(五客)金借りに來て鶴の聲聞れる　素月

(同)重籠りの鶴と長屋のおかみさん　奇可愛

(同)射つた鶴兩花道がつかはれる　夕鐘

(同)祝宴の鶴は座敷に折れ曲り　沐天

(同)看板の鶴は地球の上をとび　同

(人)失業の辛さ鶴にも見附けられ　白峯

(地)パラソルの色に驚く春の鶴　明珠

(天)父の影子の影鶴の影もよし　鮎美

(軸)賣立の鶴燦然と賣のこり　水府

## 螢　紫　明選

愛の巣へ螢は淡い火をともし　素月

螢かご日永をかこつ姉妓　石皮

螢採る顔を柳に撫でられる　紫水

螢狩り都の空は赤く輝り　坊茄子

螢の灯妾も畫が淋しくて　艸樂

螢籠道頓堀は明る過ぎ　秋壺

飛越せぬ川の向ふに螢居る　鐵洲

螢籠塵のまゝなる一周忌　琴人

螢狩うかつな犬に吠えられる　無鬼

到來の新茶螢のことも書き　萬よし

夕涼み螢がとんでみんな立ち　方眠

螢の灯描けば紫色ならん　一杉

おとかしてばかり螢の男づれ　水府

螢籠迷惑そうな光りやう　水車

螢籠一つ增やして送つて來　里十九

(五客)繁昌へ夜店の螢一つ逃げ　水車

(同)螢飛ぶ道二人行き二人行き　砂人

(同)螢狩友だちと來て子を思ひ　鶴峰

(同)宿題がはかどりかれる螢籠　明珠

(同)年上の女螢を逃がすなり　かほる

(人)行末をおもふ妾に螢籠　砂人

(地)せゝらぎに果敢ない息で螢居る　默平

(天)大阪へ着いて淋しい螢籠　舟々

## 朝　綠

心境の變化に朝の靴光る　雨選

零落の餘裕朝酒のんでゐる　水府

ちぐはぐの夢につかれて朝を起き　砂人

現在あまんじ朝の靴を履き　琴人

朝がすみ氣笛が消へて行くのなり　觀月

生活の顔並び行く朝の街　夕鐘

朝の陽へプロレタリヤは食ふ事よ　萬よし

求職の當なき朝の靴を履き　小柳子

あゝ生きればならぬ朝日は昇る　山茶花

轉居して妻に淋しい朝となり　葉平

秋無草

六十の年を忘れて朝の息　勝二
目的があるのか朝の靴の音　英朗
ふるさとに歸れば朝の早いこと　袋川

膝枕　かほる選

猫板へ猫が座つた膝枕　紫朗
チャブ臺が足にさわつた膝枕　鐵洲
膝枕あまへて見たい氣が起り　坊茄子
このへんはもう蚊張がゐる膝枕　青踏
その眼鏡かけて笑はす膝枕　砂人
これが膝枕かとおもふ二十四五　水府
膝枕明日は棧敷で二人居る　楳太郎
膝枕中年の淋しさに居る膝枕　勝二
膝枕微笑と共にうなずく膝枕　秋壷
膝枕呑氣なあんたが恨めない　優四
膝枕さす彼女やせて居る　あや美
膝枕よう云はんわと立上り　舟々
膝枕弱い女になつたもの　毒仙
膝枕しても打明け兼れてゐる　沐天
膝枕花代がさしてくれてる　光外
膝枕どう切りうか思ひ　明暗子
膝枕そつと座蒲團ひきよせて　里十九
膝枕世帶持つ氣を尋ねられ　破竹
膝枕郊外に圍ふてから　秋草
膝枕旦那他愛もなく眠り　とも坊
膝枕家賃の事も話すなり　萬よし
膝枕させて父親まつてゐる　小柳子
膝枕若い妓のあんまり高膝枕　水車
膝枕十八番を誘ひ出し　錦石
膝枕銚子の數をよんでゐる　掉二
膝枕したのみんな禮を言ひ　同
膝枕よつぽど醉ふてゐるらしい　同
膝枕とろゝを食べることになり　鮎美
膝枕女は手持無沙汰なり　同
膝枕人絹だなと撫てみる　素人

文庫　互選

忍術が流行つた頃の豆文庫　世紀
カレンダー文庫の中へ忘れられ　青踏
遺言の文庫視線の的となり　袋川
零落へ文庫その儘持ち越され　寛柳
とに角もつめて置きたい本があり　呑吸

（以下六七頁へ續く）

## 本社句會

四月十四日夜　於ちとせ倶樂部

本社は百號記念を前に、春宵一刻の例會を開催主幹の挨拶岩本素人氏の講演創作等ありて樂しき作句に精進した。

（出席者）路郎、綠雨、琴人、山雨樓、新水、破柳、楳太郎、勝二、曲豆、光外、翠夢、沐天、鬼丸、白柳子、とも坊、丹路、棹二、葉平、秋無草、夕鐘、素人、一貞、二南、あや美、みつる、鐘生、いわを、夢裡、柳骨、水車、かほる、卜居、方眠、柿三、柳次、喜代路、變人、艸樂、宵火、豆秋、裸人、明三、機見女、えつを、靈壺、八歩、おさむ

兼題　幻　路郎選

幻の戀は尖つた物と知る　奇可愛
青空へわれ幻を書き出し　翠夢
幻の信ずることができません　觀月
幻へヂヤンバルヂヤンは手をひろげ　裸人
幻は裏切られたる赤い帶　山雨樓
幻に乳はいよ〳〵はりて來る　柳次
幻の如くに春の野を歩む　とも坊
幻の瞳へ落ちる紅椿　鬼丸
鐘うてば鐘に幻ある如し　水車
幻を追つた彼の女もウエートレス　曲豆
悲しみへ、まだ妻がゐる妻がゐる　喜代路
幻の女は金を出せと云ふ　みつる
幻の世にあゝあゝ錢の音がする　葉平
幻へ餘り鋭きベルの音　宵火
幻へ父の居間なる香を焚き　新水
幻に朝飯をぬく氣の弱さ　同
わがまぼろしのマッチの焰に似て悲し　丹路
幻を語れば膝を寄せてゐる　白柳子
（人）幻にまれかれ井戸へ腰をかけ　かほる
（地）幻へ春の蚊一つ横ぎれり　豆秋
（天）幻は消へて欄間の佛達　鮎美
（軸）幻の中に時計が鳴つてゐる　路郎
（同）幻がきゝのろけになつてゐる　同
（同）幻へ瀨戸内海のうつくしさ　同

席題　禁酒　山雨樓選

禁酒した膝を子供は淋しがり　柳次
禁酒とはまだ云ひ切れぬ三日間　喜代路
禁酒まだはつきりしない父で居る　いわを
そのわけを言へば禁酒はつめよられ　棹二
禁酒から生活線の面白し　あや美
献金へ禁酒の金もあるのなり　水車
物足らぬように禁酒の飯がすみ　とも坊
酒止めて宵寢するのを笑はれる　柳骨
おせつかいな林散子が老いて行く　葉平
禁酒する心を嘲ふ他人の眼　八歩
ひさ〳〵の母が禁酒を眞にうけず　夕鐘
禁酒のあしたうすら淋しく　琴人
禁酒した半年頰をつまんで見　艸樂
禁酒せよとは母云はぬ寂しさよ　丹路
酒やめて蝙蝠を見に橋へ出る　豆秋
禁酒したと活版の手紙來る　同

ふところ手したまゝ禁酒通り抜け　白柳子
髭剃つて近頃禁酒してゐます　同
禁酒した息子すつかり來なくなり　裸人
禁酒した父の晝寢を笑ふなり　同
酒やめて父の笑顔にふと淋し　勝二
ほんとうに禁酒をされて又ふさぎ　同人
(人)祈る日もありて禁酒の眞劍味　八歩
(地)禁酒して犬の頭を撫でゝゐる　琴人
(天)禁酒するまではよたつ株を持ち　新水
(軸)禁酒して煙管の掃除するばかり　山雨樓

席題　他人　かほる選

棧橋を上ると他人同志なり　豆秋
他人から見れば親切過ぎてゐる　水車
他人と他人の心齊橋の人の波　あや美
他人他人夫婦になつてる面白さ　みつる
腹立てた二人に他人が來てくれる　變人
紋附の父は他人の樣にゐる　沐天
他人皆氣の毒がつて寢てしまい　裸人
他人から盃が來る嵐山　棹二
他人とは言へぬ嬉しさ握手する　白柳子
良い氣嫌他人といふのがないのな　鬼丸
映畫館他人と他人もめてゐる　喜代路
他人皆歸つたらしい賑やかさ　楳太郎
他人から教はりて居る初節句　いわを
片戀の他人行儀にされるなり　おさむ
醉ふて來ると他人のお前などと　路郎
けつまづき他人ばかりの中にゐる　機見女
負け惜しみ深く他人の子を貰ひ　二南
迷ひ子へ他人が一人殖えるなり　同
斷つた事も淋しい他人にて　新水
親類でないを母から聞かされる　同
間違いを詫びて他人に親しまれ　一貞
石段の長さに他人夢をかけ　同
他人が櫻に醉ふてゐる晝　葉平
みんな他人だ見を抱いてれる　同

席題　軒店　互選

軒店へ何も賣れずに暮れてくる　破柳
軒店の今日は店番かはつて居　棹二
晝が來た軒店は何か食べ　機見女
ここの軒日が入りかけて店を出し　方眠
軒店は隣の水もまいてやり　素人
軒店ののれん顔役から貰ひ　かほる
不景氣の中に軒店並んでゐ　鐘生
豆炭も赤し軒店戸をあける　豆秋
軒店へ傘のしづくを氣にしられ　八歩
軒店は二人坐れぬ巾に出來　白柳子
軒店を器用に仕舞ふ乳母車　艸樂
軒店の今日の賣上げ砂ぼこり　變人
軒店の隣も欠伸してるなり　おさむ

## 川柳雜誌社篠川支部　路郎先生歡迎川柳會

創立五週年記念川柳人會

五月八日　於今市　紙屋旅館澄田羅門報待ちし日は來た。

篠川支部創立此處に滿五週年を迎へた。その間、句會の幾變相、創立當時尾添雷相氏が幹事として活躍され、引繼ぎ森田笑太郎氏の幹事となられ、更に、尼綠之助（改伊藤）君と幹事を交替された。

客年五月、綠之助君の今市轉籍となり、當然支部は、今市を中心に動くことになつた。健實に歩んだ過去を追憶し、意義深き記念大會の日だ。まさしく川柳生命線上に勇躍すべき日だ。

雨を衝いて大會に參すべく、松江、大原、八東、大社、莊原、田儀の川柳家が多數詰めかけて來る。

この意義ある大會に、本社主幹麻生路郎先生は自身の健康をも省みず、遠路御來車下された事は、日頃我等の望成つて、相まみゆるの感激餘すところがなかつた。

席上、綠之助君の大會挨拶あり、祝電の披露席題發表、作句〆切後記念撮影をなし席を元にかへした。

路郎先生の「句はどうして作るか」を前提に數十分間御講演され、大いに我等の、川柳使命上得ることがあつた。

つゞいて兼題、席題の披講、先生の御批評があり、感激、滿堂裡大會の幕を閉ぢた。

先生御寄贈の「累卵の遊び」は先生選「成長」天位華村君に送つた。

出席者　互苦路、柳人、蒼二、天痴人、久矣、枯楓、〻朗、笑太郎、蓼都、可保留、雷相、文泉、紫光、翠竹、鴉天、華村、田鶴緒、傳重、與詩雄、二三麿、雀天、海月、正治、綠之助、羅門。

兼題　成長　麻生路郎氏選

グロからエロへ鼻汁から白粉へ　鴉夫
雨にも風にも生を止めなんだ、草　綠之助
成長へ母は秘密を持つてゐる　柳人
成長の淋しき事ばかりなる膝よ　羅門
雲雀野へ笛に拔かれる麥の伸び　田鶴緒
卒業へ尊き母は老ひたまひ　與詩雄

筍が大きくなつた子が並ぶ　羅門
成長をして人並に嘘がつけ　翠竹
成長へ繼母淋しいものに見る　同
坊ちやんと未だ呼ぶ乳母へ苦笑ひ　琴朗
成長の次第々にぶつて來る　紫光
白髪二人さて成長ははかどらず　巷二
成長の俺へ淋しい父の癖　笑太郎
素情などかまわずよく伸びて育ち　綠之助
（五客）成長する草よ他所の田へ行く　蓼都
（同）ミルクよ來の粉よ成長線の異狀　鴉夫
（同）スマートにやせて處女とはなにけ　天痴人
（同）成長の順には出世して居らず　海月
（同）共稼ぎ子の成長を待つ強さ　可保思
（人）久し振りに逢へば妹の帶の巾　二三麿
（地）成長々々二世若槻をゆめみ　雀夫
（天）狹い蚊帳育つ力で母を蹴る　華村
（軸）許嫁女に見える頃になり　路郎
（同）いつしかに母とおんなじ美顏水　同

席題　男の子　尾添雷相選

泣いただけでは濟まさない男の子　可保留
男の子人には涙は見せまいぞ　蓼都
泣きぢりしてあやまりぬ男の子　鴉天
滿洲の話喜ぶ男の子　巷二
父親が叱れば默す男の子　柳人
又何か捕つて戻つた男の子　琴朗
男の子もう輕業を眞似て居り　翠竹
男の子いたづらしたき眼の動き　綠之助
云ひ張つた事を止めない男の子　文泉
父の鍬かついで戻る男の子　天痴人
叱られてまるく坐つた男の子　羅門
（七客）大將にせれば助かぬ男の子　二三麿
（同）男の子男の子日章旗　蓼都
（同）西の村東の村男の子の節句　田鶴緒
（同）春の雨友達が來ぬ男の子　羅門
（同）おとなしくする亂暴すな男の子　雀天
（同）男の子キチンと坐るので淋し　笑太郎
（同）飯事にまじる濕布の男の子　二三麿
（人）卒直にあだ名を呼んだ男の子　路郎
（地）母一人ありおとなしい男の子　綠之助
（天）男の子降らず保證をして出掛け　路郎

席題　春の月　廣江天痴人選

戀人を待つて嬉しい春の月　正治
春の月不圖出來心起させる　琴朗
春の月が醉はしたんだと思ひ給へ　傳重
春の月何と松江はいゝところ　巷二
春の月父ちやん何んで默つてる　笑太郎
春の月雫を作つて白けてる　雀天
春の月口説く男の細き腰　雷相
三十になつても惱ましいものに春の月　田鶴緒
春の月影やはらかにある惱み　綠之助
かへるがだまつてうれしい春の月　羅門
溜息をお捨てなさいよ春の月　與詩雄
春の月へお互に未だ若かつた　路郎
君と僕の影もうれしい春の月　同
（五客）モルヒネの廣告燈に春の月　蓼都
（同）春の月情痴の果の脛しろき　雷相
（同）春の月ぉい笛の音もまるい　鴉天
（同）春の月惱む男のベンチなる　柳人
（同）煙突が無風流なるぞ春の月　綠之助
（人）春の月街の屋根々々がしつまる　羅門
（地）春の月たまらないから醉だん　傳重
（天）春の月枕がへこんでゐます　羅門

席題　感　激　尼綠之助選

感激の渦の中なる聯隊旗　鴉天
感激に恩師變らず笑み給ふ　天痴人
感激の何處かへ飛び付きたい心　可保留
生活にいらぬ感激だけなのさ　笑太郎
感激も若き日のもの春のもの　與詩雄
感激の坩堝しばしは聲もなく　柳人
感激の唯固く固くなり　二三麿
感激がとう〳〵戀になりました　蓼都
感激の溜に太陽の眞赤なる　巷二
感激のあまり叫びとなつて出た　華村
感激のリズム時計の音針の音　巷二
路郎先生を迎へて
感激に知人みんなよつて來る　文泉
感激の何も云ひ得ず手を握り　鴉天
感激の高潮をして出る飛沫　雷相
感激の絶頂鼻をすゝる音　鴉天
（佳）感激へ流石女性の氣の弱さ　琴朗
（同）若き日の感激を知る五月空　柳人
（同）感激の中に林檎はむかれたり　笑太郎
（同）感激を愛馬の頰へのしかゝり　可保留
（同）みどりの風が吹く感激の青空　羅門
バットとバット感激の中にくすぼめり　笑太郎
（人）感激へつぎ込む酒さ醉ひ給へ　同
（同）おゝ青空、感激の足だ、伸びる　羅門
（地）感激その神聖さを犯すまじ　傳重
（天）鬼の眼に涙とは君よく云つた　笑太郎

席題　腕　小玉互苦路選

喧しい理窟を云ふな腕で來い　正治
腕づくで來いとは道理に詰つたか　鴉天
髯のある腕に喧嘩の腰が折れ　翠竹

廿七年愛して來たこの腕　雀天
やせ腕が續く限りやつて見る　蓼都
腕づくが利かぬ威嚴を社長持つ　柳人
ハンマー振る腕に抱られて稚兒眠り　紫光
腕と腕生活線のすさまじき　卷二
ブルジョアへやゝもすれば腕が鳴り　雷相
腕力を頼み金になる仕事　綠之助
やせた腕とは女給のからかひよ　華村
腕を拱き默々とアスファルト　海月
(五客)あの腕は俺を撲つた腕だつた　蓼都
(同)日曜を起せば腕が伸んだゞけ　鴉天
(同)この腕に抱かれてる甘い罪　雀天
(同)この腕の父といふ名でやせまする　笑太郎
(同)ひゝうゝゝゝ妻子六人ぶらさがり　路郎
(人)かひくゞる腕の下なる忍從よ　羅門
(人)戀に醉ふ男の腕が白かりき　綠之助
(地)看護婦の腕に處女のときめくる　天痴人
(同)片腕となる信賴の血をすゝる　同
(天)腕組みを解けば悲しき青空だ　羅門

## 阪大川柳會四月例會

兼題　髮　　吉本竹涯報

髮結へば十九の春もふけて見え　鶴生
髮結ふて女房機嫌をとりなほし　芳一
梳き髮の冷たく頰に來るもよし　橙舍
前掛けを脊にあてゝゐる洗ひ髮　柳秀
魔の如き髮の匂にまよわされ　双山
神經の末梢に似て髮細く　橙舍
散髮に刈りやうのある男前　柳秀
同窓會髮の話に花がさき　筑川
髮剃つて佛の膝に上らんか　芳一
洗髮打向いたまゝ子を叱る　双山
洗髮脇の下から用をいひ　柳秀
ほつれ毛が性慾的であるも朝　路生
(人)髮斷つて未練氣もない踊り　方正
(地)感情の激する端に髮がある　櫟舍
(天)櫟の髻結つて得意が一人減り　正甫

雜

ノックダウンされた樣に草に寢る　路生
まちがいに拜むのもよし鑛柩車　柳秀
吸ふ煙草だんだん苦くなる話　橙舍
おちよやんはつんつるてんの袷を着　路生
今日も又忍從の夜が追つて來る　竹涯
舌壓子母も大きう開いて見る　鶴生

席題　盜　難

盜まれた上に迂かつさわらはれる　洗塵
盜まれた當座は早う歸るなり　鶴生
出るものかなどと盜難屆かき　洗塵
盜まれた上に戸締り叱られた　同
とられゝもとるも油斷の裏表　竹涯
押し合ふて場處を取つがすゝれてゐ　芳一
盜まれた品は女房が思ひ出し　柳秀
盜難に言寄せ又の爲替なり　筑川
新聞の時價八圓と書れたり　橙舍
盜難の品一つづゝ値を入れる　路生
盜難の屆に夏の明易く　同
盜まれて居るとは知らず探してゐ　同
盜難を隱そうとする家娘　方正
盜難をしらずにもどる水入らず　同
盜まれた上に切られた裾模樣　同
(五客)盜まれてから贋物と判つて來　橙舍
狂言と知れて刑事の怒りやう　柳秀
盜難よけでもないがテリヤ飼ひ　方正
盜難を警察で知るおめでたさ　洗塵
盜むより盜まれた日の朗かさ　鶴生
(人)五右衛門が盜んだやうな騷ぎ樣　路生
(地)すられたと知ず相手を押し返し　柳秀
(天)盜まれる物とてもなき御住居　橙舍
(軸)まつすぐに歸らぬ罪か帽がなし　路郎
(同)盜難へ女中がいつちせつながり　同
(同)なかれば女房ゆゝじを盜まれる　同
(同)診察中に盜まれました電話口　同

## 萬よし歡迎句會　(撫順)

四月十二日　於福合樓　岩崎柳路報

萬よし氏から四月十一日の撫順川柳會月曜會へ來撫されると云ふ大連からのお便りがあつたのが一日遲れたので少人數ではあつたが差支ない方だけ驛頭に御迎へ致しました。視察團一行より一汽車遲れて記念撮影を濟ませ、炭坑視察後支那料理店福合樓で撫順川柳社と小生との歡迎宴を開きましたが短時間に短册の揮毫や兼題の選等煩はして誠にお氣の毒でした。

題視　察　　萬よし氏選

視察員プランと別に宵を出る　蝶古
視察團今日一日の宿を借り　雨聲
視察者へどれもこれもが有望な　醉羊
視察團一人、一人に秘密あり　三笑
ポーターに何か聞いてる視察團　柳路
驛名をむつかしく讀む視察團　同
視察團ほこりをたてて宿へ着き　十酊
視察圖らしい靴靴々ならび　同
縣人の旗は視察に迎えられ　一風

【寫眞說明】前列向つて右より十番目天弓萬よし柳路阿喜良後列一風・太樓・深・三笑・雨・聲・松・代

滿蒙へ視察が增えて春となり　同
ラプソディーを出る視察の音になり　天弓
氣にして視察今日も出る　同
露天堀視察の眼には廣し　阿喜良
云はれない事視察に聞き出され　同
視察團なる程安い莨吸ひ　深太樓
警官のピストルへも視察の眼　同
視察團滿洲狹ふ見て歸り　同
(軸)白酒の中へ滿蒙浮び出　萬よし

## 綠雨居偶會

五月十日夜　橋本綠雨報

未開地

未開地のこもりぬ水溜り(投)鮎　美
未開地に野生の花が强く咲き(投)粟　光
未開地に先づ道路が出來て來る　鶴峰
未開地の算盤玉をはじく父　夕鐘
値上りを待つて樣な未開地　綠雨

## 官幣大社 石上神官献句 (大和)

—常夜燈献納記念—

生田翠夢報

石上神官は小宅代々の產土神の關係上亡父の遺言により常夜燈献納をいたしその記念として川柳を募り四月二十九日献燈除幕式、當日厩生路郎先生の高選をうけ献句いたしました。献句に應募された柳友諸氏の御好意を深謝いたします小三冊子編纂の上御投句をたまはつた方々に不日呈上いたします

### 特別席題　祖先　路郎選

御先祖に濟まぬ思想に誰がした　天痴人
先祖から見れば當主の頼りなし　三碧
燈籠をたてゝ先祖をなぐさめる　幸村
人生の危機へ先祖の德を知り　圓角
貧乏を先祖の罪にしてしまひ　翠峯
先祖から遺言があり金があり　虹一
御先祖へ濟まぬ姿で跪き　水車
橋架けたゞけに先祖の名が殘り　新水
御先祖に中譯なき腹を立て　梅里
この子孫ゐつて先祖の名も光り　草人
みな無事でゐるを先祖の德として　翠夢
御先祖の話は愚痴となつてやみ　琴人
御先祖の自慢住友けなされる　同
出稼ぎは先祖の墓をさがすなり　水車
先祖など小さくしていゝ金の世だ　柳骨
先祖から此町に居て巾をとり　佛三
御先祖はまだ墓石にもならず　綠雨
鎗一筋の先祖なりけり世にすれる　一貞
讀みにくい先祖の墓のある誇り　棹二
先祖の盛大墓石の嵩で知れ　破柳
母はたゞ先祖へすまぬ目をはらし　方眠
御先祖は何であらうと今日の俺　鐘生
御先祖へ今日の二人は禮をする　變人
神々し祖先のゐます深山なる　あや美
赤貧のせめて先祖へ燈をともそ　卜居
家も田も賣つた男が先祖にゐ　裸人
先祖から變らぬものに池があり　夕鐘
御先祖ののれんへ疵をつけたまゝ　同
略歷の先祖足輕との話　新水
先祖にも不具者があつた事が知れ　同

御先祖を聞かれて悲し　赤い襟　神樂
そのかみの先祖は同じ藤の姓　同
御先祖の殘した田圃草が生え　豆秋
御先祖へ内證北濱まで出かけ　同
帳簞笥先祖の判と黑い肉　白柳子
金貸さぬ事に先祖の名まで出し　同
杉實つた話に母は息をつぎ　靈壺
證文へ先祖の智慧もなかりけり　同
短氣なは先祖代々からのこと　おさむ
先祖からつたわる刀値をふまれ　同
代々の家をば捨てし旅にねる　喜代路
文化へ〳〵先祖の鎗もさびてゐる　同
御先祖樣へ申上げます夜の灯　葉平
先祖代々動かぬ家の銀杏の樹　同
佛前へ父は家運を泣きにゆき　とも坊
南米へ行こう最後の墓參り　同
先祖からふたしたまゝの井戸が　同
（五客）御先祖の田畑を賣はれまだ遊べ　秋無草
（同）御先祖をおけが紙魚が一っ逃げ　勝二
（同）そんなでもいに先祖を偉く云ひ　琴人
（同）出世して遠い先祖を源氏にし　同
（同）先祖から傳はる爲筆出して見せ　豆秋
（人）僕一人先祖へすまぬ鍬をすて　方眠
（地）御先祖の筆が讀まれぬ子に育ち　勝二
（天）今更に先祖の智惠のおそろしゃ　新水
（軸）番傘に殘る先祖の何有衛門　路郎
（同）御先祖のこころを讀めば不肖の子　同
（同）晴耕雨讀御先祖の人成り　同

## 生田家献燈記念句會

四月廿九日　於大和石上神宮　朝田新水報
席題　青空　互選

想ひ出に吾れをさいなむ空青し　葉平
青空へ彼の女の姿初夏になり　あや美
青空へ大手をひろげ歌ふのみ　水車
青空へ宮司いつもの席に着き　圓角
青空へ先生の髪の白く見え　同
青空へ女給欠伸が續くなり　新水
月給の前借をする空青し　同

## ひかり集　—その七—

水谷鮎美報

### 奇緣

郊外に奇緣となりし落椿　觀月
世を忍ぶ姿となりし奇緣なる　同
おかしさは奇緣となりし火吹竹　同
ちぎれ雲奇緣でありし母性愛　同
爪の短さも奇緣だれト居　同
ほの暗きなかに奇緣の膝と膝　同
赤線を引いて奇緣の物語り　同
抱きあふた奇緣に鼻のまがりたり　鮎美
へちま棚下は奇緣の二人きり　同
生活の死線を超へた奇緣也　同

川柳雜誌社創立記念

## 西條支部句會

四月二十日　於裁判所　荒井英賀夫報
雜題　世間　英賀夫選

繼母は廣い世間をせまくする　八重女
我が金を遣ふに世間何うのこの　虹一
病院の世間話しの好い日和　非子
世間なぜ氣にしてゐるランデブー　矢舟

二人へ光る父母の目　世間の目　晴朗
プタ箱で世間の味をかみしめる　由多可
世渡りになれて女房子が二人　詩朗
世間体恥ぢて娘は餘所で産み　孤鶴
ルンペンも世間の義理は知つてゐる　虹一

兼題　原因　虹一選

嫁いなす原因人に話されず　八重女
原因をふと見付た娘の秋　由多可
原因を檢事おかしく聞いてゐる　英賀夫
原因がまち〳〵であり宵の火事　同
誘はれたそれきりでない二日酔　非子
原因はともかく此處は人通り　晴比古

席題　賞品、勞働、盃

賞品を貰うて母へ駈けてゆき　孤鶴
賞品は今日の奮闘物語り　矢舟
賞品へ息き切れ〳〵が手を延ばし　晴朗
賞品を持つて寫眞へおさめられ　虹一
晩酌の氣嫌へ賞品見せに來る　英賀夫
栄葉服二、三、が社長室に見え　晴朗
地下足袋の二ツ三ツある燒鳥屋　村雨
勞働の無理へ赤化が手を延ばし　虹一
返盃は不衛生だは酔はぬうち　孤鶴
花嫁の盃かすかゆれてゐる　英賀夫
盃を持つて話の次を言ひ　非子
嬉しさも悲しさも知るお盃　孤鶴

席題　仲居　英賀夫選

仲居ふと何思つたか立上り　晴朗
妓來る間仲居の酌を受け　晴比古
姉藝者無理は仲居へ持つて行き　孤鶴
よう肥へて四十仲居のある惱み　虹一
仲居ふと遠い故郷の子を案じ　非子

## 川柳雜誌社　神戸支部例會（神戸）

四月十九日　於八宮神社　西村明球報

兼題　春の水　明球選

栄の花が流れ小川の水も春　南耕
櫓の音ものどかに春の水の面　坊茄子
春の水お玉杓子がうき沈み　方眠
折箱が二つ浮いてる春の池　秋彦
春の水鮮婦も何か濯ぎゐる　水車
春の水自殺する氣の男がゐ　一夫
物思ふ顔と知つてる春の水　桃水
ダンサーが跨いで行つた春の水　春秋
（人）チャールストンに春の水がゆれる　鮎美
（地）春の宵待たされてゐる水溜り　九葉
（天）四ン月の陽に光りつゝ水車　一夫
（軸）勞働のあとで飲みほす春の水　明球

席題　失望　九葉選

失望をハッキリ言つた若さなり　鬼笑
大失望は動物園で芋をやり　幸村
失望の机に屆く四月の陽　桃水
失望の敷砂利ふんで歸るなり　春秋
失望へ波止場の音が高いなり　華水
（人）失望の一家少い荷をまとめ　竹風
（地）失望へ栄種の花はまだ續き　桃水
（天）失望の男やつぱり犬をつれ　繁堂

席題　前身　水選

前身を聞く二つ目の猪口をうけ　繁堂
前身を知られたくない白い足袋　秋彦
文身がまだ前身をかくさず　明球
前身を見せてマダムの襟の足　桃水
女中ふと夫人の履歴聞いて來る　竹風
（人）前身にふれて鏡をじつと見る　鬼笑太
（地）縱縞に前身はかくされる　九葉
（天）出世して昔が親しまれ　同
（軸）前身へ觸れず女の肥りすぎ　華水

席題　先　水車選

嬉しさは辨當持つて先に行き　幸村
先頭に立つて自信あるのなり　繁堂
ステッキの先へ憂鬱まだ殘り　桃水
先輩と並んで窓の風が來る　九葉
指先きへ魚の太さ感じたり　竹風
誰れよりも先に知つたが罪でした　柳骨
（軸）先發はもう飲んでゐる笑ひ聲　水車

席題　はにかみ　春秋選

はにかみを生活線へ皆忘れ　水車
病んでゐて嬉しそうなる許嫁　九葉
はにかんだ舞妓の襟へ花が散り　秋彦
はにかみへ郵便局は無愛想　繁堂
ネクタイへはにかみもなく女居る　華水
（人）はにかみへコーヒもパンも取寄せ　幸村
（地）歩るかうと云へはにかみ乍ら來る　明球
（天）はづかしい顔正面を向かされる　同

席題　駄目　互選

無駄足の予感へ土手は續くなり　竹風
沈默の瞳は駄目と動いてゐ　秋彦
掛取は駄目と知りつゝ世辭を云ひ　繁堂
駄目だつた返事は膝をついていひ　春秋
駄目だつた事を食事の後でいひ　明球

## 酒と女の會（大和）

四月一日　於翠峯居　島田翠峯報

題　酒、女、春

酔ふ程も飲めずお通夜の隅に居る　規堂

酒の香が通ふと見へし電話口　舟々
いつまでも酒のきげんの父であれ　翠峯
酒毒がどうあらうともコップ酒　同
制服を脱げば女になり切つて　規堂
プランコに座つて仕舞ふ女の子　舟々
貧乏へ次々出來る女の子　翠峯
草を摘む手元へ蛙踊り出る　規堂
しみたれた洋服で來る春最中　舟々
少々の病氣に春を見うしない　翠峯
女房も春の女になつて出る　同

川柳雑誌社　**螢ケ池支部句會**（大阪）

兼題　チャップリン　亀井愚龍報　愚龍選

失戀のステッキ重く　チャップリン　晴夫
チャーリーの眞面目を書く訪問記　青鬼
チャップリンまだ見ぬ富士へ憧れる　巻巴
國の母チャップリンだけ知つて居り　しげを
その髭だその眼だ足だチャップリン　公平
チャップリンあん巻屋の名にされる　煙太郎
（佳）と來るチャップリンに髭がない　青鬼
（同）歡迎へ頬が・びしびしチャップリン　康夫
（同）日本の酒にも酔へチャップリン　晴夫
（同）チャップリン又失戀の顔となり　靜太

兼題　家　巻巴選

湯槽から見る下街の家かすみ　松雨
我が家のいつそ氣樂な無精者　沙門
（十三年振りの歸國）
思ひ出の家紫の煙が立ち　靜太
故郷だ我家だ凱旋の日近し　魔砂夫
旅づかれやれ〳〵と知る家の味　友坊
初戀はスキートホームの夢ばかり　公平
さゝやかな我家なれども陽が當り　晴夫
惡友に家曖昧に敎へとき　青鬼
郊外の家のんびりと陽があたり　湧水
ルンペンの家の四方はムシロ張り　洋風
（佳）新家庭今日は家具師に用があり　公平
（佳）一軒家ふと犯罪を豫感する　靜太
（同）冷飯を食ふに家までかへるなり　康夫
（軸）家中が金光敎に凝つてゐる

席題　五月風景　晴夫選

鯉のぼり僕も男でありながら　鬼子
菖蒲まだ早い都會の鯉幟り　青鬼
はりきつた鯉に五月の空青し　愚龍
朗らかな鳩ぽつぽへ五月晴　巻巴
友の死へ五月の雨がけむつてゐる　魔砂夫
輕氣球五月の空が光るなり　康夫
フェルトに素足はつきり五月なり　のぼる
（佳）草を喰む牛の背中が雨にぬれ　しげを
（同）口笛へ五月の河が光るなり　康夫
（同）頑固な俺もタンポゝを摘んでいた　煙太郎
（軸）ユニホーム五月の野とはなりに

席題　大衆　互選

大衆の整理へ巡査汗をかき　巻巴
大衆へ春の埃の街となり　康夫
大衆はたゞごよめきの聲ばかり　比呂志
大衆の涙を誘ふ不如歸　しげを
大衆パンかぢる男が曳かれ行く　煙太郎
大衆をグツと睨んでさて諸君　魔砂夫

**白鳳川柳會例會**（堺）

四月二十五日　於堺市役所　南草路報

兼題　芽　路郎選

この新芽宇治は乙女の唄に満ち　喜代路
女より木の芽の香り客を引き　一柳
草よ芽よ亡き子のよはひ思はすな　美夜路
一つぼの芽にも如露使はれる　柿三
木の芽時妻子の有るをついわすれ　呑郎
この頃は木の芽づわりと年増いひ　如一

兼題　仲居　路郎選

女給をば論じて仲居氣焰擧げ　一柳
酒を呑んで政治を語る仲居なり　草路
仲居來てやつと宴會らしくなり　窓伍
失業の仲居も花に助けられ　北斗
乳哺兒のあるのに仲居手をたゝき　美夜路
枕邊で妻は仲居になる話　呑郎
其の内の仲居社長の氣に入り　文路
多數決仲居兩手を擧げてゐる　柿三
酔ふてゐる仲居に仇名覺えられ　同
（人）仲居でも致しますわと背を向け　美夜路
（地）廊下では別な心で行く仲居　慈雨來
（天）就職す母が仲居のお蔭なり　一柳

席題　思ひ出　路郎選

今着いた思出多き前任地　一柳
思ひ出を語り女給は惚れてゐる　慈雨來
家移りに出た手紙から一くさり　光外
初戀は思ひ出の記を讀んだ頃　曲豆
思ひ出もないよとほゝ笑む許り　同
（人）今日の眼はあれでだまつ話されず　柳三
（地）溜息は母の思ひ出語る時　曲豆
（天）思ひ出はたゞ罪な事ばかり　光外
（軸）あれきりになつた女を思ふ春　路郎
（同）思ひ出はさびし廊下の長さにも　同
（同）思ひ出を老妓はぢつと聞ひてゐる　同

## 川柳雑誌社 梅田支部句報（大阪）

水谷鮎美報

題 弟　かほる選

弟の氣持判らず怒つてゐ　瓦坊
弟に生れ抱負の多いこと　坊茄子
弟は今年三十六になり　觀月
兄さんの氣性を知つてだまりきり　夕鐘
弟が大人になつて戻つて來　同
弟に讓るつもりの酒をのみ　鮎美
弟はタオルしぼつてくれるなり　同
弟の緣談養子にくれと言ひ　方眠
（人）弟の方は役者の顏に出來　夕鐘
（地）分家して弟好きな嫁をもち　方眠
（天）貧乏を弟らしく云ひにくる　鮎美

題 千人針　新水選

千人針して上げなさいと姑言ひ　瓦坊
乘替を待つ間へ千人針が來る　方眠
姉と出て千人針に待される　坊茄子
藝妓らの千人針へ春の雨　鮎美
千人針子供は乳がほしくなり　觀月
（佳）嫂と千人針の手をそろへ　鮎美
（佳）千人針嫁にまかしておけぬなり　夕鐘
（佳）朝飯のまゝ千人針へ日が暮れる　觀月
（軸）日本を離れ千人針に生き　新水

題 櫻　かほる選

滿開の櫻へ團体つゞくなり　方眠
早咲きの櫻へ舞妓の指がふれ　夕鐘
櫻咲く堤に自働電話あり　鮎美
（人）舟からも櫻の中を通りぬけ　同
（地）母の旅彼岸櫻が咲いてゐる　觀月
（天）手を洗ひながら櫻の話する　同
（軸）寫眞屋に櫻の下をくゞらされ　かほる

## 京城に於ける 萬よし歡迎句會

滿鮮視察團一行に加はつて、來鮮された庄萬よし氏歡迎句會を四月十八日午後七時半より明治町牡丹臺に於て京城川柳家有志に依つて催された。席上同氏に依り內地柳壇に就ての有益なる講話を承り、一同大いに學ぶ所があつた。閉會後有志丈けが心ばかりの酒宴を開き胸襟を開いての柳談歡談に時の移るを知らず、十二時も過る頃愉快に散會した。猶同氏來城の事は十六日夜知つた事とて準備萬端行屆かなかつた事を遺憾に思ひ、且つ同氏に御詫する次第である。

兼題 視察　萬よし選

視察團不振會社に口說かれる　萬天子
視察する焦土へ愛國機が浮び　賢坊
戰跡へ今日はその氣の視察團　文丸
視察談私見も述べて終りなり　言也
工長の視察へ女工ふりむかず　勝人
儲かりそうな所を視察は念を押し　柳建寺
視察團なにかを探す眼つきなり　龍軒
視察團野心が燃えている鞄　松雨
印象に殘る視察のエロ氣分　寶六
（佳）不景氣を何處で様視察の眼　大明人
（同）視察團說明される岩に立ち　松雨
（同）柳楊を越して古城の屋根黑く　柳建寺
（同）視察團赤い夕陽を浴びて立ち　文丸
（同）視察する眼に人類の淺ましさ　賢坊
（人）友眠る焦土へ視察團靜か　同

萬よし君の歡迎宴會（京城川柳家有志）

(地)春うらゝ視察はプラン立直し　ふもと
(天)救はればならぬ命を視て歸り　賢坊
(軸)滿蒙も視察に聞けば樂でなし　言也選
席題　音　文丸
お隣はまだ起きて居るパイの音　青踏
爆音が遠く聞える花曇り　朝露
吉報を知らす足音飛んで來る　萬よし
ステージは新明月で音にあけ　大明人
新妻の靜かに朝の音をたて　喜樂
飛び込んだ音へプールは泡ばかり　龍軒
雨音もなまめく廓街の朝　ふもと
石疊その足音へ鳩が集り　今日史
(秀)足音も誤解しあつてゐる二人　寶六
(同)雜音へまだ寢つかれぬ故郷の母　萬よし
(同)京城の宵を江戸辨下駄の音　六選
席題　筆　寶
硯箱墨に馴染まぬ筆があり　勝人
どの筆も穗先が切れて十二月　青桐
惡筆にして戀人と差なし　ふもと
御無沙汰をすら〳〵筆の先へ嘘　千丈
無心狀さてどう書かう筆をかみ　文
これからの嘘が出て來ぬ筆を持ち　松雨
社長たゞ署名へ筆を執るばかり　言也
一年の筆の太さを文字に見せ　大明人
世を儚なんで筆とる夜の靜か　勝人
寄せ書に少し醉つてる筆が跳れ　喜樂
筆無精　母本當に腹を立て　萬天子
骨筆のなれぬ原紙に穴が見え　千丈
(五)先生の加筆なるほどうなづかれ　言也
(同)秘書室は筆のついでを賴まれ　文丸
(同)筆辯を面白く見る名士の書　柳建寺
(同)出養生繪筆とる日の空が晴れ　松雨
(同)醉筆に任かした紙が狹うすき　萬天子
(人)筆に難つけて惡筆筆を置き　龍軒
(地)筆まめな娘へ母親の氣がとがり　ふもと
(天)惡筆へかゝわりもなしゝ履歷　柳建寺選
席題　客
應接間言ひ分がある客が來る　松雨
珍客を今夜迎える拭掃除　勝人
旅客機になれて重役忙しい　萬天子
たぎるだけたぎつた鐵瓶客を待ち　千丈
客引が來てトランクを輕く提げ　寶六
お天氣の好い日曜を客があり　喜樂
客の下駄心さはぎをおぼへる　今日史
客足たへてエプロン乳が張り　大明人
あつさりとした客妻に喜ばれ　朝露
(人)珍客の一人に多い頭數　寶六
(地)先づ褒める物が眼につく女客　言也
(天)二三ばい呑むまで客としての世辭　萬よし

## 川柳雜誌社 鶴町支部 川柳行脚

宮岡白峯報

課題　交　際　妹尾變人選
交際へかけひきのある苦勞人　坊茄子
おつき合ひならと親爺も承知する　紅
交際のよんどころなし酒を呑み　方眠
交際に何かこんたんあるらしい　公子
交際を母は一人で心配し　永樂
交際の赤字は覺悟してるなり　鮎美
いさゝかの事に交際斷つてゐる　新水
(人)交際が大事宴會費の工面　水車
(地)交際をすまして冷た飯を食ひ　小柳子
(天)父死んで尋れて吳れる人が減り　雅幽

課題　趣　味　平井青踏選
春風に忘れた趣味を思いだし　小柳子
子供等は又子供らし趣味を持ち　一枝
女房に濟まない趣味をもつて居る　變人
處女作が當選しての趣味となり　新水
うき一つ眺めて春の陽にやける　錦石
退屈な人生趣味に引込まう　寬柳
公休日こんなところに趣味があり　白峯
弟はとう〳〵趣味に生きてゆく　雅幽
大臣の顏を集める趣味をもち　亢山
シヤボテンの趣味に溫室など造り　碧耶
河鹿飼ふ趣味へ白髮が殖えて來る　紅
趣味なればこそ柔かき人の呼吸　鮎美
結構な趣味ではあれど金が要り　方眠
(人)趣味の夕べに母を伴ひ　鮎美
(地)むかつゝて見たが主人の趣味　公子
(天)昆奮をおぼえて趣味の人となり　鮎美
(軸)月給に似合はぬ趣味を多く持ち　青踏

課題　憂　ひ　水谷鮎美選
胸の憂ひさ籠のインコに泣いてゐる　變人
賣られ來た憂ひをかくす厚化粧　碧耶
病床の母の憂ひを笑つてゐ　亢山
(人)憂もうコンパクトへ力なし　白峯
(地)憂あり落葉を踏んで一人行く　寬柳
(天)白靴を塗つて憂ひを忘れよう　青踏

## 第三回蛙柳會（大連）

三月十三日　薰居　岩崎柳路報

兼題　柵　柳路選
朝顏で柵が隱れて朝の風　虚舟

柵越へて實つた熟柿秋の色　長江
柵越に今年の菊の出來を褒め　淑朗
(秀)隣同志柵を距てて喧合ひ　薫
(軸)鐵柵を締めて支那街黄昏る　同

兼題　妻　柳路選

ミシン臺新妻少し考へる　虚舟
人妻となつて他人のやうに過ぎ　薫
育兒法妻一かどの理想あり　淑朗
(秀)新妻のお里自慢を又話し　潮
(人)女房の勝氣へ亭主さからわず　薫
(地)その頃の妻は云ふがまゝになり　長江
(天)亡妻を袴の鐵で思ひ出し　虚舟
(軸)新妻の化粧へ春の麗かさ　同

兼題　笑　柳路選

塹壕に笑聲高し勝戰　潮
赤ん坊が出來て微笑む日の續き　淑朗
笑はれる事も氣にせず厚化粧　虚舟
笑ふこと知るや默々苦力の群　淑朗
爆笑の中え噂の人が來る　同

席題　肩，火鉢　柳路選

恒例の社長の訓辭肩が凝り　淑朗
町中にかゝれば兵士肩を張り　同
求職者肩書あつて慘めなり　長江
臨月の惱み愛妻肩に見せ　淑朗
丸火鉢なでまわしつゝ金の事　潮
よく炭を掻きならしたる丸火鉢　薫
滿洲に育ち火鉢が親しめず　淑朗
奥座敷老母火鉢に丸う居る　淑朗
大火鉢暑中休暇に邪魔にされ　虚舟
引越しに長火鉢が來て午となり　村雀

川柳雜誌社

## 神戸支部々友句會（神戸）

三月二十八日　於華水居　西村明珠報

兼題　旅　明珠選

大根の花をちぎつた旅の道　華水
初旅は荷物の數に氣が疲れ　竹風
子供等にやるものがある旅歸り　春秋
乘替へ八つに折つた旅行圖　繁堂
(軸)耳なれぬ音にめざむる旅の宿　明珠

席題　不在　華水選

妻若く夫の留守を掛けておき　竹風
アリバイへたゞ吸殻のふえるのみ　春秋
(佳)おそる〳〵行けば不在をつたはる　明珠
(軸)日曜日隣で聞けば花見なり　華水

席題　傳說　春秋選

傳說の石に清水が湧いてゐる　明珠
(軸)ロケーション傳說の池青い畫　春秋

特別兼題　氣の毒　清記互選

氣の毒な一家へ二圓女文字　春秋
たしなめる眼に涙が光つてる　華水
茶を飲んで氣の毒がつてくれるなり　明珠
氣の毒な人の顏から目をさける　明珠
偽つて歸した雨に氣がとがめ　竹風

川柳雜誌社

## 塗青支部臨時句會（大阪）

四月二十六日　於塗料青年團事務所

熊谷紅報

鰹節　互選

姉を赤めて鰹節屆けられ　永樂
鰹節まだ固たすぎる仔猫にて　青踏
鰹節馴れぬ手つきへ見疲かれる　瓢水
手ごたへはリユックサックの鰹節　青踏
(秀)妹が嫁きて淋しき鰹節　光
(同)鰹節可愛い三毛が病んでなり　變人
(軸)鰹節掻く白粉の妻若し　紅

慰靈祭　瓢水選

慰靈祭又三勇士唱はれる　木馬
寢そべつて居れすうぢゃも慰靈祭　紅
慰靈祭櫻が散つてゐる　變人
慰靈祭坊やは膝に躍つてゐ　淡海
(人)亡き父の手柄を語る慰靈祭　青踏
(地)慰靈祭松葉杖が續くなり　光
(天)慰靈祭白紋付を淋しまれ　同
(軸)慰靈祭民八千萬の心にて　瓢水

健氣　變人選

健氣さはチト重すぎるつるべ繩　青踏
日常りに母は健氣な針仕事　瓢水
病む母へ稼ぐ子供の健氣なさ　永樂
出征を健氣に守る新妻よ　光
健氣さは巡査泣かしてしまふなり　青踏
母一人子一人強く生きてゐる　紅

穴　木馬選

兒の寢顏鼻の穴迄親に似る　永樂
節穴を覗く片目の疲れやう　瓢水
穴一つ〳〵ふさいで子守唄　變人
墓穴も古跡となつてくゞり見る　光
大掃除鼠の穴をついて見る　紅

兼題　窓　青踏選

ネクタイを結ぶに窓を開けて見る　木馬
青春は月さす窓へ挨拶し　悅洋
ぬか袋ふと天窓に月があり　紅
思出の窓に他人の住ふなり　光

(佳)看病の疲れを窓に捨てに立ち　永樂
(同)小さい窓藥が出來た名を呼ばれ　紅
(軸)君戀し窓から花が散つて來る　青踏

兼題　妥協　選

妥協してしまうてからを考へる　木馬
滿洲よ妥協の春よ櫻散る　瓢水
女房モー妥協の仕方馴れて居り　永樂
妥協するつもり鏡に向ふなり　變人
盃は妥協の心乘せて來る　光
(人)心配をさせまい父と妥協する　青踏
(地)妥協成り煙突男降りて來る　悅洋
(天)妥協した二人へ月が照つてゐる　變人
(軸)妥協點北極星は同じとこ　紅

川柳雜誌社
籔川支部創立五週年記念(島根)

募集吟

麻生路郎先生選

光る物でも見るやうに處女を見る　銀雪
やがて冷たき光りとなぬ彼女の眼　鴉天
鋸の齒の光りに列ぶ從順さ　笑太郎
生か是か光りたゞ眼にあるばかり　紫吻
日光へ靜脈青い手よ淋し　春秋
光線の工合に母も口を入れ　蝶古
わざとらしゆう光つた方の手で敎へ　三笑
S・O・S朝の光りを意識する　砂詩朗
立ち聞きの片手に光る腕時計　戀風
妓生の憂ひ首飾り光る　都之介
頰杖へ月光が泌む鄕愁よ　與詩雄
ルンペンへ餘り慘めな灯の光　伽詩郎
正直に言へば硝子の光りです　阿喜良
清貧を恐れず光りに恥ぢず立ち　白花子
世帶じみたへ春の光りよ　溪鶯
お光りへ母の涙のかはくまじ　新水
軍刀の光待命の閑日や　進太郎
光れるガラスに似て來る街の少女等　羅門
月光にうづくまる女のミイラよ　同
(人)春はよし光る袂と背廣服　卷二
(地)憂鬱のやり場に遠く光る水　綠之助
(天)光るものばかりで手術氣が尖り　呑海

米村あん馬先生選

五

花吹雪五重の塔を見逃さず　喋朗
五右衛門に浸り歡喜の夜が近し　郡之介
忍從の域を脫して五週年　砂詩朗
五十年こつ〳〵貯めて老ひかゝり　翠竹
飲むことに共鳴をして五人連　ごく來
見えすいた嘘と知りつゝ五圓貸し　呑海
不足稅五錢白銅一つきり　伽詩郎
戀人とセルの五月を樂しまう　阿喜良
五人目に孫より若い子が生まれ　白花子
五位鷺の一聲いづこ闇の夜の　溪鶯
町角でばつたり五年前の戀　與詩雄
五錢もう光つた錢を持ちたがり　美綱
拔毛にも氣を病む母の五十過ぎ　喋古
五圓札だけしかないと妻若し　新水
五六間過ぎて呼ばれる久しぶり　可保留
零落の簞笥の底の五ツ紋　戀風
うす暗き五燭に生きる藁仕事　二三麿
片言は五つを見せる手をひろげ　南枝
喪主五才工夫の葬儀露次から出　春秋
もう五つ冊足してから課題すみ　啞調
五十年額の皺も語り草　紫吻
人生は四捨五人にも似てさびし　羅門
五月野の空へサイレン脈を打ち　田鶴緒
地味な歩み五本の指を折り　綠之助
五分刈にして明日を待つ滿期兵　鳳蝶
五分々々といふことにして飲み直し　雀天
まだ泣くのお前五つゝよ兄さんよ　正治
五月雨かまあ遠慮なく降り給へ　銀雪
銀バスの輕さ五月の空は晴れ　鴉天
令貯めてためてと思ふも五十年　龍村
勞働歌家には飢えた子が五人　津根三
口惜しさへ五官はうめくばかりなり　進太郎
(客)十五六白粉といふものを知り　枯楓
(同)生きてゐる自覺に五官働いて　紫吻
(同)初戀の五体は燃ゆるばかりなり　綠之助
(同)五六人花の下なる懷手　青磁
(同)指五本一つ〳〵にある姿　笑太郎
(人)五穀稔つて百姓踊れず　銀雪
(地)五月闇首屋も程よく親しまれ　喋朗
(天)卒業の喜び三三五五に散り　阿喜良
(軸)十五六敎科書にない知惠がつき
(同)五進が一面白づくの世や

安井ひろし先生選

地

(人)一粒の麥轉がれり地に叛き　綠之助
(地)ねころべば地に泌む心泣く心　笑太郎
(天)地平線まるき夕の口笛や　羅門

叫び　松丘町二先生選

どん底の叫び資本家横を向き　伽詩郎
民衆の叫びにゆれる新國旗　阿喜良
煙突男パンの叫びに頑張りて　翠竹
その中の女工の叫び耳につき　有爲郎
叫ぶなら叫べと默す懷手　津根三

こはゞ〳〵と近寄るもあり叫び聲　鳳蝶　龍村
亘心の叫び血を吹く獄中記　喋朗　羅門
うなづける心がさびしあの叫び　笑太郎　銀雪
爭議團綉帝の腕が叫んでる　田鶴緒
農民の叫びを外所にネクタイよ　枯楓
叫ばんとするを看守に注意され　新水
フアッショへ叫び疲れてゐる闘士　絲之助
萬歳の叫び滿蒙の風なごむ　どく來
聲が嗄れても叫び足りない　砂詩朗
怪鳥の叫び大森林の晝　戀風
間髪眞犯人が出た叫び　同
絶叫の顔へ冷たく野次が飛び　蝶古
曉へ女の叫び寒ふ聞き　溪鶯
叫びたいけれど獨身ぢやないんです　銀雪
沖の火に聲を嗄らした叫びやら　夢二
バケツ叩いて妻叫びける山火事　松月
壓迫へ悲痛な叫び勞働歌　與詩雄
大都市の叫び地下鐵動きかけ　卷二
切齒してその雄叫びにつまされる　都之介
男叫びに血の驚いた脈を知る　紫吻
どん底の叫び波紋の擴がりて　正治
S●O●S叫ぶ力もなくなつた　鴉天
工場地何の叫びも耳に馴れ　啞調
首の豫感よサイレンは叫ぶ　雀天
行き過ぎるバスへ叫ぶも女なり　二三麿
狂人にされても叫びつゞけずば　進太郎
連呼する山の空氣に親しまれ　一寛
泣き叫ぶ女へ誰も來ずに濟み　春秋
氣狂ひのふと叫ぶ事思ひ出し　青磁
(秀逸)何事か叫ぶ女の向ふ岸　南枝
(同)叫び疲れて人絹の皺となる　羅門

(人)若人の叫び青空が應へる　龍村
(地)大衆の威厭アスファルトの風だ　羅門
(天)赤ン坊が泣き叫ぶおゝ淡しいぞ　銀雪

## つどひ　(大阪)

夕　姫田夕鐘報

夕やけがどうであらふと地下工事　水車
どこからか花散つて來る丘の夕　同
夕がすみ水車の音の聞ゆのみ　夕鐘
新妻の氣持のまゝの夕餉にて　同

## 春宵偶會　(松江)

四月十二日夜　於合同運送店
奈良井柳人報

題「六三聯隊渡滿部隊歡迎」　玲人

拍手裡と歡呼の中に發車ベル　眞沙緒
感激の涙が光る將士の眼　翠句郎
汽車に乘る將士の步調の嬉しさよ　卷二
砂ぼこり滿洲へ行く大行進　晁史
萬歳の中に雄々しき靴の音　都之介
驟々と軍旗歡呼の渦を拔け　柳人
山陰の健兒よ護國の神となれ　冬生
萬歳の聲に應へてたゞ微笑

題「ウキンド」　玲人選

同伴がウキンドまで來て鈍る脚　眞沙雄
金携げて別な氣で見る飾り窓　晁史
ウキンドの前で氣の付くコンパクト　卷二
(秀)ウキンドの春へマネキン晒され　翠句朗
(同)ウキンドの暗さ獵奇心の尖る　柳人
(同)ウキンドで見すぼらしい意識する　都之介

題「天ぷら」　柳人選

天ぷらを下宿は匂ふだけの事　玲人
ルンペンのふと眼についた天ぷらや　翠句朗
藝者屋の宵を天ぷら屆けられ　晁史
天ぷらや果て太鼓から活氣づき　都之介
天ぷらやこゝもやてるジャズの音　卷二
天ぷらの油にむせる胃を痛み　冬生

題「裾」　卷二選

裾さばきそれにも女性スポーツマン　晁史
春風に裾なぶらせて立話し　玲人
春光にまぶし裾裏の赤さなる　冬生
黑靴へぢやれ付いてゐる赤い裾　翠句朗
(秀)脇息へ伏目となつて裾さばき　都之介
(同)裾踏んで醉を氣付く段梯子　柳人
(同)愛人の部屋が間近い裾さばき　都之介

題「夢」　都之介選

人生は夢だと一人醉ふてゐる　翠句朗
虐待の夢から覺めた汗を拭き　柳人
傷心に觸れたる夢に汗を見る　晁史
(秀)夢覺めて果敢き春の宵に居る　卷二
(同)極樂に若々しくゐる父の夢　冬生
(同)駈落ちの宿で惡夢に襲はれる　玲人
(同)いつぞやの夢現實となつて來た　眞沙緒

## 明珠居偶會　(神戸)

四月三十日　西村明珠報

兼題　雜魚寢　秋彦、春秋共選

雜魚寢した頃がなつかし施療院　竹風
小便に立つて雜魚寢が馬鹿に見え　繁瑩
故郷へ雜魚寢の一人便り書き　一夫
雜魚寢した部屋の中にて表紙とれ　幸村
雜魚寢して國の話が續けられ　明珠
雜魚寢から一人が立つと寒いなり　華氏
(佳)燈明を雜魚寢の一人つゞに起き　寄舟

(同)爭議團雜魚寢のまんま撮れる　一夫
(同)珍客をもてなす術もなく雜魚寢　明珠
(同)雜魚寢から一人が蠅を追ひ　鬼笑太
(同)雜魚寢の夢へ臨檢荒く開け　竹風

兼題　親　切　竹風、鬼笑太共選

露地の人皆親切にしてくれる　春秋
親切は車をおした汗を拭き　鬼笑太
親切へ素直になれぬ身が悲し　竹風
親切な男ベンチで協がられ　明湯
沈默はその親切がいやであり　華水
(佳)親切な人へ出戻り嫁く氣なり　寄舟
(同)親切を今更知つたのが淋し　秋彦
(同)親切な人へ濟ないエピソート　繁堂

兼題　決　心　華水、一夫共選

決心の付いた同志が飲みに行き　鬼笑太
決心をした娘へ母は泣いてやり　秋彦
決心をして逢ひに行く塀つゞき　春秋
決心をすれば悲しい事であり　明珠
決心を明日に延ばして呑み廻り　寄舟
(佳)四ン月の空へ決心忘れかけ　繁堂
(同)決心へ妻は一本つけてくる　華水
(同)決心がまだつき兼ねる雨の窓　一夫

席題　飴　春　秋　選

禁煙が三日續いた淺田飴　耕人
愚痴を云ひ乍ら飴賣橋を越へ　秋彦
飴買つてやれば子供は親に見せ　竹風
挨拶に飴玉舌の裏にあり　明珠
冷し飴眞晝の路へ水を撒き　一夫
冷し飴の頃となつたアスファルト　一夫
針仕事そばで飴玉よく喋り　華水
(人)鐵兜キントン飴のメダルさげ　幸村
(地)孝へたあげくの果ての淺田飴　明珠
(天)雙六が上りの飴へついてくる　華水

席題　片假名　明　珠　選

片假名へ先生のまる大き過ぎ　幸村
片假名を拾つて見たが英語なり　鬼笑太
落書の片假名うまく書いてある　華水
十五字で電報金の無心なり　竹風
片假名のメニューへ母はせかれる　春秋
片假名の手紙に勇士泣される　一夫
(佳)鮮人の子も片假名を習はされ　耕人
(同)父の死を片假名にする輕信紙　春秋

席題　愛　華水　選

愛人へほんとに告げる內證事　鬼笑太
愛されてゐると知らずに縫ひつゞけ　明珠
戀愛を否定し切れぬ過去を持ち　竹風
(佳)愛されてみたい氣のする春の雨　一夫
(同)書置の愛と云ふ字が大き過ぎ　秋彦

席題　陣　笠　互　選

陣笠の綽名のあるは古い顏　鬼笑太
陣笠は雜誌を持つて少し待ち　幸村
勝つて來て陣笠にまで酒が出る　明珠
陣笠連淋しい驛へ下ろされる　秋彦
陣笠は廊下へ出ると胸をはり　竹風
陣笠へ平等にある握り飯　一夫

席題　馬　相　撲　吟

ピッニック馬の背中の虻を追ひ　華水
神馬今日一年ぶりの街へ出る　一夫
馬と馬並べて馬子は飯にする　耕人
戰死した大尉の馬のつながれて　春秋
凱旋の軍馬いなゝく事忘れ　明珠
馬よ滑るなアスファルトねれてゐる　竹風

## 川柳雜誌社　天王寺支部句會（大阪）

題　夜櫻、板圍ひ　豆秋報　紙上　互選

夜櫻へ午前一時の月が冴え　豆秋
夜櫻へ乞食はとんどしてるなり　裸人
幽靈のやうに夜櫻灯に映り　水車
ほろ醉へ夜櫻の風いともよし　柳村
夜櫻の下で戀もなく吐息　柳民
板圍ひ現はれ出たるビルディング　水車
昨日まで住んだ吾が家へ板圍ひ　柳村
板圍ひ金魚掬ひの灯がともり　豆秋
板圍ひ女給募集の札を下げ　同
標札を書いて賣つてる板圍ひ　裸人
板圍ひのぞけば大工とんどをし　同

## 羅門　海月　兩君を圍む會（松江）

四月廿四日夜松江驛前合同運送店に於て籔川支部同人の羅門、海月兩君を圍んで句作に柳談に、そして松江支部と籔川支部の現狀に付いて語り合ひました（柳人報）

席題　ウインク　互　選

ウインクへお前の頰がやせてるよ　羅門
ウインクの捨場に困る女給の眼　柳人
向ひ合ふ窓の日毎のウインクよ　都之介

席題　赤い灯　羅門選

赤い灯に銅貨を鳴らす悲哀あり　天痴人
酒とろり赤い灯野心を尖らせる　柳人
(人)赤い灯の下の女給の人生觀　卷二
(地)赤い灯だいに疲れたアスファルト　海月
(天)赤い灯に拗ねる個性を持つ女給　天痴人

席題—初對面　天痴人選

初對面さて乾盃でよく喋り　巻二
初對面顔のニキビが目に入り　同
初對面君と僕とになつた酒　羅門

席題　宿　直　柳　人選

宿直へ外は四月の人通り　巻二
宿直に一人ぽつちの情熱よ　海月
宿直の目覺め金庫の冷たき表情　都之介

## 大西八歩氏を圍む會（松江）

四月廿七日夜　於岩城旅館樓上（柳人報）

席題　バット　互　選

裏町の女バットのもの思ひ　巻二
満員車この洋服もバット級　柳人
失戀へバットの煙きつ過ぎて　八歩

席題　帽　子　八　選

卒業をしたと鳥打やつて來る　巻二
逢ひに行く氣持に輕いハンチング　都之助
（秀）隱し藝帽子が不意に役に立ち　汀華
（同）吹飛ぶ樣な帽子をチャップリン　柳人

席題　銅　貨　柳　人選

銅貨がたもとに鳴つて蹴まづく　都之介
（佳）駄菓子やの銅貨小供の汗を知り　八歩
（同）歡樂の戻り冷めたい銅貨だけ　汀華

席題　さゝやき　巻　二選

さゝやきに意氣投合の眼が四つ　柳人
（佳）さゝやきの甘さ汗ばむ電話口　都之介
（同）美しい女さゝやき知つてゐる　八歩

席題　笥　汀　華選

笥の衣を脱げば春の風　八歩
人間の眼をまぬがれて竹になり　巻二
笥の素直に伸びて春の雨　柳人

席題　夜　鴉　都之介選

夜鴉へ不安が募る濤の音　柳人
夜鴉のあとに氣のつく夜の冷へ　八歩
（佳）夜鴉を聞きつゝ百度詣り出る　柳人

## 川柳雜誌社　鶴町支部句會（大阪）

四月二十九日午後五時　於白峯居偶

宮岡白峯報

兼題　借　家　關本雅幽選

番頭は主家の借家に住んで居る　岩石
お宅許りですと家主今日も來る　富士雄
妖怪の噂のまゝに借家札　瓢水
借家人妥協のまんま支拂はず　同
理想はかなり借家に慣れる　水車

兼題　居　眠　妹尾變人選

かたくなゝ父も居眠りしてるなり　富士雄
居眠りの手に鐵瓶が熱つすぎる　瓢水
居眠りが慌てゝ降りる終電車　寛柳
居眠りをしてゐる机意地があり　雅幽
居眠つて居眠つて修業して居る　水車
花嫁の居眠つて居る夜汽車にて　白峯
（軸）居眠りがゆつくり出來る位置に　變人

席題　來　賓　瓢水選

折箱を下げて來賓少し醉ひ　寛柳
來賓の目にぜいたくなものばかり　小柳子
來賓を醉はして自漫話聞く　白峯
來賓は髪をいじつて無口なり　白峯
（秀）もん章を胸に來賓油ぎり　岩石
（軸）來賓の下駄に女中は氣をつかい　瓢水

席題　防　空　寛柳選

防空の月の光りも案じられ　小柳子
爆音をきいて敵機ならと思い　變人
高射砲あるのか高い高いビル　白峯
防空の今日堂ビルも默して居　雅幽

席題　砂　小柳子選

濱の宿朝一すじに銀の砂　瓢水
砂に繪を書いて初戀同志なり　白峯
砂ばこり大師まいりもつかれて居　變人
（佳）出養生砂の白さにあきはてゝ　雅幽
（同）帶解けば砂がこぼれる夢の子よ　同

## 聖城川柳會

五月三日　白花子幽

傘

傘がもつれて女の香　燕子花選
嬉しさは日傘くるりと廻される　醉羊
晴れた空胸おどらせる落下傘　雪杖
傘を見覺へられていゝ女　茶撫朗
（佳）日傘くる〳〵コツポりの音　白花子

匿　名　溪　鶯選

美しい心で秘めた名が判り　白花子
匿名にしなくてならぬ寄附の高　水玉
（佳）匿名の噂の中にゐて嬉し　吉祥

人の影　茶撫朗選

鍬ふるう影の長さに時を知り　醉羊
人影も斑らに花は散つてゐる　吉祥
人影へ暇な藝妓が走つて出　燕子花
足元がよろつく影の面白味　白花子
人影になつて無沙汰の門を過ぎ　吉祥
見直せば人影フイト露路に消へ　醉羊

川柳雑誌社 **高知支部句會**

四月十六日夜 於桝形青果樓上 濁水報

席題 光 線 紫 涙 選

紫外線 大事に座る狹い椽 春風
光線の加減へせわし點燈機 浮城
照明に再びパック拍手され 濁水
春の陽へ波やわらかに光つてる 悠羊
(人)じつとした頃寫眞師は窓を見る 濁水
(地)光線の強さへ女肌を出し 春水
(天)光線の中へ靜な朝があり 同

席題 斷 髪 春 風選

斷髪の此の頃伸ばす友が出來 濁水
靴を履くまでを斷髪しとやかに 青果
斷髪も生きる姿の日本人 春水
斷髪の素性片親育ちなり 紫涙
斷髪は呆れる祖母の手を握り 濁水
斷髪は獨りに成つて五年たち 春水
ソファーで斷髪の足伸び切つて 青果
(人)斷髪の搖ぐダンスのジャズと合ひ 紫白
(地)斷髪へ亭主の方は伸ばすこと 悠羊
(天)斷髪は斷髪らしい酌もする 濁水

兼題 幽 靈 濁 魚選

空家からまた幽靈の出る噂 川
斷末のまゝで幽靈にじり寄り 柳風
花道の莫産へ幽靈蹴つまづき 紫白
ビショ濡れになつて幽靈出ると決め 浮城
幽靈へ日本刀が役立たず 柳風
幽靈が出て蠟燭に風を見る 青果
幽靈のお乳のとてもうまさうな 兼子
(人)幽靈に成つて斷髪口惜しがり 紫涙
(地)戀人に逢つて幽靈すぐ歸り 兼子
(天)幽靈に天井面白さうな音 春風
(軸)行き屆く墓幽靈を微笑ませ (大阪)本橋坊茄子報

**櫻の造幣局吟行**

四月二十二日

花咲けど守衛の顏の無表情 坊茄子
煤煙に花曇りかと問ふて見る 同
社宅の子何とはなしに嬉しかろ 同
偶然に會へば女を連れて居る 觀月
向ふにも櫻へ酒へ醉ふて居る 同
散策のこゝには船に火をいこし 同
對岸の大阪城も花曇り 鮎美
通り拔け雀も花に來て遊び 同
嚴しき守衛へさくら散りかゝり 同
制服の人に始終を見守られ 同

川柳雜誌社 神戸支部 **部友句會**

四月二十八日 於華水居 西村明珠報

兼題 パイプ 清記互選

まんざらでない顏パイプくはへて居 鬼笑太
靨ある男のパイプ太いなり 華水
記者團へパイプ微笑みながら會ひ 繁堂
マドロスのパイプセイロン島の朝 春秋
忍術の男パイプと狹ふゐる 竹風

席題 感 心 春 秋選

感心をしてゐて買はぬ懷手 幸村
感心するおばさんにじやれかゝり 明珠
女房に感心させて頗をつき 華水
感心もしたが金融の話なり 鬼笑太
(秀)感心な女中郵便局へそ〳〵と 竹風
(同)感心をして呉れるたびに氣があせ 繁堂
(軸)感心をしてゐて話まとまらず 春秋

席題 情 熱 明 珠選

情 熱の瞳年增の太い頸 竹顧
情熱の瞳に燃え盛かる暖爐の火 鬼笑太
情熱へ只失職が怖いだけ 繁堂
情熱へ紅茶の匂ぷんと來る 華水
情熱は廻り舞臺へ續いてゐ 同
(軸)情熱の燃ゆるがまに走るペン 明珠

席題 本立、切手 互選

本立をせまくして行く講議錄 繁堂
本立の隅に小さく趣味の本 華水
本立へもう賣る本のない男 春秋
依賴狀三錢切手そへて來る 明珠
繪封筒切手きちんと張り付ける 鬼笑太
決心の程を切手にまかせたり 竹風
田舍から切手をはつてないのが來 春秋
急用へ切手すらりと並べられ 華水
親展へ切手は少しゆがんで居 同

**加古川耽柳會々報**

水田憲作報

四月二十日

席題 葉櫻、辨當

病める身の早葉櫻を庭に見る 美也光
葉櫻に强く生きよと敎へられ 光穗
普請場へみづ〳〵しくも辨當來る 光穗
汽車辨と二合の酒で櫻見か 泰山
無雜作に父は辨當鍬へかけ 美也光
辨當にして花の山和み合ひ 憲作
五月五日 繃帶、ピクニック、座蒲團
貧しい中へ繃帶妻で歸つて來 美也光
繃帶へたゞ萬歲がひゞくなり 同
繃帶を彼女が卷けばいたいなり 光穗

繃帶が物を云ふ程外科醫卷き　泰山
繃帶が取れて工手の腕がない　憲作
ピクニツク百姓もよいなと思ひ　光穗
ピクニツク失業者だと唯が知る　泰山
ピクニツク朝から母の忙しい　美也光
ピクニツク草の深みへ足が消へ　憲作
座蒲團を押し〳〵子供歸りたい　同
座蒲團を外して長い女客　美也光
座蒲團を遠くぎこちなく座り　光穗
座蒲團をすゝめる程の人でなく　泰山
座蒲團の枕の男すれてゐる　光穗

## 阪大川柳會（大阪）

吉本竹涯報

五月例會

兼題　世帶　路郎選

新世帶小遣帳が審はし過ぎ　香附子
おたがいの辯もうれしい新世帶　洗塵
淑かさ世帶破りと思はれず　方正
子の愛に引かれながらの共かせぎ　鶴生
世を忍ぶ世帶と知らでジヤズが鳴ル　正甫
退院の荷物はやがて一世帶　洗塵
パツカード物置に有る御世帶　方正
失業へグラ〳〵動へ世帶をし　正甫
緊縮とカレンダに書く世帶ぶり　竹涯
ジレツトで大根を剝く新世帶　洗塵
部屋住みの昔こひしい年となり　山彦
いつとなふ妻の手節高くなり　竹涯
たゝみ甲斐なき世帶をばたゝんでゐる　路生
世帶をば引づゝてゐる二人なる　同
新世帶おだてられたり惚氣たり　柳秀
（人）エプロンのよごれた世帶の疲れよう　同
（地）やりくりのどこで續くのだらうか　鶴生
（天）とぎ汁の一筋白く船世帶　柳秀

雜吟　路郎選

藥飲む僕にも春の日でせうか　鶴生
仙ちやんと呼ばれて年を振り返り　柳秀
目白押しに舞子ならんで畫を行く　路生

席題出産　路郎選

産婆より小聲で聞くは女なり　正甫
出産をよそに亭主の野球狂　方正
犬づくめ安かれと祈る親心　山彦
明け易き夜を難産の女なる　路生
生れた子よつてたかつて覗かれる　同
出産は男を邪魔なものにする　竹涯
（人）太郎だとうれしい聲の電話口　同
（地）不義の子と知らず産婆の手柄顏　柳秀
（天）太陽が懷ろに入り生れた子　路生
（軸）第二世をまるめこんだる産婆の手　路郎
（同）生れたんですと勤務の落着かず　同

◆記念句會「文庫」續（五一頁より）

淋しさになれて文庫へ灯がともり　秋壺
絕版へ文庫を赤で丸をつけ　砂人
大掃除文庫去年と同じこと　いわを
手文庫のふみは牡丹を見に來い　鶴峰
勿体を付けて手文庫そつと開け　鐘生
手文庫の父だけわかるものがあり　方眠
手文庫も姉とは違ふモダン趣味　水車
一切の過去へ文庫の鍵をかけ　鐘生
旅戻り文庫の埃撫でゝみる　明暗子
麗人の文庫麗人らしい色　紫水
新婚の笑ひ文庫の底から出　錦石
手文庫へ春の埃がたまるなり　觀月
妹へ文庫讓つて嫁ぎ行き　鐘生
久じ振り文庫抱へて見せるもの　柳次

## 新誌友

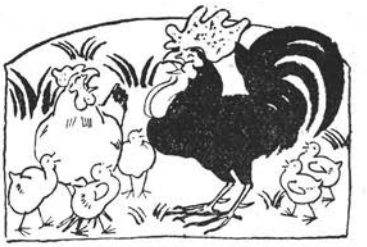
（七年五月廿二日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何來新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（綠雨）

本多藤庵、渡邊曉童、前田五健）中川知一、中野滿隆（長崎柳秀）一寸木大麓（伊藤常二）伊藤博水（熊谷紅）本田慶三郎（大橋龜雄）中沼若蛙（麻生路郎）藤田又喜（北川あやみ）揚半山、尾崎明晴、長沖重治、增田耕民、杉田湖山大西八歩、小西無鬼、辻左馬、山本銀雪、竹内機見女、杉原木三、鹽田素萠、清水虚白、紀之内稔、柳革又、宮内耕朗、竹原一久、岡田節三、北川あやみ、吉井茂代、和田天民子中西おさむ、田中光子、平岩司郎、須清、服部英三、阿部佐保園、酒井大樓、野口忠吉

## 正誤

五月號の十五頁、民郎君の句は推薦作家の欄へ混じてゐるは誤りに付社友欄へ訂正致します。



# 編輯の窓

路郎生

▼玻璃窓越しに初夏の光りが流れる。テーブルクロースの埃りが眼につく。昨日はこの机の横に、緑雨君と鶴峯君が來て坐つた。入れ代りに山雨樓君が坐つた。夜に入つて素人君が坐つた山雨樓君は夜の三時過ぎまで、談し込んで私の横で、アートのペットにもぐり込んだ。私が眼をさましてこの机の前に坐つた時にはもう山雨樓君は出勤してゐなかつた。

▼パットの煙りに親しみながら過ぐる一ヶ月を振り返へると、創刊百號記念事業のために日日奔命に疲れてゐた同人や社友やその他の人々の顔が眼に浮かんで來る。特輯號の刊行「川柳の夕」の公演、記念句會の開催を次から次へと釣瓶落しに斷行したのであるから實際その衡に當つたものでなければ想像も及ばぬ苦心があつた。

▼私などは顔を洗ふひまがなくて、二日續けて顔を洗はない日さへあつた朝食を机邊に運んで呉れても箸を取り上げるのが、電燈の點く前だつたりした。文字通りに寢食を忘れた形であたそんなにしてゐて、特輯號は遲刊の止むなき狀態で四日の午後に至つて漸く出來上つた始末。

▼三日の午後原稿の方が殆んど片づきそうになつてゐた時。三太郎氏からツバメに乘つたといふ電報が來た。出來ただけの原稿を山雨樓君に托して一ト足先に印刷室へ出かけて貰つた。私はもう中腰になつて原稿を急いだ五時二十分にはツバメが着しそれまでに印刷所へ行かればならなかつた。やがて原稿みな片づくと、自動車を飛ばした。校正室では愚陀君、丹路君緑雨君等が朱筆を握つてゐた。一ト通り打合はせが濟む大阪驛へ疾驅した。三太郎氏を迎えて歸つたが、まだ廣告の話、入場券の話、劇の話、立看板の話等々で多くの交渉が待つてゐた。床に入つたのは、三時をすぎてゐた。明くれば五月四日「川柳の夕」の當日である。松本から委員の一人としてわざ〳〵來阪した石曾根民郎君を迎えに朝六時に難波へ出たが見當らず七時に歸宅したら既に民郎君が來宅されてゐた

▼午後から三太郎君は道頓堀の方へ一人で出かけて行つた。三時に各委員が朝日會館に集會することになつてゐたが自分は雜用に追ひまくられ、民郎君を案内して漸く五時に會館へついた會館の樂屋はまるで戰場のありさまで、緑雨、艸樂を中心に各委員は大車輪で活躍した。開會の一時間前にまだ、委員中の十數氏は數萬のパンフレットを抱えて街頭宣傳に出掛けるといふ物凄い活躍振りであつた。他は押してあるべしである。

▼既定時國を十五分間遲らして開會したが入場者一千餘名、未曾有の盛會である。

▼閉會後、記念撮影。各委員は疲勞を豫期して直ちに散會の豫定であつたが感激した社關係の人々は容易に散らず、それより南地に自動車を飛ばしたが、校正室で、それより私は葭乃、七美佐と共に社賓三太郎氏の勞をねぎらうべく堺へ自動車を飛ばした。夜の大濱、燈臺のまたゝく丸萬の別館では今夜の盛會に感激した主客四人が徹宵語り合つた。

▼わざ〳〵來阪された松本の民郎君とは午前から午後にかけて顔を合はしてゐたゞけで落着いて語るひまがなくてホントに氣の毒だつた重れて會へる機會を待つてゐる。

▼籔川支部五周年の記念川柳大會へ出席するため七日の午後九時半の急行で立つた。翌朝九時半に今市についた。電報もしなかつたのですぐに緑之助君の宅を訪れた。不意うちだつたので緑之助君が非常によろこんでくれた。雨の街を鴉天君の案内でブラ〳〵歩いた加藤旅館を訪れて奮知加藤清一君が昨年亡くなつたことを知り、未亡人を寓居に訪れて久しぶりにその後の消息について語り合つた。午後一時からの會は雨が降つてゐるにもかゝはらず豫想以上の盛會であつた。幹事緑之助君の努力のほども思はれてうれしかつた。その夜は會場の紙屋旅館で厄介になつた。この家は曾てスター ル博士が泊つたと見えて英字で

書いた色紙があつた。

▼松江の松陽新報の米村あん馬氏から支局を通じて電話で鄭重な不参の挨拶があつた山陰日日からは記者の方が顔を出された日の午後一時に絲之助君、

▼翌日の午後一時に絲之助君、羅門君、加藤未亡人等に見送られて今市を立つた歸途松江に寄つて、あん馬氏、鄭之介君その他の柳友に會ひたかつたが、日程の都合で松江を素通りして鳥取に寄つた。鐵洲、耕民の兩君に迎えられ鐵洲君に砂濱や荒木又右衛門の墓所を見せてもらひ一文字旅館で夜に入つてから支部は一人々と句作に耽つた。その夜は一文字（泊つた。

▼翌日は鐵洲、暢山兩君の案内で池田家の墓所、渡邊數馬の墓所、樗谷公園を見物し、午後一時の汽車で歸途についた。今市でも鳥取でも柳友諸君に隨分と迷惑をかけた。近來健康を害したのでも皆を淋しがらせたことは遺憾であつたが、自分としては十二分に好意をうけることが出來た。有難う。

▼歸阪してからは「川柳の夕」のあと片附けと、二十日の記念句の準備で相變らず多忙だつた。

▼五月二十日の夜は心交社主催の川柳のアーベントに招かれて、川柳を語つた。私の話の前後に、山根の「こども」舞踊を入れてもらつた。こどもとつきあつてゐると肩が張らなくてもいゝ。私は十數年前の少國民新聞時代に歸つたやうな氣持がして愉快だつた。

▼特輯白號は非常に好評で迎えられ絲雨君もよろこんでゐる。私としては絲雨君の不斷の努力に酬るためにも賣行きのいゝことをのぞんでゐるが、そうするためには編輯の努力もさることながら、愛讀者を殖やして頂くに限ると思つてゐる。その點よろしくお願ひたい。

▼本號のお讀物としては「武玉川列篇研究」がある。評釋の權威秋農屋、東魚、省二、三氏の講評で引續き掲載することになつてゐる。特に御愛讀をのぞんでゐる。

▼素人君は初心者の參考に資するための「句を挾んだ對話」を書いた。樂に書いてあるが益する點が多いものと信じてゐる。

▼蛍ヶ池の赤城晴夫君は「悼茨木奈緒美」を書いて若くして逝つた川柳詩人の冥福を傳へてくれた。生への執着が如何に強かつたかが偲ばれてそぞろに涙を誘ふものがある。彼の肉體こそは滅んだが作家奈緒美の句はいつまでも〳〵亡びないだらう。

▼本號には多くの寫眞を載せることにした。いろ〳〵の意味で尤もいゝ記念だと思ふ。

▼白河の大谷五花村氏の御祖母が四月の二十二日に逝去された哀悼の意を表す。

▼瀧明、草明の兩氏の旅信——湯崗子溫泉に「湯加減へブルジョアになりきつて夏」瀧明、「アカシヤの香に靜默の氣が觸れる」草明。

▼淺田博士は下筑後町へ居を移された。毎火曜日午後七時半から EsP. Parolada kunsido を開催の由。

▼前田雀郎氏案の川柳趣味の浴衣が東京市小石川區初音町四番地川柳趣味普及會から發賣されてゐる。古典越味の衣を纏つて夏の夜を過すのもいゝだらう。（價一圓八〇錢、送料一四錢、書留二一錢）

▼金澤から寄書が來た「金澤で大變醉つて居ます」と白河から全圍町村長大會へ出席したわが五花村氏が北國川柳會（五月十八日）にのぞんで醉筆を飛ばしてゐる。久流美氏は隅に一公園でうつす寫眞のうつりなる」の一句ものゝ「大會の節は失禮しました」紅の花「その節は失禮致しました」今雨といふ眞面目に醉つてゐるのもある。その他銀波樓、旭洋、木偶人、素山、たし路、一瓢、三艸人、白羽の諸氏の名が讀めた。

▼「川柳ひづめ」の木兒坊氏一派と有石氏一派と合して青森川柳社から柳誌「川柳隊」が刑行されさうだ。健全なる發達を祈る。

▼川柳「うきよ」（東京）の伊藤瑤天氏から私の漫顔？を送られたオールバックから類推すると、ころによると前號の寫眞を漫畫化されたものらしいが私より五花村氏の方に近い。尤も五花村氏と私とは一寸似た點もあるから似てゐないこともない。愚妻の說では、口や髭は松窓氏に似てゐるそうだ。あの寫眞は數年前（私の鳴尾時代）に上京した時、虎の門の有田寫眞館で撮つたものである。

▼昨年十一月自動車に觸れて急逝した武智彌生君の遺稿「彌生集」が令兄野中水村氏の手で刊行されて一部寄贈をうけた。曩に物故した辰巳籬楓君の「籬楓集」の如くフラス鐵四六判の堂々たるものではないが共に愛弟思ひの涙の結晶に成つたものである點、俳句から川柳への道を辿つてゐる點、默々として作句してゐた點等に共通點がある彌生君は籬楓君より古い作家で柳雜誌の投句家としても古い句會へもよく顔を見せてゐたゞけに同君の不慮の死を一層痛ましく思ふ。しかし何れは死すべき人世を深思する時君の如きはよき兄を持たれた幸福な弟であるとも云へるだらう。謹んで悼む

## 投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
▼光耀抄は女性作家に限る。
▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
▼締切は嚴守されたし。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

## 募集

### 第九卷第八號課題

六月五日締切
（各題十句以内）

▼腕　前田五健選
▼波　松丘町二選

### 第九卷第九號課題

七月五日締切
（各題十句以内）

▼黄昏　長崎柳秀選
▼眞相　阿部閑生選
▼屑　西田艸樂　福田鶴峰　共選

### 毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選
▼光耀抄（雜吟廿句）　麻生葭乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

## 社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

## 定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

## 廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼御希望により集會郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年五月廿五日印刷
昭和七年六月一日發行
第九卷第六號
（毎月一回一日發行）
編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎
發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番
事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）五森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

# 川柳雜誌社關係の人々（いろは順）

## 賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　國枝史郎　長崎柳秀　藤村作　藤本卯之助　赤井清司　淺田一　末弘嚴太郎　伊藤彦造　森藤里好　東魚

大島濤明　大谷五花　村岡三面子　龜井花童子　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　吉田清　岡鳥平　田村孝之介　窪田銀波　樓　安川久流美　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　古里一歩

## 社友

岩垣奇可愛　伊藤綠之助　生田翠夢　石曾根民郎　市塲沒食子　西村山月　西村明珠　上野錦水　中澤濁水人　中野裸陽　三好計加　村松夢裡　桑原雨遂　白井梅太　山本日野華水　小谷鮎美　上下松　小柳子　位汀柳　京姫田夕鐘　平井蒼　日野華水　妹尾變人　須崎豆秋　阿部閑生　關本雅幽　萬よし　庄

## 編輯局（同人）

伊藤愚陀　橋本綠雨　安井ひろし　山本丹路

## 同人

中西おさむ　辻井登美坊　左馬　田中都之介　吉田水車　櫻井圓　北山悟梧郎　高橋かほる　麻生葭乃　中見光路　島鐵洲　住田亂耽　永田里十九主幹　酒井駒人　麻生路郎　田光穂　木村晃卓　喜多春秋　坂井拓水　龜井愚寵　片桐靈星　大西八歩　楊井二南　田鶴峰　福田久水　阿形一杉　越田岩崎柳路　熊谷紅　朝田朝陽　西田艸樂　岩本素人　福田山雨樓　松丘町二　松盛琴人　西杏三

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪庁）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事川村　觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事龜井　愚寵
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
筑川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村晃　卓
堺支部（堺市）幹事八木　均
松山支部（松山市）幹事坂井拓水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事田中都之助
塗青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫

## 道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）


**古本は**

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

**公立社書店**

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

**カナメ喫茶店**

朗らかな心と愉快な顏は
カナメ喫茶店より
大阪市南區疊屋周防町
東入南側

初夏の夜のそゞろ歩きのおついでにお顏をお見せ下さい—葭乃
大阪市西成區玉出本通
三ノ三六（仲小路）
喫茶店 **キング**
電話 天下茶屋 二五七九番

**短冊頒布**

筆者 **麻生路郎先生**
上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし（句の希望の方はお知らせ下さい）

**申込所**
大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社事務所內、短冊頒布係

**社告**

本社の例會案內希望の方は左記へお知らせをお願ひます
大阪市天王寺區北河堀町六三
會報係 福田鶴峰宛

**綠雨居偶會**

六月七日午後六時半より
兼題「辨當」
會費 不要
本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。
別に案內狀は出しませぬから御遠慮なくお越し下さい。（綠雨）
場所は住吉區平野西之町八三
（市バス平野線クマタ停留所下車東南約四丁 市設住宅）

**懸賞川柳募集**

題「守備」 路郎選
六月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句謝を呈す
▼投吟
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
**化粧新聞社**

**社告**

**川柳手拭** 路郎主幹
の染筆 一枚 金拾五錢
（送料共）

# 清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寝る

摂津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月廿五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和七年五月廿五日印刷納本　昭和七年六月一日發行

川柳雜誌　（第一〇一號）

定價　金三拾錢

養榮の髮毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髮

伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店藥品粧化名有國全